
スペ恋スル少年少女

有森良太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スベテ恋スル少年少女

【NNコード】

N5560D

【作者名】

有森良太

【あらすじ】

かつては夢見た華の高校生活があまりに退屈極まりないものだと知り、平凡な主人公・南スグルは学校生活を謳歌するために恋をしようと決心する。しかし友人の佐野アキタカに出し抜かれるばかりで、自分の恋は一向に進展しない。そんなある日にアキタカの繋がりから下級生との合コンが開かれ、そこで出会うひとりのボーイッシュな少女に恋をする。コメディーが主の学園ドラマですが、意外にシリアスな部分もあります。一話3000文字ずつ程度で更新性描写のあるR15指定箇所：第十四話・第二十四話。

まるで工場のようだと思つ。刑務所のようでもある。

毎日が同じことの繰り返しで、進展がない。あるように見せかけているだけだ。実際のところ、僕はこの学校に100年間在籍している。100年2組、ミナミ・スグル。出席番号9番。身長170.5センチ、体重54キロ、視力右目1.0、左目0.7。前学期の成績、おおむね良好。ただ繰り返されるだけだ。試験と身体検査と授業とマスターべーション……。僕は時空のひずみに巻き込まれてしまつたのだ。迷路の出口は、また別の迷路の入り口にすぎない。正真正銘、100パーセントの恋愛でもしない限りはそこから抜け出すことはできない。

今そう決めた。僕は恋をする。もちろん作られたものじゃない、本物の恋を。

「うるさいよ。なにぶつぶつ言つてんの？」

田を開けると、そこにはふたたびコンクリートの牢獄が姿を現す。前の席に座るアキタカは背もたれに肘を置き、一いち方に怪訝な顔を向けていた。

ときどきアキタカの顔を見ると、損な奴だなと思うことがある。男らしさをぱりした性格をしているのに、顔が女の子っぽいという理由で上級生にあしらわれまくっているのだ。下級生にはムカつくほど人気があるけど。

「落ち込んでるのに気づかってくれないから、実際に悩みを口に出してみた」

「あつそう。じゃあ次からは頭の中で唱えてくんないかな」

「そしたら誰も気づいてくんないじゃん

アキタカはため息をひとつ、世界史の教師が黒板に文字を書き連ねているのを確認してから、僕の方に身を乗り出す。

「で、なにを悩んでるひー？」

アキタカは頬杖をつき、口元を緩める。基本的には他人の世話をやくのが好きなやつなのだ。

「学校がつまらない。もう死にそり」

「おれもだよ。みんなそつだろ。でもどうじょつもないじゃん」

「どうして？」

「バツカ」

アキタカはそう言ってから、自分の声が大きすぎたことに気づき、また黒板の方をちらりと確認した。しかし目を向けたのは隣の女子だけで、先生がこちらに注意を向けた様子はない。アキタカは声を落とした。

「ここで学校辞めてみるよ。今の世の中、高校中退者なんか悲惨なもんだぞ。たかだか学校を辞めたってだけで、前科者みたいな見方までされる。就職どうすんだよ。まともなところは中退者なんかとらないぞ」

誰も彼もが就職という句を出す。なんて夢がないんだろう。

「どうやらアキタカは勘違いを起こしていいないので、訂正してやることにした。

「別に学校を辞めたいって言つてるわけじゃないよ。ただ学校がつまんないって言つてんの」

「だからおれは我慢しろって言つてんの。そつするしかないって。もしくは……」

「もしくは？」

「もしくは自分でおもしろくする。つて言つても、そんなうまくはいかねえけどな」

首を振り振り、アキタカはまた元のように前を向いた。おもしろくしようとして失敗した経験でもあるのだろう。やっぱり恋でもして。

ここは千葉県立川原石高等学校。大抵の人間は「カワラ」とか「カワ高」なんて呼び方をする。最寄り駅から学校までの馬鹿げた距離なんかは、どこかの人気ライトノベル誌とそつくりだが、ここには宇宙人も未来人も超能力者もいそうにない。あるのは県大会に進めれば万々歳といういくつかの運動部と、パツとしない連中のそろつた文化部。制服はこのご時勢に学ランだし、当然女子の着ている紺色の制服も言うことなく地味だ。生徒の数は大体ひと学年に160人というところか。

そりやもちろん、入学した当初はこんな冴えない学校でも希望を感じたものだ。高校生になつたという自覚、これからは学園ドラマのような日々が自分を待ち受けているのだとひそかに心躍らせたあのこと。だが待っていたのはなんだろう？ ひたすら繰り返される毎日、男は部活中毒者かぐうたらかヤンキーくずれ、女共は船橋北高校の連中にしか興味を示さないし、携帯電話を持ち始めてから一年、未だに番号登録者数は20を越えていない。発信履歴と着信履

歴の半数が母親と姉というのは健全な十六歳の少年にとつてはけつこの氣の滅入るものだ。

『シコーシャンクの空に』といふ映画を観たことがあるだろうか。そこに登場する人物たちは多くは終身刑を食らつたならず者たちなのだが、やがて刑務所で過ごす年数が長くなると、いわゆる施設慣れをしてしまう。あまりに長くいすぎたために、刑務所が我が家になつてしまふというものだ。

例えばモーガン・フリーマン扮するレッドはいつも言つた。

「終身刑はまさに身の終わりだ。人間を駄目にしちまつ」

まさしくそのとおりだろう。そして学校というのも、果たしてそれに近いものを持つてゐる。七歳の子供がこれからの一〇年十五年を考えるとしよう。つまりは小中高、それを越えての大学生活。それは永遠に近いものではないだろうか。どんなに強い志を胸に抱いていようと、途中で棄権しようと見えなかつた者があるとすれば、それはさすがに嘘というものだ。アメリカの哀しき文豪、スコット・フィッツジェラルドの言葉を借りるとするなら、「追い求める者と、追い求められる者がいるだけだ。休む暇もない者と、飽いた者がいるだけだ」　要するに、この僕もなにかを始めなくちやならないのだろう……。

「そんなに言つならなにか始めてみればいいじゃん」

下校の時刻、仰々しい筆体で「千葉県立川原石高等学校」と書かれた門柱の下に座り込みながら、また女子のスカートにちらちらと視線を送りながら、気のない感じでアキタカはそう言つた。

「例えばなにを？」

「部活とか」

「嫌だよ。めんどくわー」

部活に入っている連中が口をそろえて「う」と我慢ならないものがひとつある。『就職に有利だから』。そんなものを聞くと僕はめつきりへこんでしまう。これから何十年とうんざりする未来が待ち受けているのに、その半分の半分しか生きていっていないうちにどうして未来を決断しなくてはならないのか。

「ちっ、見えたと思つたら中に短パンはいてやがつた」

アキタカはそう言つとのろくで立ち上がり、体を伸ばして睫毛の長い怠惰な目をじりりと向けた。

「もう帰ろうぜ。なんかダレちゃつた」

「田舎ての日下部先輩はもういいの？」

「いいよ。どうせ見込みないんだもん」

「どうして？」

「バスケ部の三年といイカンジなんだってさ。どうでもいいよ、もう

う」

しかしアキタカがどうでもいいと思っていないことはその後姿からにじみ出していた。僕が首を振り、通学路に一人そろつて歩き出そうとしたそのとき、一人の女子が横合いから足並みを揃えて僕らの前に立ちはだかった。下級生だ。ひとりは純潔そのものといった感じの見目麗しい一年生で、もうひとりは異様に化粧が下手。まるで古代エジプト人の壁画から抜け出してきたみたいだ。僕は思わず半笑いになってしまった。

「なに?」

アキタカの冷ややかな声が心に刺さる。ここへ、本郷ヒト級生には冷たい。

「……あの、番号教えてもらえないか」

もじもじしながら、純潔ガールがアキタカに囁いた。そのとき僕もクレオパトラと田代が合った。意味のない笑いがお互いの顔に浮かぶ。おいおい、せめてもう少し人通りの少ないところでやってくれよ。

「番号?」

「ケータイの番号を……」

しまいまで言え、しまいまで。アキタカも用件はわかっているはずなのに、そこまで誘導してやらないからひどい。どうだな。僕的に純潔少女は申し分のないルックスなのだが、しかしは僕という物体そのものが目に入らないらしい。

「ケータイの番号を、なに?」

「あの、ケータイの番号を……」

「だから番号をなに?」

「」のままじや泣き出しちしまつんじやないか? そう思つて、僕が一步あゆみ出た。

「ケータイの番号を教えてもらいたいんだよ」

そんなことわかつてゐ、とこつ感じの田代だつた。三人とも。

「悪いけど、ケータイ持つてないから」

「え？」

思わず声が出てしまった。あんたケータイ持つとるでしちゃうが。それどころか上級生の番号を訊きまくってるでしちゃうが。しかしそうとは言えず、アキタカの鋭い目がこちらに語りかける。おまえはなにも言つなかつた。

「そうですか……」

一人が落胆している様子を見て、氷の心も少しほれみを感じたのか、しばらくして「そのかわり……」と切り出す。

「こいつの番号教えるよ。なにか用があるんだつたら、こいつに言って

「ええ？」

親指で軽く人を指差すな。下級生の前でこいつ呼ばわりするな。僕は「ちよつとごめん」と下級生一人に断つてアキタカを少し離れた場所まで誘導した。

「なんでおれが番号交換しなくちゃいけないんだよ

「え？ 別にこいつじゃん」

よくねーよ。

「よくねーよ。阿呆か」

「だつてさつと言つてただうつが。恋したいつて

顔が真つ赤になる。やっぱり聞いてたんじやないか。そういうこ

とはあまり公然と言い放つてほしくないのだが。

ここは思い切ってしつかり説明しておいた方が後のためにも得策だろう。

「おれが言つてるのはちゃんとした恋愛なの。村上春樹の書いた『ノルウエイの森』じゃないけど、100パーセントの恋愛がしたいんだよ。沸点に達するくらいの。……適當な子を選んで付き合つなんて、おれにはできん」

「おまえがなにを言つてるのかさっぱりわからんが」

「うまく言えないけど、とにかくこんな風には　ああ、もういいよ。諦めた。わかったよ。でもケータイがないことなんてそのうちバレるぞ」

「別にいいよ、バレたつて。誰が困るわけじゃない」

気まずさとは常人の神経に生まれるものであつて、ここには縁のないものらしい。味方でよかつた、というのは変な話だが、どうして下級生はこんな男に惚れるのだろう。あとあと苦労するだけなのに。

そんなわけで僕は下級生一人と電話番号、メール・アドレスまでを交換し、ときどきやけにテンションの高いメールが自分宛でなく届くといつ、まったくもつて迷惑極まりない役目を担うことになつた。まあほとんどの返信は僕がアキタカのふりをして送つたのだが、さすがに心が痛む。

「ハートマークは付けるなよ。勘違いられるから

「はいはい、わかつてますよ」

しかしこの僕に任せるとは愚かな男だ。一週間後には下級生全員と付き合つてることにしてやるつ。

<・、百度恋愛>・、……第一話（後書き）

サブタイトルの「百度恋愛」とこののは本作のタイトルと同じで
しようか迷ったものでした。
でもやつぱりこっちの方が合ってますよね。ゲームとかぶつちやい
ましたけど。

私立船橋北高等学校、通称「フナキタ」はスポーツの名門校である。日本有数の名門校だといつても差し支えないはずだ。生徒の九割五分までがなにかしらの運動部に属し、そのうちの半数がいくつかの学費免除、そして一握りがなにからなにまでを免除される上、授業中は教科書の代わりにキャッチボールに筋トレと、まさにスポーツづくりの学校である。一部の生徒は入学と共に顔パスで大学まで進むことができ、あくまで噂ではあるが裏金すら支払われているというから驚きだ。

実情を知らない人間が想像するところでは、体育会系らしい規律ある私立校だと思うだろう。しかし実際のところ、生徒はやりたい放題だ。中でもひどいのはやはり特待生で、年がら年中制服のまま街をふらふらしている。なにせフナキタの制服を着ているだけで女が寄つてくるからすごい。カバンから練習着でもちらつかせておけばなおよしといふところか。連中は授業に出なくとも出席したことになつているし、教師も学校の宝とあつて手が出せない。多少の不祥事はブランドを守るためにもみ消される。

そんなわけで、フナキタでの学園生活は天国とも言える……あくまで僕の想像だが。

休み時間に女子の輪に近づいてみればわかることだが、「フナキタ」というフレーズが出てこないことはまずない。優子がこの前フナキタのサッカー部と……私も昨日野球部の竹下くんからメール入つて……。こんな話を毎日のように聞かされてみて欲しい。それだけ力ワ高の男子は自信を失つてしまうというものだ。

さつきから三年生が歩いていないかと渡り廊下を見下ろしているこの男を除いては、ということだが。

「よくもまあそんなに集中できるもんだね」

僕の声にはつと我に返り、アキタカは少しだけ顔を赤らめる。

「別に……いいだろ」

「どうしてそんなに年上がいいかね。あんなにかわいい下級生がたくさんいるというのに。……もしかしてマザコン？」

「ふざける。おまえは大人の女の良さがわかつてないんだよ」

もちろん、本当の大人からすれば、十七・八なんていうのは小娘だろう。しかし年下からすれば全て大人の女だからおそろしい。

「大人の女ねえ……」

気の滅入る校舎も、廊下がりだけはやはり気持ちのいいものだ。誰か気の利いた生徒が廊下の窓を全て開け放したのか、そこから抜けてくる春の風、新緑の匂いが校舎に満ちている。たらふく弁当を食べたあとということもあって、どこか生徒たちの目はうつとりとするようだ。隣の男はまた別のうつとりとした表情を浮かべているわけだが、それはそれとして。

「あ、西田さんだ」

アキタカがつぶやいたので僕も渡り廊下を見下ろしてみた。そこには背の高い、髪を後ろでくくった上級生の姿がある。掲示板の前に立ち止まり、なにかを確認しているようだ。胸の大きさがここか

ら見ていても立つ。

「おつぱい先輩だな」

「黙れ。卑猥だ」

「語呂がいいと思ったんだよ。つておい」

呼び声とじかず、アキタカは早足で階段の方へ歩いていった。しばらくすると渡り廊下に見たことのある影が登場する。やれやれまつたく。

話している内容がわからずとも、はつきりとわかることが時にある。アキタカと西田さんとの会話がまさにそれだった。始めの一三言は双方とも明るく言葉を交し合っていたのだが、すぐに気詰まりになり、これという話題も見つからず不恰好に沈黙する。アキタカはどう見ても受け身な人間だ。そんな男が経験値もないのに相手を自分の世界に導こうとして、成功するわけがない。相手がよほどの熟練した攻め手でもない限りは。ひょっとしてアキタカが年上を求めるのも、そういうものが理由なのかもしれない。

漫画のように肩を落として彼は帰ってきた。心なしか顔が赤白い。僕は吹き出しそうになるのを必死でこらえながら、アキタカの肩に手を置いた。

「もつと経験値をつむんだな、頑張れ若造」

「……うるせえ」

声が小さい。なにもそこまで落ち込むことはないんじゃないかな?

「帰りにチーズバーガーおじりてやるよ。玉碎記念に」

「別に玉砕してねえよ。今日は先客があるんだって」

「先客?」

「フナキタのバスケット部と合コンだとよ。……西田さんははもつと清い人だと思つてたのに」

なるほど。それでこの落ち込みようといつわけか。

僕は咳払いをひとつ、言いたいことを頭の中で簡潔にまとめる。

「この世に絶対のルールが一つある。第一に、フナキタの制服を着てればブサイクでももてる。第二にそんなフナキタとは女を争うなかれ」

「あいつら最低だ。どうせセックスがしたいだけなんだろ」

ブブツ。まるで男にさんざん弄ばれた女の最後の捨て台詞のようだ。

「まあまあ。ほら田下部先輩がいるぞ」

僕の声にはつとしてアキタカは窓の外をのぞき見た。すると見田麗しい田下部京子の肢体がそこにはある。まさにパー・フェクトだ。背中まで伸ばした茶色がかつた艶のある髪、くつきりとした目鼻立ちにくわえ、絹のように白い肌。手足は長く細い。彼女の存在があるだけで、午後の校舎が狂おしく活氣づく。これほどまでに太陽の似合う女性を、僕もアキタカも見たことがないだろ?。そこには恐怖の念すら覚える。

あれほどまでに手当たり次第上級生に声をかけているアキタカが、田下部先輩にだけはなかなか声をかけられないのもそのせいだ。大抵の男は尻込みしてしまう。悔しいことだが、彼女にはフナキタの

特待生なんかがよく似合つ。本当に悔しいことだけれど。

「……あまりに美しすぎる」

感情がこもりすぎでいて気色悪い。僕は奴と日下部京子のあいだに窓というフィルターを通すが、それも効果はないようだ。授業が始まると言つても聞く耳を持たない。こんな奴は放つておいて、先に教室に帰るとしよう。

担任の東野教諭はとかく人の良いことで知られている。そのせいか生徒にはなめられっぱなし。教師で人が良いといつのは決して得なことではない。相手は簡単に言つて子供だ。なにがあつてもなめられるようなことがあつてはならないのだ。

そんなわけで、帰りのホームルームともなると、お喋りからお菓子、果ては断りもなく電話をし出すものまでいる始末。東野教諭はそれをなんとかまとめようと一応の努力はするのだが、ひとり虚しく笑つてなにごとをつぶやき、事務的にホームルームを終わらすのが常だ。今日もまたそのとおりで、帰りの挨拶を終えたあとの後姿が寂しい。

「さーて、帰るつぜ」

僕が立ち上がりかけると、アキタカは叩きつけるようにノートを机の上に置いた。

「待つた。これ提出してから行こうぜ」

「そんなものひとりで行きなさい」

僕がそのままつと、アキタカは含み笑いを浮かべた。意味ありげにこちらを見つめる。

「ふうん。いいのかな、そんなこと書いて」

「は？」

「物理の恵子先生に会えるチャンスだぞ」

南恵子先生。僕と同じ名字である彼女は僕の血縁でもなんでもないのだが、まだ若く綺麗であることで知られている。絶世の美女というわけではないのだが、身を包む見えない余裕が生徒たちに好かれている。さる男子が猛烈果敢にアタックしたことがあるのだが、それを簡単にいなしたというから凄い。とにかく一枚上手なのだ。

そんなわけで僕としても恵子先生とのお喋りは嫌いではなかつたので、アキタカの用事に付き合つてやることにした。職員室に顔を出すとまだ先生は物理室にいると言われたので、僕らはコンコンとノックをして物理室の中に入った。

背もたれのない椅子がまっすぐ縦に伸び、教壇の上からかすかに恵子先生の白衣がのぞいている。白衣姿がそそられるというのは意外にもけつこうあることで、この僕もその例外ではない。恵子先生は「あら」と一声、立ち上がりてこちらに微笑みかける。髪をかきあげる仕草がなんとも言えずぐつとくる。

「先生、これ提出しに来ました」

なんという猫なで声か。アキタカは年上を前にするとM体質に変わってしまうのだ。

「はい、」古劳様。南くんはもつ趣出したのね

「しました」

「一人とも去年は単位ぎりぎりだったから、今年はいまの「ひがひり
やんとやっておきなさい」

「了解です」

僕はそう答へ、じゃあと立ち去りはじめるが、隣の男がこれしき
の会話で満足するはずはない。

「ねえ、先生。今度おうちに遊び行つてもいいでしょ？」

「ダメ。先生のおうち散らかってるから」

「そんなの気にしないつすよ。なんなら片付けますし」

手の平をはらはらと振りながら先生は取り合わずて笑う。その笑
い方がまた素敵なのだ。

「なにがでてくるかわからないの。ひょっとすると男の人が出でく
るかも」

恵子先生の心弾む笑い声とアキタカの落胆する声。よくうちの姉
はアキタカがどこまで本気なのかわからないこと言つていていたが、今な
らはつきりと言える。この男は常に本気なのだ。

「えー、先生彼氏いないつて言つてたじやないつすかー」

「あら、そんなこと言つた？」

「ひどいよつ」

「南くんならひがひり呼んでもいいかな。変なこと考えなさうだか

「ひ

人を引き合ひに出さないでいただきたい。アキタカは笑つて僕を

指差した。

「先生やめた方がいいよ。こいつドスケベだから」

「やめい。おれは健全なだけだ」

「南くんは否定しないところがいいね。高校生は口でけつこいつ」

恵子先生は生徒に好かれるのは、やはり率直に意見を述べることだろう。生徒とのあいだに壁がないのだ。

そんな風に充実した午後のひとときを送れたのはある意味でアキタ力のおかげだったの、僕は帰りにチーズバーガーをおごってやつた。駅前のマクドナルドは下校になると大体カワ高の生徒で賑わっている。

そのときちよづ携帯電話にメールが送られてきた。開いて見ると、までもなく、それは下級生からのものだった。僕はメールを読み上げる。

「五月一日にみんなでカラオケに行くんですが、佐野くんも誘ってくれませんか、だと」

「あつそう」

いやいや、あつそうじゃなくて。

「どうすんだよ」

「好きにすれば」

「はい? 誘われてんのはおれじゃなくておまえだぞ。アキ」

アキタ力は不機嫌そうに眉根を寄せ、僕の携帯電話を覗き込む。

「なんでだよ。佐野くんも、って書いてあるんだろ？」「ち

アキタカが文章を指差す。本当に自分で読み上げていく気づかなかつた。

「つまりは南も誘われてるってことだ

「どうしておれもなんだ？」

「同情だろ。じゃなきやおまえみたいな冴えない奴を誘わないだろ」「殴つていいか？」

「殴り返していいな。まあ良かつたじゃん。童貞捨てられるかもよ」

あや、今、コートを吹き出しそうになる。あまりに話が突飛だ。

「どうしてそんなことになるんだよ。段階超えすぎだ」「いや、そんなもんだよ。おれの初体験もそつだつたし」

耳を疑つた。意識が遠のき、これまでのアキタカと交わした言葉をぐるりと一周して、またマクドナルドの店内に僕が戻ってきた。

「……お、おまえセックスしたことあるの？」

「あるよ」

「なんで言わなかつたんだよ」

「別に言つ必要ないだろ」

なんという冷たい男か。未経験の男性にとってはセックスとはある意味で神聖でありあるところだ。

「誰ど？」

「三年の石倉さん」

知らない女子の名前が出てきた。この男はどこまでテリトリーを広げているんだ？

「一回だけ？」

「いや、毎週土曜日。彼女んちで」

呆れたというかなんというか。神様がこの場にいたら僕はこの男に裁きを与えてくれと懇願したことだろう。僕は穴のあくほどアキタ力の顔を見つめたが、このときほどこいつがわからなかつたことはない。表面上は屈託なさそうなかわいい顔をしているのだが。打ち明け話が人目を憚るものでありながら、この男の落ち着きようはなんのだろう。まるで、ただ毎週いとこのうちに遊びに行つてるだけなんだと言わんばかりなのだ。

「それって、付き合つてんのか？」

「さあ。でも人には言つなつて口止めしてはおいた」

それはそりだらう。そんなことがバレれば、上級生のいる三階も下級生のいる一階も大騒ぎだ。まさに下は洪水、上は火事といったところが。

僕は咳払いをひとつ、脱線した話をなんとか元に戻すことにした。

「まあ、それはわかつた。納得はできんが。それで下級生のところには行くのか？」

「行つてやつてもいいかな」

「よろしい。これでおれが気まずい思いをすることもない」

僕はそう言って、口ーラを吸い上げながらアキタ力の表情をちら

りと確認する。

正直なところ、下級生にちやほやされるかもしれないという、その可能性があるだけでも、僕としては悪くない誘いだつた。もちろんそんなことを口にすればからかわれるだけなので伏せておいたが、おそらくアキタカもわかつっていたのではなかろうか。奴の悪魔的笑みはまさにそれを物語ついていたわけだろうじ。

僕には歳の一いつ離れた姉がいる。

学園ドラマ、またはその手の漫画や小説に登場する姉というのは大体おてんばか心優しい人物というものだが、僕の姉はそのどちらにも当てはまらない。一口に言つてしまえば、あまり外に自慢できるほどの姉ではないということだ。

姉の朝子は子供のころから室内で読書ばかりにふけり、スポーツといえば中学でバドミントンを数ヶ月ばかりやつたといいくらいのもの。いわゆるオタク体质の女だ。今は脚本家を目指し、その手の専門学校に通つているという話だが、そのわりには年がら年中うちにいる。母も手を焼いたのか、最近はさっぱり小言も言わなくなつた。

まあそんな姉ではあるものの、少なからず僕に良い影響を与えてはくれた。ひとつに読書であり、一つに一千冊はある書架に收まりきらない本たちだ。僕がまだ小さいころには朗読なんて気の利いたこともしてくれたが、物心つくころから姉とは必要以上の会話をしない。ときどき用あつてどちらかがどちらかの部屋に滞在することもあるが、話すことがなくなつて間が持たないという始末。

それが直接の原因というわけではないが、僕は高校入学とともに離れの部屋を与えてもらつた。母屋の近くに建てられたアパートの一室である。祖父がバブル期に土地の値段が上がること、入居者が増すことを見込んで建てたいわばプチバブルの塔。幼いころに遊んだ田畠は消えてしまったが、その代わりのびのび暮らせるワンルームが手に入ったといつよくなわけだ。

「ここに彼女を呼ぶというのが、僕の高校生活最初の目標ではあったのだが、それは一年経つたいまでも果たせる見込みがない。だがそれ以外なら、とうのが五月一日に望むことだ。……高校生は口でけつこう。

「ケータイ見ながらニヤニヤしてると、気持ち悪い」

夕食のときである。僕はそれが自分に向けられたものだと気づかず携帯電話の画面を見つめ続けていたのだが、姉の視線を感じて顔を上げた。朝子は無感動に食事を口に運びながら、眼鏡の奥の冷たい瞳を、僕からテレビに移した。僕の指定席はいつもテレビが後ろにあるのでなにをやっているのか見ることはできないのだが、朝子の表情からすると面白くはなさそうだ。

顔が紅潮するのを感じながら、僕は携帯電話を折りたたんでポケットにしまう。なぜかはわからないのだが、朝子の態度にはいつもにかしら抗えないを感じてしまうのだ。

「なに見てたの？」

テレビに顔を向けたまま、朝子は言った。姉にはすっかりと母の性格がしみついてしまったのか、時おり見せる仕草が母親とダブる。

「別に。メール
「誰からなの？」

沈黙。この時点では僕がなにかを隠しているのはバレてしまっているのだからおそろしい。

「隠さないで言いなよ

「関係ないでしょ、別に」

「姉として知つておきたいの。女の子でしょ、ビーナ」

ギクリといつ擬音が出たうになる。ついには母までが参戦してきました。

「どんな子なの？」

「あんた付き合つのはこにカビ、つかに連れ込むときはむちゃこと言つてよ。あたし友達しそうひめの部屋に来るんだから。隣がつるさかつたら嫌だもん」

連れ込む、なんて言い方が悪い。かくいう姉も僕の部屋の隣に住んでいるのだ。例のアパートに。

「この家に連れ込まないだけましだろ」

「当たり前じゃない。おじいちゃんカンカンに怒るよ」

「ていうか」

「それでどんな子なの？」

と母は母で執拗に相手の風体を気に掛ける。

「ああ、もう。うつせえな。たしかにメールは女の子からだけど、別に付き合つてないし付き合つて定もないの。ただ今度遊ぶだけだよ」

「デート？」

「アキタカが誘つたんだよ。みんなで遊ぼうって」

なるほど、と言つた感じの書き方だ、二人とも。多少事実と異なつてしまつたがしがあるまい。説明するのが面倒すぎる。

「アキタカくん最近来ないけど、元気?」

「元気すぎるくらいね」

エビフライをぽりぽり齧りながら、朝子は「ふーん」と鼻をならす。うちの姉は決して綺麗ではないはずのだが、それでもアキタカは距離を縮めたがつた。友人の姉にまで手を出すなんて分別のない奴だが、姉は姉で奴を気に入っているらしい。普段異性にそんな目で見られることが少ないからだろう。

来たる五月一日のために、やるべきことは二つあった。まず身なりを整えることだ。それから資金を調達すること。向こうに誘われたのだからおじる義理はないが、それでも建前といつものがある。

ちょうどいいことに、アキタカの方から休日の誘いがあった。母屋でテレビを觀ていると姉が僕の名を呼んだ。二三分ふたりで話していたらしく、朝子の表情はやけに明るかつた。

「おまえ電源切れてたぞ」

アキタカのこの豹変ぶりが凄い。さつきまでは猫なで声だつたらうに。

「もう二回は言つてるが、うちは電波が悪いんだよ」

「あさつて暇?」

「なんで」

「遊びに行こつば。近くまで」

「いいよ」

「よし。じゃあ時間と場所をメールで送つとく」

がちやん。実に簡潔な会話だ。あさつては土曜日。

あいにくの曇天がショッピング・モールから漏れる明かりを際立たせた。人々の半数は手に傘を持ち、この僕もショルダーバッグの中に折り畳み傘を持参している。アキタカは時間どおりに来なかつた。やはりというべきか。三度電話をかけたところで、たつたいま電車を下りたのだと聞かされた。

アキタカは特におしゃれでもない。制服の方が男前なくらいだ。見覚えのあるブラックジーンズに安くさいロゴの入ったTシャツ、上にはストライプのシャツを羽織つている。靴は通学用のローファー。頭には寝癖までついてる。少々いただけない格好だ。

「遅れた」

「ごめんがついてねえぞ。それよりおまえもつ少しおしゃれ頑張つたら？」

僕がそう言つと、二ビルに笑い、アキタカはヒップ・ポケットから財布を取り出した。

「今日は3万持つてきたからな。もうださいとは言わせねえ」

「おお！ なんかおじつてよ」

「嫌だ。おまえにおじる義理はない」

「おいおい、あるはずだろ？ が。いつも人に面倒を押しつけやがつて。

そんなわけで僕らは見るからに高そうな店をなるべく避け、古着系もしくはサーフ系ショッピングで洋服を買い求めた。ショッピングと

いつのも性格があらわれるもので、妥協しがちなアキタカはいちいち試着しようとはせず、それどころか「三軒回つただけで疲れたとかなんとか言い出し始めた。奴が手に取るものも、はつきり言つてぱつとしない感じのものばかり。僕のセンスが秀でているとは口が裂けても言えないが、少なくともアキタカよりはましだらつ。

「そんなTシャツビ」がいいの？」

心の底から出た言葉だ。アキタカは黄土色の無地のTシャツを宙に掲げ、それを買おうかどうかと迷つていた。

「なんつーか、全体的にいいじゃん」

「嘘だろ？ ギヤグで言つてるんじゃなくて？」

「な、ちげえよ。普通にマジだし」

「そうか。じゃあ友達として言つけど、それす「」いダサイ」

それを聞いたアキタカはムツとするが、彼にも自身のセンスには信頼がないらしく、しぶしぶとTシャツを置いて他を回り始めた。やれやれ、仕方がないからいっしょに選んでやるが。僕としてはあんまり得はなさそつだが。

「3万のうちはいくらまで使えるの？」

「2万くらいかな。なんで？」

「とりあえずさ、おまえそのジーンズだけは新しいの買つた方がいいよ。今時そんなダボダボのジーンズなんて流行んねえから。ユニークロでもいいからもつと細いの買えよ」

「わかった」

「あとTシャツ一枚か一枚だな。いや、ロントでいいか

なかなかどうして、いつもときには素直な奴である。いつもの

皮肉っぽい言葉もなりをひそめ、僕の言つとおりに動いている。静かにしていればいいとこのお坊ちゃんにも見えなくはない。いつもこうなら上級生にだつて少しほ見込みがあつたろう。

結局アキタカはタイトなジーンズとロングTシャツを一着ずつ、アディダスの靴を一足買って、それなりの格好に変身することができた。ショッピング・モールの男性トイレで着替えを済まし、買い物袋に元着ていた服を詰め込む。僕の方もシックな柄のカーディガンを一枚買い、ジャケットの代わりにそれを羽織った。

僕らは双方に満足した面持ちで駅まで歩いた。

「「」のあとびづくるよ？」
「いま何時？」
「2時50分」
「エガちゃんタイムか。おれ4時になつたら予定あるから、それまでゲーセンで麻雀でもしてようぜ」「4時からの用事つて？」
「デート。今日は4時から優子と予定あんの」「優子？ 誰だよ」「この前言つただろ。石倉優子だよ。三年の」
僕は思い出して声を上げた。そういえば今日は土曜日だった。
「デートのあとは彼女んちに行くの？」
「当然

僕は願つた。どうせ雨が降るのなら、4時ちょうどに降り始めてください、と。

しかしながらそのあと雨は降らず、月曜日に学校で顔を合わせるとアキタカはめずらしく僕に感謝の念を表明した。土曜日に買った服が石倉優子に大うけだったらしい。

「手数料としてジューク一本な」

「嫌だね。と言いたいけど、まあ今回はよしとしよう」

なぜおまえが偉そうなんだ。そんなことを思いながらも、ジューク一本欲しいがために黙つてしまつ僕はやっぱりダメなのだひつ。

「ゴールデンウイーク前の月曜とあって、学校に来ていらない連中もちらほらいた。そのせいか授業もどこか投げやりで、担任の東野もホームルームで無駄な努力はせず、義務を終えると教室の全員が蜘蛛の子ちらしたように帰つて行つた。この連休にかぎり、部活も休みという話だ。僕もさつさと教室を後にしたのだが、下駄箱の前でばつたりと例の一人に出くわしてしまつた。下級生だ。

「あ、南先輩」

涼しげなソプラノでその名前を呼ばれた。下級生に先輩付けで呼ばれるというのは悪くない気分だ。

「これから帰るんですか？」

「そうだよ。一人も？」

一人は肯き、意味なく微笑みあう。ひとりの純潔少女は赤のヘアピンを無数に髪につけ、もうひとりのクレオパトラは髪を下ろして

いる。近くに立つてみると、純潔少女の背がすいぶん低いことがわかる。

「加奈子はテニス部なんですけど、今日はないからいつしょに帰るんです。……佐野先輩は今日はいつしょじゃないんですか？」

「ああ、アキタカは」

そこまで言いかけてしまふと思つた。奴はいま三年の石倉優子とお喋りしているところだらう。

「……アキタカは今日補習があるみたい」

「そりなんですか」

『氣落ちさせてしまつたようだ。僕はあわてて話題を変えた。

「ねえ、ごめん。す」今さらだけど、まだ一人の名前知らないや

「この子が池西加奈子で、私は相田夕美です」

ようやく名前が判明した。純潔少女が相田夕美で、クレオパトラが池西加奈子。

「いつもおれにメール送つてくるのが、夕美ちゃん？」

「あ、そうです」

「そつか。五月一日は一人で来るの？」

「あともひひとつ……フナキタの子なんですけど」

同意を求めるよつてに、夕美が加奈子の顔を見る。加奈子は肯いた。

「中学の『』の友達なんですか、ダメですか？」

ダメなものか。むしろチャンスが増える。

「いいよ。全然いい」

二人の顔が明るくなつた。笑い声がもれる。

「じゃあ、ちよつなり。またメールしますね」

僕は手を挙げ、二人を見送つた。思わず顔がほころぶ。アキタ力
め、まったくもつてうらやましい奴だ。あんな子に惚れられている
上に、どうでもいいようにあしらうなんて。

「よつ、待つた？」

呪詛の言葉をつらつらと頭の中で並べているそのころ、諸悪の根
源たる男が上機嫌に校門へとやってきた。もつほとんどの生徒は帰
り、空の隅を夕暮れが侵し始めている。風にもいくらか冷氣がまじ
つてきた。

「待つたよ。死ぬほど待つた」

「そうか。じゃ行こう」

「……ごめんとかないの？」

「ジュースおごつただろ。それでチャラにして」

断じてチャラではない。それにジュースで一時間半は割りに合わ
ん。

カレンダーから四月が剥がされ、五月の人々の心は見るからに
浮き立つた。テレビはゴールデンウィーク用の特番を流し、行楽地

には大勢人が押しかけていた。景気良好、商売繁盛。連休の幾日かは日本中晴天という話だ。そんな中、南家は全員が家にどどまつているというからなんとも冴えない。

「うちちは去年、秋の連休に伊豆へ行つたでしょ」

「ていうかあたし、別にどこも行きたくないし。うちでゆっくりしたい」

なんともはやインドアな一家である。大黒柱の父も家で寝て、いられるならその方がいいと口を添える始末だ。

そんなわけで、連休の初日は家から一步も出ることなく一日を終ってしまった。いつか読むだらうと後回しにしていたJ・D・サリンジャーの短編集を流し読みし、夕方からはパソコンの前に座り続けた。姉と壁を一枚へだててネットの麻雀にまで興じた。虚しくなるところまではいかなかつたにせよ、なんとも気の滅入る一日だったことは言つまでもない。

「明日の予定なんですが、夕方くらいからでもいいですか？」

夕美からそんなメールが入ってきたのは午前零時前。むしょうに眠かった僕は黙殺してしまおうとも思ったが、体を起こして携帯電話をいじつた。しかし口頭の方が明らかに楽だったので、思い切つて電話をかけてみた。

「……はい、もしもし」

消えてしまいそうな小さな声だ。親が厳しいのかもしれない。

「こんな時間にごめん。でもこっちの方が早く済むと思つたから

「あ、はい。いいですよ」

「明日つて何時にどこに行けばいいの？」

「え、あの……先輩の都合いい時間なら、いつでも」

「おれたち別にいつでもいいよ」

電話の向こうで夕美が微笑んだのがわかる。極力相手に会わせようという心がけがなんともいい。

「じゃあ明日の夕方五時に、学校近くのシダでいいですか？」

「シダックスね。わかった。ホントこんな時間にごめん。じゃあ

」

「あ、ちょっと」

僕が電話を切ろうとするとき、夕美の声が止めた。

「え、なに？」

「あの、あの、南先輩は、好きな人とか、付き合ってる人とかっているんですか？」

「特にいなきけど

「……そうですか」

電話の向こうでまた微笑むような沈黙があった。なんともいえない桃色の雰囲気を、甲斐性のない僕はしおうこりもなく胸に浮かべてしまつたのだが、今回ばかりは間違いでなかつたらしい。そのあと夕美はこう続けた。

「明日はフナキタの子が来るんですけど、その子も彼氏いないんで、もし先輩が気に入れば付き合つてあげてくれませんか？」

敬語のわりに、なんとも单刀直入に来た。おかげで僕の方がしど

ろもびりになってしまった。

「あ、すいません。なんか」

そんな風になんとなくの雰囲気で謝られても困る。

「とにかく会つてみなくちゃわかんないな

「ですよね。それじゃ、明日」

「うん。またね」

僕は電話を切つてからアキタカの顔を思い出した。あいつが僕の考えていることを知つたら、まず鼻で笑うだろう。おまえの言う本物の恋なんて、どうせそんなものさ、と。……ええ、どうせそんなもんですとも。

どれほど待ちわびただろう五月一日。晩春の空は見事なまでに晴れ渡り、遠く彼方に見えるは飛行機雲。人々はつかのま苛立たしい俗世間からはなれ、またそれでも物足りぬ人はあえて繁華街の奥へともぐりこんでいく。健全で童貞な十六歳にとって五月とは晴れやかでありながら同時に物憂い。短い春休みが終わり、次の長期休暇までは永遠にも等しい道のりが立ちはだかっている。そのあいだにもうけられたこの短い休暇を有意義に過ごさずしてなるものか。五月病の新人社員も人員整理を受けた中年労働者も、この日だけは長くつらい道のりを忘れることができる。

そんな中、五月病とは縁のない男が、なんの悩みもなさそうな顔でてくてくとこちらに歩み寄つてくる。やれやれせつかくの休日に、といった表情。ぱりぱりと齧つていたうまい棒の最後のひとかけらを公園のハトに投げやると、いくぶん満足した顔つきで僕に話しか

けた。

「いい天気だな。帰つていいか?」

「言葉が矛盾してるぞ。天気が良けりや子供は遊ぶもんだ」

「まあおまえよりは大人だけどな」

「言ひ返せないから悔しい。童貞とおちりばできない気持ちがここにわかつてたまるか。」

「今日こゝで自分のケータイの番号教えるよ。おれはもう疲れた」「気が向いたら。そんで待ち合わせは何時なの?」

「五時」

「それまでやることねえじやん」

「ああ、ないな」

僕はてっきりアキタカが時間の約束を破るものと見て、一時間早く集合をかけておいたのだ。どうしてこんなときだけ時間どおり来るのだろうか。まつたくもつてあまのじやくな男である。

アキタカは皮肉っぽいため息をついて噴水のわきに腰を下ろし、気持ち良さそうに体を伸ばした。僕も五月の陽気にやられて、その隣に腰を下ろした。とろんとした田で、アキタカがこちらを見る。

「どうする? 恵子先生の家でも覗きに行くか

「それはどう考へても犯罪に思えるが」

「馬鹿め。女性の体に興味を覚えるのはじいへ健全な」とだ。馬鹿め

「なにを覗こいつとしてるんだ、なにを。それに馬鹿を一度も言つた。恵子先生の赤裸々な姿を覗き見しようとするおまえの方が馬鹿だ。あの人はちょっと遠くで見てるからここんだよ。田下部先輩と同じ

アキタカは少し驚いたような顔で僕を見た。あれ、ここにこんな顔だったっけ、とでも言つよう。

「……それはまたしかにそうだな。おまえも少しはわかつてきたか」

「そこで父親面するおまえがわからん」

「あれ本当かな。恵子先生に彼氏いるってやつ」

「本人は否定も肯定もしてなかつたな。……いや、肯定してたのかな、ある意味あれは」

ハア、と深いため息をついてアキタカは両手にあごを載せ、ぼんやりと公園で遊ぶ子供たちを見つめた。ためしに顔の前で手を振つてみるが、なんの反応もない。

「恵子先生つてさあ、なんであんなにかわいいのかな……。おれ、実はいちばん好きかもしないよ。先生のこと」

男の前で猫なで声を出すのはやめてほしい。気色悪いにもほどがある。

「大人だからそう見えるだけじゃねえの？」

「そうなのかなあ。一回でいいから恵子先生と」

「その先は言わんでもよろしい」

「なんだよ。童貞のひがみか？」

「阿呆が。もうこちで言ひ。この阿呆が」

そんな風にして救いようのない十代の会話を繰り広げていたのだが、太陽も休暇を待ちわびたのか、そそくさと西の空に退場なさった。アキタカの重い腰をひっぱり上げ、待ち合わせのシダックスまでずるずると引きずつていく。

なんとか十分前には到着することができたのだが、下級生たちはすでに集合していた。その中に見ない顔がひとり。おそらくその少女が、例のフナキタの生徒であろう。

「お待たせ」

僕がそう言いつと、「こんなにちわー」と声をそろえる。アキタカは僕の後ろに立つて、地面の小石を蹴飛ばしている。

「いつからいたの？」

「……ええと、いつだっけ？」

と三人が顔を向け合い、夕美が代表して答える。

「30分前くらいですかね」

「そんなに早く来たんだ。ごめん、待たせて」

夕美は首を振る。

「そんなそんな。今日はつらが無理に誘つたんですね」

ね、といつ風に顔を向け、下級生たちはうんと肯く。同じ中学出

身とあって、特別仲がいいらしく、そのころアキタカはひとり勝手に、店の中へ入ってしまった。

「あ、佐野先輩、行っちゃいましたね……」「トイレに行きたいみたいだつたから」

僕はそう説明した。やれやれ、うまく取り繕つ方の身にもなつてほしい。

夕美は初めて見る私服にも違和感がない。アキタカの望むような大人の女性とは対比しているが、着ている服からも育ちの良さがうかがえる。反対に、クレオパトラこと池西加奈子はなんとも言えずひどい有様だ。黒いワンピースに、黒のタイツ。黒の髪どめに黒髪と黒ずくし。その姿は西洋人形のようにも見えたが、顔だけが日本人、というより古代エジプト人。いわゆるゴスロリ系なのだろうが、よくぞ正氣でその格好ができるものだと、彼女の精神の強靭さには目を見張る他ない。

もうひとりの少女に、特別な目がいかなかつたと言えば嘘になる。下級生に恋のフラグを立てられた僕はみじめなのだろうか？ 彼女はたしかに、夕美が薦めるとおりかわいかつた。そしてそれ以上に、ぐつとくる説明しようのないなにかがあつた。それとも恋に期待しそぎるあまり、色眼鏡で彼女を見てしまつていいのだろうか？ きっとした顔立ちに反して服装はラフで、ちょっと見ると男の子のようでもある。髪は短い。

「はじめまして」

僕の方から彼女にそう声をかけてみた。が、無視された。

「ほり、ヒナ！」

「え、ああ……はじめ、まして？」

なぜ疑問形なんだ。そんなツツ「ミ」を思わず入れそうになつたが、このはあまり深入りしない方がいいだろ？。

「「めんなさい。この子シャイなんだ」

夕美が必死で謝る様子が胸に痛い。このは年上としてなんとかまとめなければ。

「いや、別にいいよ。アキタカも中入っちゃつたし、おれらも行こうか」

一万と二千年前から愛してる。八千年前からもつと恋しくなつた。

そんな歌がフロアに流れている。僕と下級生たちはフロントで受付をすまし、案内された部屋に向かつた。それまで待合室の椅子に座っていたアキタカは、僕が手招きすると面倒くさそうに立ち上がり後をついてきた。

永遠にも等しい気まずいエレベーターの沈黙が過ぎ去ると、一同は部屋に入り、テーブルを囲んでぐるりと席に座つた。誰も何も話そうとしないし、曲を入れようともしない。ただ夕美と加奈子がこそそなにかを言い合つているだけだ。

「誰がいちばん最初に歌う？」

とにかくこの緊張感をなんとかしたかった。そんな思いから、僕がそう言つ出した。

「あ、じゃあ先輩からお願ひします」

「えつ、おれ？」

うんと肯く加奈子。調子こくなクレオパトラ。

「私も聴きたい。先輩お願ひします」

夕美までがそんなことを言つ。そんな無茶ブリありかよ！と思つたが、引くわけにもいかず、大慌てで曲を探し、震える声で歌を歌つた。『世界でひとつだけの花』。ベタだ、ベタすぎる。曲が終わつて拍手が鳴ると、僕は精も根も尽き果てて、椅子に腰を下ろした。歌つているときこちらひじりと下級生たちの顔を確認したが、誰も聴いていやしなかつた。

「相変わらず音痴だな」

「つるさこ」

アキタカとそんないつもの会話をしていると、部屋のドアがコンコンとノックされ、お盆を持った店員が入ってきた。ジュースのような色合いをした飲み物がコップに注がれている。

「潤くんありがとう」

「いえいえ」

夕美は店員と顔見知りらしい。店員が飲み物を置いて去つてしまふと、こちらに顔を向けて説明を加えた。

「潤くんも中学のときの同級生なんですよ。だから今日は飲み放題なんで」

なるほど。便利なもんだ。

そんなことを思いながら「カンパニー」と5人がコップを鳴らして一口飲むと、驚かされた。こいつはジュースなんかじゃない。酒だ。

「……え、これお酒?」

夕美は肯き、てへへと笑う。

「なんか今日店長いないらしいんで。だからお酒飲んでも平気かなつて」

そういう問題なのか。といつより明らかに計画的犯行に思えるが。

酒の力とはまったくもつて偉大である。あれほどまでに謙虚だった夕美が、いちばん先に豹変した。ひととおりみんなが歌い終えたころだろうか、突然席を立つて僕とアキタ力のあいだに割り込むと、首を振るアキタ力に遠慮なく酒を飲ませ始めた。さすがのやつも虚をつかれたか、言いなりになつて酒を飲んでいる。続いて加奈子までもが恋敵に敵意を燃やし始め、酒の力も相成つてアキタ力の隣に腰を下ろした。

僕の座る席がない。いや、実際はヒナとかいう女の子の隣が空いていたのだが、無駄に酒の強い僕に、その勇気はまだ芽生えてなか

つた。彼女は目の前の騒ぎとは一枚壁をへだてているのか、超然とウーロン茶みたいなものを飲んでいる。

「……座れば？」

「え？」

ヒナは腰をほんの少し、横にずらした。たぶん座れといふことなんだろう。そしてなぜタメぐち？

僕は言われるまま、ヒナの隣に腰を下ろした。

「それ、なに飲んでるの？」

「ウーロンハイ」

まるきりおつさんの飲み物ではないか。しかしそんなことは言えない。

「ねーねー、お酒が進んではないよう。佐野せんぱーい

まるでキャバクラのようだ。そうは思つたが、アキタ力の酔っ払つた姿というのはこれまでに見たことがなかつたので、興味はあつた。僕としてはやつが真性のMに目覚めることを期待しているのだが、両隣に延々と話しかけられ、それどころではないらしい。

「もう飲めねえって。ちょっと、変なとこ、ない

「佐野先輩だーい好き」

「私もだーい好き」

「つおおおおおー！」

両隣からのハグ攻め。難攻不落の城もひといきで吹き飛ばされて

しまう。夕美の唇はいまにもアキタカの首筋につきそうになつてい
る。加奈子の方はとつと、アキタカの手を握り、その感触に浸つ
ているみたいに見えた。

咳払いをひとつ。向こうのは向こうへ、こいつはこいつ。

せめてそんな雰囲気を作りうと、僕は懸命に努めた。近くで見る
ヒナの肌は透きとおるように白い。田下部先輩とは違う、洗練され
ていない初々しさがかいま見える。

「あのや、西ヒナつていう名前なの？」

「雛子」

「ふうん……そつか。名字は？」

「白石」

会話の終わり。僕は先日西田さんと話していたアキタカを思い出
した。

「フナキタに通つてるんでしょ？」

僕は懸命にそれだけの言葉を絞り出した。

「うん」

「運動部に入つてるの？」

「……愛好会」

「え？」

たしかに愛好会と聞こえた。しかしフナキタには運動と名のつく
部なら、大抵はありそうなものだが。

「なんの愛好会なの？」

「乗馬」

「へえ……君つて一行以上の言葉を言えない人？」

ヒナはむつとしたようだつた。せめてもの冗談だつたのだが、タイミングを見誤つたらしい。

「そういう皮肉、つまんない」

これにはさすがの僕も頭にきた。夕美の話と全然違つじやないか。いや、なにも彼女はそんな話をしていたわけではないのだろうが、それでも、おそらくは友達思いの世話好きな夕美が、ヒナとかいうこの女にも彼氏を作つてあげたいと考えた。そんなところの話だつたのだらう。

僕はがっかりするよりも、怒りを感じていた。なによりも仮そめの恋に期待していた自分が恥ずかしい。

「佐野一等兵、只今帰還しられます！」

ガタツと椅子から立ち上がり、耳が痛くなるほどの大聲でアキタ力が怒鳴つた。

「しかし蒙古軍は今も満州に攻め入つてゐるでおじやります！　急ぎ殿のじ決断を！」

とうとうバグつた。田があさつての方角を向いてゐる。言つてることもわけがわからない。なんの時代だ。

気づくと夕美は壁に背をあずけて眠つてしまつてゐる。加奈子は

自分も佐野先輩についていくとかなんとかほざいてる。もつそん
なに時間が経ってしまったのだろうかと腕時計に目をやると、ゆう
に二時間は過ぎている。僕も酔っているようだ。時間の感覚がない。

「もう9時だよ。帰る?」

僕はあわてて立ち上がった。こんな時間まで女の子たちを連れま
わしていたとあっては、どんな処罰が下されるかわからぬ。もち
ろん原因は女たちにあるのだが、そんなことを理解してくれるほど、
世間は甘くない。

「殿! まさか、まさか敵前逃亡するつもりでありますか! そん
なことをするくらいなら、自分は、自分は腹を切って自害する他あ
りませぬぞ!」

ええい、面倒くさい。僕は夕美を起こして背中このせ、部屋を飛
び出た。こいつの間に準備を済ませていたのか、ヒナもそのあとに続
く。あの一人には朝までノモンハン攻略についてでも語りついていて
もらおう。

僕はエレベーターの中で大きくため息をついた。どうしても最終
的に面倒なことは僕の元に転がり込んでくるらしい。エレベーター
を降りると、ヒナがつまづいたので、僕は思わず立ち止った。

「ふらふらじゃないか。ひとりで帰れる?」

「……帰れる」

「おれはとつあえずこの子を送つてかなきやこけないから」

少しだけ迷ったが、仕方ない。僕はヒナに自分の携帯電話の番号
を教えておくことにした。

「なにかあつたら、かけて」

彼女も彼女なりに無理をしていたのかもしれない。そんな風には見えなかつたけど。

それからが大変だつた。まず夕美の家の住所がわからない。学校に電話してみると、いう手もあつたけれど、酒を飲んでいるだけにばつが悪い。ろれつが回るかどうかだつて疑わしいものだ。とにかく母親に電話するしかなかつた。叱られるのが面倒だが、このさいとやかく言つてられない。そのあと姉の協力もあり、なんとか彼女の家を見つけ出したころには夜10時を回つていた。

「うひの子が本つ当に、すみませんでした」

母子そろつて頭を下げる。僕をちらりと見る朝子の目が怖い。夕美の父親はいかにもエリートという感じの大柄な男で、歳は四十を少し過ぎたくらい。厳重な物腰とは裏腹に、顔は笑みを浮かべていた。

「いえいえ、今日は遅くなるつて言つてましたから、うちとしたらかまわないんですよ。こちらこそ」迷惑をおかけしまして

なるほど、と僕はひとり得心した。父親にも数多くタイプがあるが、この人は娘に弱いタイプだ。

しかしうちの両親が僕に対して甘いかと言えばそれはまた別の話で、ぐどぐどと説教を聞かされた挙句に夕食は抜き、という散々な結果になつた。厄介ごとを押しつけられた上にお叱りを受けるなんて、あまりにも救われない。朝子にまで「今度なんかおうつてよね」と言われる始末。

そういえばヒナはゼリヒつただろう。そんな風に思つてなにげなく

携帯電話を開くと、着信が一件残っていた。知らない番号ばかりだ。

「……もしもし」

今にも消え入りそうな声。ヒナに違いない。

「どうしたの？」

「なにかあつたら、電話してつけて、言つたから
え、なにかあつたの？」

無言。

「もしもし？」

「……泊まれる？」

「は？」

「今日だけ泊めて。おねがい」

あらかじめきちんと否定しておきたいのだが、僕が彼女の宿泊について了承したことに下心は関与していない。少なくともそのときには、ということだが。ヒナの声には切々たるものがあった。その声を聞いたとき、僕には彼女の願いを別のなにかと秤にかけることができなかつた。ヒナのそんな言葉を聞いただけで、心が痛んだほどだ。

「いいよ。場所はわかる？」

「わからない」

「だよね。じゃあ迎えに行へよ。ヒナがこるの？」

「木下公園」

「ひとり？」

「ひとり」

「そんなところにひとりでなにやつてたの?」「迎えに来て。待ってる」

唐突に電話が切れた。僕は急いでダウン・ジャケットを着込み、文字どおり外へ飛び出した。

その夜、木下公園までの道のりを自転車でひた走りながら、僕の頭の中では困惑と焦り、それから少しだけやましい妄想が繰り広げられていた。夜11時の住宅街はしんとしていて、なんとも物悲しい。ときどき電柱の影から猫が飛び出してハツとする。急ブレーキをかけて公園の入り口に着くと、僕は周りを見渡した。誰かがいるような気配はない。水銀灯の白々しい光に、無人のベンチが浮かび上がっているだけだ。

かじかむ手で携帯電話を取り出す。ヒナに発信してみると、遊具用の土管の中で、なにかが光った。それに続く単調なメロディー。

僕は自転車を下りて土管に歩み寄った。中を覗くと、身を丸めるようにしてヒナが座っていた。心なしか震えているようだ。

「大丈夫?」

ヒナは小刻みに震えながら、僕の方に顔を向いた。恐怖が顔に張りついている。

「どうしたの?」

「……さつき、声かけられた

「え?」

「知らないおじさんに」

なるほど。それでこんなところに隠れていたといつわけか。

僕は彼女に手を差し伸べ、土管から引き上げた。そのいじりしさに、思わず抱きしめてやりたいという衝動に駆られたが、もちろんそんなことをするわけにはいかない。僕は手を離した。

「どうしてこんな遅くにひとりでいたの？」

顔をそむけるヒナ。なにか話せぬ事情があるのだろう。

「ま、とにかくいつに行こう。話はそれから聞くよ」

帰るあいだ、ヒナは僕の自転車の後ろに乗り、ぴったりと頬を背中につけていた。腰に両手が回されたとき、思わずぴくりと震えてしまったのはいうまでもない。しかし動搖を悟られたくなかったので、頭に血が上るのを感じながらも、急いでうちまで自転車を漕いで。めぐるめぐ異性の感触も、緊張でそれどころではない。

問題はこれからだ。僕は母屋とは反対の方向から自転車を持ち上げてアパートの敷地に入り、音を立てないよう気を配りながら階段を上った。母屋と離れているだけあって、両親はそれほど問題ではない。問題は朝子だ。

僕はそつと玄関のドアを開けた。

「いいよ、先に入つて」

僕のやれやれと背くヒナ。しかし中に入ろうとしない。なんとな

く気ままな横顔を見せる。

「……変なこと、しない?」

「ええ?」

「変なことしようとしたら、帰るから」

「しないよ」

「……ありがと」

ありがと、か。今のところ僕にとってはほど残酷な言葉はない。

僕は先にヒナだけを入れ、玄関のドアを閉めた。やましい妄想がひとりきに音を立てて崩れ、大きなため息が出た。こうなつたらなにも氣後れすることはない。僕は朝子の部屋のチャイムを押し、全てを打ち明けることにした。

「なに?」

まるで勧誘セールスかなにかを迎えるような顔。風呂あがりの朝子はバスタオルをターバンのように頭にかぶり、充血した目で僕を睨んだ。

「なんなの? 用があるんなら早くしてよ

「実は、その、なんというか……女の子が」

「はあ? 女の子がなに? またなんかやつたの?」

そもそも僕はなにもやつてない。しかしそう言えばまた話がこじれる。

「今部屋に来てるんだ、女の子

「え、あの夕美ちゃんていう子が？」

「いや、それとはまた別の子が」

「……別の子？」

「なんと説明すればいいのだろう。僕にだってわけがわからないの」。

「とにかく今晚だけ泊まるから。いちおう朝子には言つておいた方がいいと思って」

朝子はなんとなく慌てたようだつた。まさか自分の口にした台詞が、そつくりそのまま現実になるとは思わなかつたのだろう。

「それはずいぶん殊勝な考え方だけ……お母さんも知つてるの？」

「まさか」

「じゃあ黙つてる。その方がいいんでしょ？」

「うん。言わないで」

「わかつた。今日はずっと起きると思うから、なにかあつたら言って。あたしは部屋で静かにしてる。……あんた、ゴムとかそのへん大丈夫？」

朝子の表情があまりに真剣だったので、笑つてごまかしてしまつ「」ともできなかつた。血の繋がつた姉弟に避妊の心配をされるというのは、なんとも極まりの悪い話である。僕は顔を赤らめながら真面目に答えた。

「大丈夫。つていうか、それはないと思うから」

「そう。下の人には迷惑かけないようにな。じゃあ、頑張つて」

朝子が部屋に戻つたあと、僕は大きな試練に立ち向かうよつて、

自室のドアの前で深呼吸をした。とうとう念願かなった、とうよ
うな晴れ晴れとした事情ではないにしろ、高校生活のひとつひとつの目標
である、『女の子を部屋に入れる』という願いはいちおう達成され
たわけだ。ヒナは変なことをしないで、と言った。でも頭の中に浮
かぶのはその手のことばかりである。

いやいや、ダメだ。煩惱を振り払え、南スグル。嫌われたらなに
もかもおしまいなんだぞ。

<-- 百度恋愛 >-- 第六話（後書き）

第一章へ百度恋愛へもあと少しで終わりです。
評価・感想、気長にお待ちしています。

じきじきと心臓が高鳴るのを耳にしながら、部屋に入つて錠を下ろした。色田の良いアティダスの小さいスニーカーがぽつねんと一足並べてある。ヒナはカウチの上に座つていた。両膝を腕で囲い、腕の中に顔をうずめている。僕は睡をぐくりと飲み下した。

「……寒いの？」

ヒナはかすかに首を振つた。

「なにか飲む？」ヒーでも作るうか

「いい」

「でも寒いんじょ？ そこに毛布があるから」

「近寄らないで」

僕の足は一步田を踏み出そうといたときに止まつた。彼女の鋭い声に、心が痛んだ。が、ここでしつかりと先ほどのことをよりはつきり否定しておいた方がいいのだろう。それで僕の望みも完全に消え去つてしまつわけだが、浅はかに欲を抱いて、一晩中じらされるよりはずつといい。

「ねえ、別に変なことじょうとか考えてないよ。確かにそりや男だから、なんていうか、そういう欲はあるけど、でもちゃんと境界線を引くことはできるし、その……」

ダメだ。まるで説得力がない。

「いや、なんてこいつか、とにかく変なことましない！ だからもう

少し肩の力を抜いて……というかここのおれの部屋なわけだし、まあ汚いんだけど、リラックスして……」

途中から自分でもなにを言つてゐるのかわからなくなつた。ヒナは（僕の勘違いでなければ）小さく笑い、顔を上げた。

「コーヒーちょうどだい」

「あ、うん」

僕は電熱式のケトルに水を入れ、カップを一杯分用意した。そのあいだヒナはテレビの電源を入れ、見るともなくブラウン管を見ていた。

「砂糖は？」

「いらない。……ミルク、ある？」

牛乳は切らしていた。その後、彼女がブラックでもかまわないと言つたので、僕らはカウチに並んで座り、色の濃いコーヒーを飲んだ。テレビから聞こえるどつという笑い声が、二人の沈黙をより光明に浮かび上がらせる。

僕はなぜヒナが家に帰らないのか知りたかった。でもどう切り出していいのかがわからない。そんな中、彼女が口を開いた。

「……いつもブラックなの？」

「うん。おれブラックしか飲めない。こいつのつておかしいのかな？」

「別に。それより早く訊けば？」

「え？」

「どうして私がうちに帰らないのか、知りたいんでしょ？」

ヒナはひらひらと顔を向けた。相手を小馬鹿にするような田の奥に、見覚えのないかすかな怯えが映っている。ぱってりとした唇はわずかに開かれ、それはそのうちから漏れる数少ない言葉が、今まさに語られようとしているのだということを示唆していた。

僕は肯いて、テレビのボリュームを抑えた。

「なにか深い事情があるみたいだけど……」

「別にそういうわけじゃない」

「じゃあなんだろう。親が厳しい、とか？」

「ひ、お父さんもお母さんもいない。今はお兄ちゃんと一緒に暮らして

る

「やうなんだ。……その、いじ両親は亡くなっちゃったの？」

ヒナはそれには答えなかつた。

「じゃあ、お兄ちゃんが厳しいの？」

「少し」

「なら連絡だけしどいた方がいいんじゃない？ 心配してると、さ

つと」

僕の言葉は彼女の気に召さなかつたようだつた。元のようすに両膝を腕で囲い、その中に顔をうずめてしまう。そのとき僕はあることに気がついた。もしかして自分が相手にしているのは、まだほんの子供なのかもしれない、と。

「じゃあおれが掛けよ。それなりに？」

ヒナは首を振つた。

「お兄ちゃんが怖いの？」

「……別に」

「そつか。寝る前にシャワーは浴びる？」

彼女は肯いた。

「じゃあ用意してくる。待つて」

「そう言つて残して立ち上がり、部屋を出ようとすると、ヒナがなに」とかをつぶやいた。

「……迷惑はかけないから」

「え？」

「君に迷惑はかけないから」

ヒナがシャワーを浴びているあいだ、僕は朝子の部屋のチャイムを鳴らし、どうにかしてヒナの家の電話番号を調べてくれと頼んだ。そのためには事情をすべて明かさなければならなかつたのだが、このさう仕方あるまい。

「どうしてそんな子をうちに入れたの？」

「しょうがねえだろ？　がよ。この時間に女の子ひとりじゃ危ないし」

「もう。わかつたから、ちょっと待つて」

「早くしてよ。風呂から出たらまずいから」

「もう。わかつた」

元フナキタ生の何人かに連絡が取れ、白石とこう名前を出したところ、その名前なら心あたりがある、と全員が口をそろえた。どう

やらヒナの兄貴は野球の特待生とこいつらしき。それも最上級にあたるアランクの。僕に任せるとなにか問題が起きるとでも思ったのか、朝子自ら田舎邸に電話を掛けた。すぐ迎えて来るところだった。

「サンキュー。助かった」

「今度Dのソフト買つてよね」

「これで今月こいつらの出費だらう。どう考へても少づかいでは間に合わん。」

やつと部屋に戻ると、ちよつビヒナがシャワーを浴び終えたところだった。バスタオルで髪を吹くばさばさつとこいつ音が、風呂場から聞こえる。僕はそのまま何気なくカウチに座らつとしたのだが、声がした。

「……どこに行つてたの？」

今やら隠しても仕方あるまい。僕は覚悟を決めた。

「今お兄さんが向かつてゐるよ。すぐに来るつて」

物音がぴたりと止んだ。続いてタオルが床に落ちる、ばさりといふ音。

「裏切り者」

「でも、こいつしなきゃ君が怒られるよ。おれがなにかされる分には別にいいんだ。お兄さんにもおれが誘つたって説明するし」

乱暴に風呂場のドアが開いた。ヒナはしっかりと服を着て僕の前につかつか歩み寄ると、きつい平手打ちをお見舞いした。目の覚めるようなビンタだ。僕は金魚のよつこロロロロをぱくぱくさせた。

「なに格好つけてんの。格好悪い」

「いや、よかれと思つて……つていうか、痛い」

パチン！ サラにもう一発。彼女の目には涙が浮かんでいた。

「初めて会つた人に、そこまで心配されたくなー！」

まさにそのとき、激しく階段を上る音が部屋にまで聞こえてきた。連続して鳴る、ノックとチャイム。ヒナの体は硬直し、その表情には怯えが張りついていた。僕はあわてて玄関の戸を開いた。

そこに立つっていたのは、色の黒い、背の高いがっしりとした体躯の青年だった。ちょっと見ると格闘家のようでもある。彼は蟻でも見るよう見下すと、凄まじい形相で睨みつけた。

「おまえか、この野郎！」

なにが起つたのかわからなかつた。僕は2メートル離れた壁に突き飛ばされ、次の瞬間にはその場にうずくまつっていた。暴力と呼ぶよりは、衝撃と呼ぶにふさわしい。続いて薄い意識の中、ヒナの叫び声が聞こえた。

「こんな時間までなにやつてるんだと思つたら……ここつー。おれがどんだけ心配したかわかつてんのかー。おい、雛子！」
「やめて、お兄ちゃん！ やめてー！」

男には立ち上がらなければならないときがある……。そう言つのは簡単だ。もし相手が熊だったら大抵の人は死んだふりか逃げることを選択するだろう。もし相手がライオンでもやはり同じ選択をするのではなかろうか？

けれど不運にも相手はそのどちらでもない。僕は壁に手をつけてふらふらと立ち上がった。

「やめろよ。このでくの坊」

ヒナの兄貴はぴたりと手を止めた。兄妹の目が僕に刺さる。

「なに？」

「おれが雛子を無理やり誘つたんだよ。少しは空氣を読め、阿呆。うんこみてえな顔色しやがつて。糞ヘボピッチャー。かかつてこいよ」

僕は相手の豪腕にぴたりとカウンターを合わせ、見事にKOした。

……と、できるこことならそう言いたかつたが、現実はそうではない。一瞬だけ視界に姿を現した巨大な拳。僕は部屋の端から端まで吹っ飛ばされ、見事に顎と鼻をつぶされた。体が粉々になるかと思つた。人に聞いた話や、テレビで観るのとはまるで違う。屈辱と圧倒的な恐怖が波のように押し寄せ、それまでの憎悪や反抗心なんてものはいともたやすく飲み込まれてしまった。

もしも僕ひとりだつたら、到底その一撃のあとで立ち上がろうとはしなかつただろう。気づくと僕は雄たけびを上げながら突進していた。

もみくちゃになりながら、僕は必死に相手の腰にまとわりついた。僕の頭をもぎ離そと、ヒナの兄貴は凄まじい力で押ししたが、いかんせん力の入る体勢ではない。膝蹴りがが顔の横をかすめたそのとき、『こじとばかりに僕は相手を押し倒した。そのあとはもうわけがわからない。腕をめちゃくちゃに振り回した。

「あんたらなにやつてんの！」

鶴の一声、朝子の声で目を覚ました。僕はヒナの兄貴の胸に顔をうずめていた。次の瞬間、強烈な膝が腹に入り、僕は床の上でもがき苦しんだ。

「今警察を呼んだから。あんた特待生なんでしょう？ もうおしまいだね」

これは朝子に聞いた話になるが、ヒナの兄貴の顔はみるみる青くなつたらしい。

「始めたのはそっちだろ！」

「なに言つてんの？ うちの弟はあんたの妹に頼まれて泊まらせてあげたんだよ。ガキのくせに親を気取つてんじやないよ」

どうしたら朝子の口からこんな啖呵が飛び出すのだろう。まるで『極道の妻たち』からそつくり抜け出してきたかのようだ。

なにか言わなくてはと思つたそのとき、頬に柔らかい感触があることに気づいた。僕はヒナの太ももに頭を載せ、肩を抱かれていた。彼女の涙が、僕の鼻に落ちた。

「『めん……お兄さんにバレちゃつた。朝子の馬鹿のせい』で

ヒナは首を振った。女の子が泣いているのを見ると、心が痛んだ。

「出でつて。妹さんが心配なら今日はあたしの部屋に泊めるから」
ヒナの兄貴は妹と朝子を交互に見た。それから黙つて部屋をあとにした。

「なにかあつたら、許さないからな」

「お好きにどうぞ。学校を辞めたいんであれば

「なに?」

振り返るヒナの兄貴に、朝子は無情にドアを閉め、躊躇なく錠を下ろす。朝子は僕を見下ろす位置に立つと、突然しゃがんでパンを食らわせた。

「こつてえ……」

「つるわー。この阿呆」

僕は床に肘をついて、体を起こした。体中あつとあらわる場所が激しく痛む。

「本当に警察呼んだの?」

「まさか。嘘に決まってるでしょ」

僕はほつと胸を撫で下ろした。もしも警察を呼ばれたとなれば、兄貴の暴力を誘発した僕にだって責任はある。これ以上ヒナを自分のせいに悲しませたくはなかつた。

朝子はややあつてヒナを見据えた。

「あなた、名前は？」

「……白石雛子」

「いらっしゃ来て」

朝子はヒナの手を引き、部屋から連れ出した。戻ってきたときには朝子ひとりになっていた。手に救急箱を持っている。

「今」ひつぞり母屋から持つてきたから、ほら」

と朝子は僕の前に救急箱を置いた。

「自分でやんの？」

「当たり前でしょ。じゃあね」

「え？」

「あの子、雛子ちゃんは今日ひつに泊めるから」

「え、ちよつと」

呼び声とどかず、朝子は部屋を出て行つた。僕は糸が切れたように床に大の字になり、変哲のない天井を見上げながら今日一日について回想した。思わずため息が出る。まさしく「人生最悪の日」と呼ぶにふさわしい。……できればそうであつてくれ、と僕も思うわけだが。

次の日に僕は高熱を出した。おそらく殴られたせいだらう。

そのせいでゴールデン・ウイーク残りの4日のうち、実に3日ものあいだ、ちやんちやんとを着こんで鼻水を流し続けるといつ結果

に至った。間違いなく人生で最も無駄な連休、それどころか誰からも電話一本かかつてこない。夕美からもヒナからも、アキタカからさえも。

「それだけの存在つてことでしょ。はい、残念」

残念のこもつた粥など胃に入れたくない。が、そんなわがままを言うと朝子は僕の看病を放り出しかねないので黙つておいた。姉はどう風向きが変わったのか、ここ最近僕に興味を示し始めているようだつた。飽きずに僕の看病を続け、読みたい本があると言えば買ってきてくれた。……まあそれも僕の金ではあるが。

「おいしい？」

僕は肯いた。ようやく舌に感覚が戻り始めている。

「あのせ、ひとつ氣になるんだけど、姉貴あのあと白石さんとどうしたの？」

「雛子ちゃん？ 別に普通だつたけど

「二人でなにやつてたの、つて」

「なにも。布団敷いてあげて、ここでおやすみつて。起きたらまだ寝てて、あたし本読みながら待つてたんだもん。よっぽど疲れてたんじやない？」

朝子の言つとおりだつ。着信があつた時間と僕が掛けなおした時間までは、ゆうに一時間ばかりある。そのあいだ街中をさまよつていたのではなかろうか。

「生意氣じゃなかつた？」

「全然。ていうか礼儀正しすぎてあたしの方が恐縮しちゃつたし

そんな馬鹿な、とは思つたが、朝子のあの啖呵を聞いたあとでは、それも仕方あるまい。根はいい子なのだろう。ただそれを表面上にうまく出せないというだけで。

「でも電話くらいあつてもいいのになあ……」

「電波が悪いせいじゃなくて？ あ、ねえ、あたし思つたんだけど、
そういうあんたケータイの料金払つてないんじやない？」

青天の霹靂、なんていう言葉は大げさにしか過ぎないと思つてい
たが、思わず米が口から零れた。払つてねーや、そういうええ、あま
りにお金がなさすぎて。

「やつぱり払つてなかつたんでしょ」

「うん。
払つてなかつた」

— それで、払うお金はあるの？」

あらうはずがない。カラオケ代だつて結局は僕が立て替えたのだ
から。

「ふうん、ない。確實にない」

「ない！確実にない」

はかりごとを窺わせる、朝子の含み笑い。僕はパン、と気持ちよく両手を合わせて姉に懇願した。

「どうが、どうかお金をお貸しへだれ。親子せりやーさんと拵こま
すんで」

「つやは高こよ。あれでもいこない」

「ちなみに、やの、どれくらこ……」

それではまるきじ闇金融である。僕のぎょっとした顔を見て朝子は大笑いした。

「うそうそ。そんな顔しないでよ。ケータイ代くらい利息なしで貸してあげるつて」

恩に着ます。そんなわけでゴールデンウィーク最終日、僕は朝子に借りた金で携帯電話の料金を支払った。3日も休養をとった甲斐あって、体の傷はほぼ回復していた。残るは心の傷であるが、こちらはまだなんとも言えない。とにかくまた学校が始まるわけだ。憂鬱で退屈で億劫で、それでいて少しばかり恋しいあの生活が。

これにて第一章「百度恋愛」完です。
思つた以上に多くの方に読んでもらえているよう嬉しい限りです。
これからもよろしくお願いします（、 、 ）

<ファースト・キス> 第八話（前書き）

第一章スタート！

意外にもPCからの閲覧が多いようで感謝です。

まるで工場のようだと思つ。刑務所のようでもある。

毎日が同じことの繰り返しで、進展がない。あるように見せかけているだけだ。実際のところ、僕はこの学校に100年間在籍している。100年2組、ミナミ・スグル。出席番号9番。身長170.5センチ、体重54キロ、視力右目1.0、左目0.7。前学期の成績、おおむね良好。ただ繰り返されるだけだ。試験と身体検査と授業とマスターべーション……。

だがしかし、どれほど実のない生活であつても時は過ぎる。人間は歳を食つ。ほんの少し前までは工口日本の表紙を飾る女の子のパンチラで十分満足したものだが、今では工口DVDからMP3プレイヤーまで欲しがるという始末。周りはニンテンドーDS、デジタルカメラ、最新型携帯端末、恋し恋焦がれあう彼氏彼女……そんなものに囲まれているというのに、僕が手に持つているものと言えば、100年も昔に書かれた古典小説 夏目漱石著・『坊ちゃん』。これはこれで素晴らしい小説なのだが、それにしても。

「おまえ電話繋がんなかつたぞ」

いつかも聞いたような台詞。登校してくるなりふやけた顔で人の前に顔を出すアキタカはなんの悩みもなさそうに見える。

「ジョン・レノンはポール・マッカートニーに向けて『ハウ・ドウ・ユー・スリープ』つていう曲を歌つた。これはマッカートニーの目が大きいから、そんなお目々をしててちゃんと眠れるのかつていう仲間うちのジョークから作られたんだそうだ」「なにそれ。おまえの話は毎度つまらんな」

ドスン、と前の席に座り、首をポキポキ鳴らす。僕は連休中気がかりに思つていていたことを尋ねてみた。

「そりいえば、おまえあのあとどうしたの？」

「え、なにが？」

とアキタカはこちらに振り向く。その顔はなにもわかつていなさそうだ。

「なにがじゃなくて。ほら、カラオケのあと

「え？」

「え、じゃなくて。あのあとどうしたのかって」

アキタカの目がめずらしく泳ぐ。口を開きかけるがなにも出でしない。

「……それがさ、わからんねえんだよ。あのあとどうなったのか」

「は？」

「おれなにしてた？ よく覚えてなくて」

まさかという驚きが僕を見舞つた。もしも想像するところのままになれば、それはそれで笑い話と昇華されるのだが、まだこれとかの疑問が残る。

「起きたらどうだったの？」

「普通に家にいたよ。どうやって帰つてきたのか覚えてないけど」

「へえ……女の子は？」

「女の子？ 何の話よ」

「阿呆。そこまで忘れてんのかよ。ほら、一緒にカラオケ入つただ

ろ、三人で。そんでもまあだけあの子と残つたじゃん。あの黒い服着た、化粧の濃い1コ下と

アキタカは首をかしげ、記憶を探る風だつたが、動作の途中でパツと目を見開いた。なにか思い出したらしい。

「……そういえば、あのあとでわけのわからぬメールが入つてた」「なんて？」
「知らないアドレスからなんだけど、これからもようしき、みたいな変なメール」「なんていうアドレス？」

僕とアキタカはお互いに携帯電話を取り出し、アドレスを読み上げた。そのスペルが初めから終わりまでまったく同じだったのは言うまでもない。加奈子からのメールだ。

僕はアキタカの携帯電話を取り上げ、送られてきたメールを読み上げた。

「今日は色々とありがとうございました。佐野先輩とは初めてだつたからちょっと緊張しちゃつた。これからは明隆つて読んでもいいかな？ 末永くよろしく

以上。冒頭から結末までが、毒々しいまでのハートマークで埋め尽くされている。アキタカの顔から血の気が引いていくのが見てわかつた。

「おまえなにしたの？」

「……わからん」

「佐野先輩とは初めて、つていふのは？」

「……わからん」

僕はアキタカの心を推し量った。いかに普段人の気をうかがわない奴がいざこいつなつてみても、いつもの分まで仕返しをしてやろうという気にはなれない。やはり見ていて不憫である。奴はげつそりした顔で呆然と窓の外を見ていた。

「今日必ず来るぞ。とりあえず顔を見に」

「……だろうな」

合掌。かける言葉も見つからない。僕らはめずらしく黙りこんで、静かに担任の東野が入ってくるのを待つた。ホームルーム中に幾度となくため息が聞こえてきたのは説明するまでもない。

クレオパトラならぬ、使徒襲来の恐怖からか、アキタカは午前で学校を早退した。この僕にまで何も言わずに帰つたというから徹底している。それとも話す気力すらなかつたか。

昼休みの終わるころ、夕美が一年廊下に姿を現した。あの夜の酔つ払った様子とは似ても似つかない謙虚さで、きょろきょろと辺りを見回していた。僕が声をかけると、こちらが飛び上がつてしまつほどの大声で謝りだした。

「本当にすみませんでした！」

その声で廊下にたむろする生徒たちが一斉にこちらを見た。こんなところで詫びをするのはやめて欲しい。僕にも世間体というものがある。

「……とにかく向こうへ……」

「私、何でもしますんでー、本当にごめんなさいー。」

「と、とにかく向こうで」

泣き出されでもしたら、えらいことになる。僕は夕美の背中に手を置き、校舎と繋がった体育館の方へ歩き出した。格好の餌が投げ込まれたとばかり、廊下でお喋りに精を出す女子生徒たちは、僕らが通り過ぎて間もなく話題を変える。……え、あの一人つて付き合つてたんだ……まさか。南が相手じゃシヨボすぎるでしょ。相手は一年の相田さんだもん……あの超かわいい子？ やるじゃん、南……。

南はやつません。聞きたくない」とまで聞こえてしまつたが、夕美の評価は「一年のあいだでも悪くなさそうだ。僕らは体育館ができる客席に座り、周りに人がいないことを確認してから話し始めた。体育館では弁当を食べ終えた三年生がバスケをしている。体育館は三年生のもの、ところがこの学校でのしきたりらしい。

夕美は客席の上に手を合わせて頭を下げた。

「「めんなさい！」

「ていうか、そんな謝ることでもないし。別に気にしないから」

「でも、でも、本当に迷惑かけて……」

「いいよ、ホントに」

「すいません……その顔のアザ、もしかして……」

僕は自分の顔を撫でた。やはりまだ多少は残つていいやつだ。

「うん。思いつきりやられたからね」

「……次の日にヒナから聞きました。全部私の責任です」

「そんなことないって。全部じいのかひとつもないよ。お兄さんの怒る気持ちだつてよくわかるし」

夕美はうつむいて何も言わない。そのすぐあとに、涙が筋になつて零れた。こういうとき男はどうしたらいいのだろうか？　傍から見れば僕が泣かしているようにしか見えない。

僕があたふたしていると、夕美が顔を上げて僕を見つめた。その瞳は涙に濡れてはいるが、どことなく切なげである。

「……南先輩は、どうしてそんなに優しいんですか？」

じくりと肯く夕美。さつと絵の具を塗つたように、涙のあとに髪が張りついている。

「だつて、だつて普通は怒りますもん……殴られたんですよ？」
先輩は何も悪くないのに
「まあそうだけど……」「どうして怒らないんですか？」

そんな質問をされても困る。ただ怒るに値する理由がないだけなのだ。

「怒ったってしょうがないよ。ああなつたのは誰のせいでもないか

「ないがしろにされるのは嫌だけど、みんなそういう風に俺を見
てるわけでもないからさ。アキタカはまあ例外としても」

沈黙。ややあつて、夕美はビール皮の財布を取り出した。

「あの、とりあえずカラオケ代だけでも……」

「いいよ。大した額でもないし」

どうしてそう格好つたがるのかと自分でも不思議に思いながら、僕は夕美の金を断つた。まあ彼女に涙させた詫びと思えばいいだろ？……そつ自分を納得させるほかない。

「じゃあ、そつこう」と

僕が立ち上がりうとしかけると、夕美が引き止めるような手を僕に向けた。

「……あの、最後にひとつお話があるんですけど」

「なに？」

「あの、私は佐野先輩のこと、諦めます」

「そつか。でもどうして？」

夕美は唇をぎゅっと結び、目線を横に逸らした。また泣き出しそまいそつだつたので、僕はあわてて会話をつむいだ。

「ていうか、あいつは年上好きだからさ、あんまり下級生には会わないと思つ」

「……好きになつたつて言つたら、ダメですよね？」

「え？」

「……南先輩のこと、好きになつたつて言つたら、どうします？」

なんのことやらわからなかつた。こんなことを言つと「冗談だと思つ人もいるかもしれないが、そのとき僕が思つたのは、「南先輩と

は誰のことだらう?」「こうのことだった。その南先輩とやらが自分だと理解するまでは丸々10秒はかかったろう。10秒ならすぐだと思うかもしれないが、それだって時と場合による。理解のあとに混乱がやってきたのは言つまでもない。

「ああ、うん……ええ?」

夕美が顔を赤らめる。僕だつて相当なものだつたとは思うが。

「好きになるつて……お、おれのこと?」

「くじと肯く夕美。僕の心臓が破裂せんばかりに激しく収縮する。なにがどうなつたらそつなるのか、こちらとすればわけがわからないう。」

「ちよ、ちよつと待つた。とつあえず」の話は保留することによつた。一時の氣の迷いつていうのもあるじ、さつきから三年がちぢりつち見てるじ」

「……ごめんなさい」

「こや、謝る」とでもないんだけぢや……」

そのとき折りよく、昼休み終了を報せるチャイムが校内に鳴り響いた。僕はこの場を去る口実が出来たことにほつと息をついて、夕美と体育館を後にした。別れ際の一年廊下で、彼女が振り返つたそのとき、田に痛ましいまでの切なさが見てとれた。男なら誰でもこんな子を守りたくなるだらう、そんな風に思わせる視線だった。

その後、授業を受けながら延々と繰り返された淡い期待と放心状態。女の子に好きと言われたのはもちろん初めてのことである。彼女の気持ちを信じようと努める熱情と、女心なんて信じるなという冷静さのあいだに挟まれ、一日の課題を終えたころにはぐつたりとしていた。

こんな状態で良し悪しの判断がつくものか。帰りのホームルーム中、そうすっぱり心を決め、教室を出ようとしたりで校内アナウンスが流れた。

「2年2組、南スグル君。物理の南先生がお呼びです。ホームルームが終わり次第、至急物理室まで来てください。繰り返します。2年2組、南スグル君」

はてな。教室の戸口で足を止めると、クラスメイトたちがこちらを見ている。特にやましいことはないはずのだが、アナウンスで名前を呼ばれるというのはあまり気持ちのいいものではない。それにここまで南を連呼されたとあっては、恵子先生だつてなんだか落ち着かないだろう。そくさと教室を出て、言われるがまま物理室に向かつた。

「失礼します」

そう一声、物理室に入ると、生徒用の椅子に腰掛けて恵子先生が書類に向かつている。先生はこちらに背を向けたまま、隣の席を指差した。座れということらしい。

「これ、どうこう」と?

ひらりと僕の前に広げられた一枚の模造紙。一枚とも力学についてのレポートなのだが、よく見てみると内容があまりに酷似している。名前の欄には「南優流」、「佐野明隆」と書かれている。あの阿呆、そつくりそのままレポートを『』出すやつがどっこいいる。

「あの、それは……ですね、えっと……」

「どっちが『』したの？ 佐野くんでしょ、どっち」

「まあ、はい」

やはり安易な逃げ口上が通じるような相手ではない。恵子先生はため息をひとつ、縁なし眼鏡をそっと机の上に置き、髪を片方の耳にかけて僕を見据えた。

「いつもこんなことしてるの？」

「いや、いつもってわけじゃないんですけど、たまーに……」

「ゴチン！」 反論の余地なく、恵子先生から脳天チヨップが僕に下される。決して強い痛みではないのだが、なによりつらいのはそのあとだ。恵子先生は咎めるような目でじっと僕を見据え、数秒のあいだ沈黙する。大概の人間ならば一度これを体験すれば、この人の前でもうインチキはすまいと心を決めるだろう。普段優しいだけに、厳しい先生の顔を見ると心が締めつけられるようだ。

僕は先生と目を合わすことに耐えられなくなり、視線を伏した。

「なにか言つことは？」

「……すいません」

はつきつ言って、僕は恵子先生が好きだ。他の教師の誰よりも、

とこうの意味ではあるが。そんな先生は怒ったあと、生徒に 대해서すぐには帰れとは言わない。ちゃんと相手の固まつた心をほぐしてやり、最後には背中を押して教室から出す。彼女と話していると、物理の教師より心理学に関する仕事に就くべきではないのかと、いつもそう感じてしまうのだが。

先生は僕の肩に手を置き、姿勢をぴんと張らせた。制服の第一ボタンをはめ、足を揃えさせる。

「今回だけは見逃す」とします。でも次はないからね

「はい。ありがとうございます」

「それともうひとつ」

恵子先生はそう言つと、ぐいっとこちらに顔を寄せ、僕の耳を正面から見据えた。大人の香水の匂いが、生々しく鼻腔を刺激する。

「……あなた、この前下級生と会ってましたんだって？」

心臓が止まるかと思つた。僕の顔色を見て、恵子先生がやつぱりとこうの風にため息をつく。

「またたくもう。先生、南くんはそんな子じゃないと思つてたのに

な

「いや、違うんですよ。これは色々と事情がありまして……」

「隠したくないからはつきり言つけど、これは下級生の口から直接聞いたの。でもだからって、怒つたりしちゃダメだからね。私だって内緒にしどくつて約束したんだから」

こんな告げ口をするのはクレオパトラに違いない。あの晩、アキタ力となにがあつたか知らないが、それを誰かに自慢したくて仕方

なかつたのだね。しかしこくら生徒に近いとはいって、学校の職員にまで軽々しく話してしまはうなんて、ため息をつきたいのはむしろ僕の方だ。

「怒つたりはもちひんしませんけど、てこつか、どのあたりまで聞いたんでしょ?」

「どのあたりって、なにかやましこことでもしたの?」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

なんと説明したらいいのだろう。あまり全てを打ち明けたくはなかつたのだが、この際仕方あるまい。せめて自分の誤解だけは解いておかなくては。

そんなわけで、恵子先生の顔色をうかがいつつではあるものの、僕は始めから終わりまでを逐一先生に報告した。もちろん酒を飲んだということは省いて。先生は途中で笑いだし、といひどころに突っ込みを入れもしたのだが、顛末を聞き終えたじゅうは哀しい目で僕を見ていた。

「かわいがつ。じいを殴られたの?」

僕は口の端のあたりと、額を指差した。先生の柔らかい手が伸び、傷跡に触れた。

「南くんつてお肌つるつる」

「……そですか」

「冗談。でも先生からひとつ忠告しておへと、そのヒナちゃんつて、いつ子にはもう会わない方がいいかもね」

「どうしてですか?」

「だって、南くんはまたお兄さんとこやいぢれがあつても困らないの

？」

もちろん困る。しかしどういうわけかそこまでは考えていなかつた。例の一件は偶発的に起きた突発的な事故だと、僕の中で勝手に決めつけてしまつていたのだ。

「そこまで考えてなかつた、っていう顔だけど、くれぐれも気をつけてね。お兄さんだつて特待生だから、暴力を振るつたりは極力しないだらうけど……一度前科があるわけだから。なにかあつたら私に言いなさい。これでも少しあは相談に乗れると思うから」

会話の終わりを示唆する、恵子先生の絶対的な慈しみの笑顔。その表情が見れただけでも殴られた甲斐があつうというのだ。

僕は席を立ち、失礼しましたと一聲、物理室を去ろうとしたのだが、戸口で振り返り、思い切つてやけっぱなに例のことを尋ねてみた。

「先生」

「なあに？」

「……その、先生は彼氏とかいるんすかね？」

先生は静かに笑う。その質問自体がおかしかつたといつより、タイミング的におかしかつたのだろう。

「どうしても教えて欲しいの？」

「はい、その、なるべくな……」

「他の生徒に言わない？」

「言いません。断じて」

「佐野くんにも？」

「あいつには絶対に言いません。例え拷問を受けようとも
「そつか。なら教えてあげる」

実はあなたのことのが好きなのよ、南くん そんな妄想をたくましくしながらも、とうとう事の核心に触れることができると、僕の心臓は高鳴っていた。恵子先生は僕に向かって手招きした。

「耳を貸して」

しんとした物理室、先生の告白を待ちながら、僕は言われたとおりに耳を貸した。

「私ね……実は、東野先生とお付き合いしてるので

先生の吐息に身震いしながら、同時にハツとした。僕の表情に驚愕が浮かび上がった。

「東野って……いつの担任の？」

「くそと昔く恵子先生。そんな馬鹿な。

「そり、東野先生。まだ半年くらいしかお付き合いしてないけど

アキタカが聞いたら氣を絶しているのではなかろうか。あの冴えない担任教師と、この可憐極まる恵子先生がお付き合いをしていると知つたら。

「いちおう確認しきますけど、冗談とかじゃないですよね？」

「あら、どうして？」

「いや、なんていうか、こんな言い方したらアレですけど、釣り合

いがとれていな「よ」うな……」

先生は声を上げて笑った。僕らカワ高の男子生徒にしてみれば決して笑い「ことではないのだが。

「どうしてそんな風に思つの？ 東野先生つてすゞくいい人なんだから」

「それはわかりますけど……」

「私らしくない？ でもしようがないの。好きになつちやつたから」

一瞬だけ、東野教諭への強烈な嫉妬が僕を見舞つた。でも恵子先生の幸せそうな表情を見たとき、それは止んだ。いつでも少し物憂げな表情の恵子先生が、これほどまでに底抜けな明るさを見せているのだ。悔しいけれど、そんなことは僕の包容力ではできやうもない。

<ファースト・キス> 第九話（後書き）

作者多忙のため、次話の投稿まで少し時間がかかりそうです。
楽しみに待っていてくれる方、本当に申し訳ありません。

<ファースト・キス> 第十話（前書き）

長らくお待たせをいたしました。相変わらず忙ですが、尽力して必ずや完結させようと思います。

ひとりとぼとぼと下校しながら、じつしても東野教諭と恵子先生を並べて頭に描くことができずにいた。正直などこか、僕はけっこう落ち込んでいたわけだ。あんなことを聞くべきじやなかつたとすら思つていた。とりあえずバカの声でも聞いて気を紛らわそつと思いつ立ち、アキタカの番号を探つてゐる途中、ちょうど電話がかかってきた。未登録の番号だったが、どこか見覚えのあるナンバー。

「もしもし」

答えはなかつた。しかし電話の向いつからかすかに雑音が聞こえる。ただ相手が長い時間黙つてゐるのだ。

「あの、もしもし？」
「……」「めん」
「え、誰？」
「声聞いて、わかつて」

あ、と思わず声を上げた。電話の相手はヒナに違いない。

「どうしたの？」
「別に。ただこの前のこと……謝りひとつ思つただけ」
「気にしてないよ。そのことなら」
「今どこにいるの？」
「学校から帰つてゐるけど」

次の言葉を模索してゐるのか、それともなにかをためらつてゐるのか、長い沈黙があつた。車の走行音だけが電話越しに聞こえる。

「……会えない？」

「え？」

「浅間神社で待ってる」

「いいけど、ちょっと待つて。切らないで」

「なに？」

「なんてこいつかさ、一方的に電話を切ったりするの止めて欲しいんだ。そういうのって、ちょっと傷つくから」

しんしんと雪が降るようになり、音もなく沈黙が下りる。ヒナの息づかいだけがかすかに耳に届く。

「……わかった。じゃあね」

「うん。すぐ行くよ。じゃあね」

社までの長い階段を上りきると、五月の美しい夕暮れが神社の木々を朱色に染めていた。太陽を背に受け、木々は黒いシルエットだけを無数に浮かべている。そのあいだから漏れる赤い光を見つめるように、ヒナは賽銭箱の前に立つて街の方を眺めていた。カラスが小さな群れを作つて、電線から電線へと移動する。

その情景はなにかしら胸に迫るものがあった。そのせいで僕はヒナに声をかけるのをためらつたのかもしれない。でも彼女がこちらを振り返つたので、僕の中の寂寥感みたいなものも、そのときふと消えた。

「……いつからいたの？」

と言つたヒナの目には、少しだけ咎めるような鋭さがあった。

「今だよ。ほんのちよつと前」

「やつ」

「とにかく座らなさい？」

ヒナは「くつりと肯き、賽銭箱の前にある短い階段に腰を下ろした。僕が隣に座ると、髪で顔を隠すようにヒナが斜め前を向いた。早朝の月に似た、ヒナの白い耳が黒髪の中にくつさりと姿を現す。

「……この前のこと、ごめん」

「いいよ。それより、あのあとほびうなつたの？」

「別に」

「でもお兄さんは怒らなかつた？」

「……あれから、会つてない」

「え、どうじつって？」

ヒナはブレザーの胸ポケットから一枚の紙きれを取り出した。そこに墨殴るような文字でなにか記されている。

「おまえは俺を裏切つた。ひとりで反省じろ」

そう読めた。僕は紙きれを元のようないつて四枚に折り、彼女に手渡した。

「なんていふか……厳格な人だね。本当にあれのひとつ上へ」

ヒナは深く息を吸い込んだ。背けていた顔を少しだけ僕の方に向ける。彼女の口からなにかが語られようとしているのだと、僕にも感じることができた。

「ずっとお兄ちゃんが親代わりだったから

彼女はそう語りだした。

「……私が小学生のころに、お父さんとお母さんが離婚してからはずっとね。私たちはお父さんの方に引き取られたんだけど、とてもじやないけどお父さんは私たちの面倒を進んで見てくれるような人じやなかつた。それで中学校のころに家出をして、親戚の叔父さんの家で面倒を見もらつた。お兄ちゃんは野球がうまかつたから、フナキタへ入るときに事情を説明して、ほとんどお金のかからないようにしてもらつたの。それでも足りない分は奨学金でまかなつてもらつて」

「じゃあお父さんは今どうしてるの？」

ヒナは神社の黒ずんだ土を見据えた。それからかすかに首を振る。

「……知らない。家出したあと、お兄ちゃんが報告に行つたら、家はもぬけのからだつたって」

「うなんだ」

「君には知つておいてもらいたかつた。誤解されたくなかつたから」

わけもなく、僕の胸を虚無感が襲つた。ヒナのお兄さんがどれほど彼女を想つているか、僕にでも理解することができたからだ。それは失恋にも似た痛みだつた。こんなときにはなんと言えばいいんだろう？ 安っぽい常套句ばかりが頭に浮かび、声にならぬまためらいの空氣として吐き出される。ぬくぬくと温かい環境で暮らしてきた僕には、「つらい思いをしたんだね」とこいつその一言もはばかられるように思えたからだ。

おかげで一分ばかりそろつて黙り込んでしまうことになつた。だから急に電話が鳴つたとき、沈黙から逃れられたことに少しだけほつとした。

「もしもし? 今どこにいる? 買い物頼みたいんだけど」

電話の画面を見ると着信は母親だったが、声は朝子だ。いつも自分の通話料を少しでも節約しようとしているところがなんともまるがしい。

「無理。今はちょっと用あるの」
「なに、用つて? どうせアキタカ君でしょ」
「違つてば」
「じゃあなた? あ、わかつた。離子ちゃんだ」

言葉に詰まつた。どうしてそんなに勘が鋭いのか。

「とにかく今は無理なんだつてば。ていうか自分で買いに行けよ」「墓穴を掘つたな。離子ちゃんと訊かれて否定しないといつことは、隣にいるつてことだね、ずばり。いいから一人で来なよ。お母さんが今日ははさき焼きにするつてこつから」

すき焼き……下校時の腹を空かした高校生にとつて、これほど魅力を感じるものはない。

「お肉だけないみたいだから一人で買つてきて。ちやんとすき焼き用のお肉を買つてくれんのよ。バイバイ」

なんとも強引に電話は切れた。僕はハアとため息をついて、とりあえずヒナに事情を説明することにした。

「なんかね、今からうちですき焼きやるんだって。それで離子ちゃんも来ないかつて朝子が言つんだけど……」

「いいよ」

「え、マジっすか？」

頬を赤らめ、ヒナが元のよひの顔を背ける。

「……すき焼き、好きだから」

そんなわけで僕らは近くのスーパーでスキ焼き用の肉を買い求めた。果たして財布の中においくらあつたものかとひやひやしたが、なんとかヒナには金を借りずに事足りた。女の子といつしょに自分の家の方角へ歩を進めるところは、なんとも不思議な気持ちである。あのときはセックスのことしか考えられなかつたけれど、今は違う。それよりも家族がきりんとしたところを見せられるかということの方が心配だ。

会話につまづき、冷たい沈黙が流れるとき僕はそのことについて考えた。父親はまだこの時間には帰つて来ないので安心ではあるけれど、問題は朝子と母親だ。あの一人はまつたくもつて油断ならない。せめて僕らの仲について突つ込んだところを訊いてこなければいいのだが。

「……なに、考へてるの？」

難しい顔をしていたせいが、ヒナがそつと囁つた。どうとしながら、僕は冷静さを保とうと努めた。

「え、いや別に」

「……また変なこと、考へたの？」

「考へてないよ。今回は」

「じゃあやつぱり前回は考へてたんだ」

「どうしてこいつ僕は、年がら年中墓穴を掘つてばかりいるのだろう。たまには埋めるといつ作業もしてみてはどうなのか。

「ええ？ ていうかそれは、その、不可抗力といつかなんといつか……」

しぶりやぶりになつた僕を見て、ヒナは笑つ。 その笑みはまるで子供に遭つたように、なんともあどけない。

「なんか……君つておもしろいね」

これは褒められてこるのか、それとも小馬鹿にされているだけなのか。

ヒナは口元を緩めながら、じらじらを向く。小さく尖つた鼻筋に、絵筆の先をさつと走らせたような、くつきりとした二重瞼。その表情はなんの憶測もなく描かれた水彩画のように明るく、ビックリまでも晴れ晴れとしている。

「なにか話して」

と聞いていいるひかりの心が弾むよくな声で彼女は言つた。

「なにを話すの？」

「それを君が考えるの。私は聞いてるだけ」

「ええ、なんかするくない？」

「するくない。私はわざと話したもの」

僕は意識を集中させた。彼女を喜ばせるよくな話があつたかビックリ自信はないけれど、

それでも退屈させない話をしたい。想像して欲しいのは、飛び込み台の上から勢いよく両足を離し、深く水の奥までもぐるといひ。

話題を見つけるまでにおよそ一分くらいはかかつただろうか。今にも口からこぼれ落ちそうな言葉たちを押しとどめ、一度頭の中で小説風に整理してみる。一〇〇することできの面白味もいくらかは増すかもしない。

「大して面白くないかもしないけど、それでもいい？」

ヒナは「ぐりと肯く。しかしその日は愉快な話を求めるように輝いている。

「うーんとね……子供のころ、池に落ちて溺れかけたことがあってさ、近所の人が総出で引き上げてくれたことがあるんだよ。釣りをしててね。物置から親父の釣竿と長靴と、それといっぱいポケットのついたズボンまで押借して。でも全然釣れなかつたんだ。今考えると海釣り用の餌を投げてたんだから釣れるはずもないんだけどさ」

「それで？」

「それでもしばらくは釣り糸を垂らしてじっと待つてたんだよ。夏のよく晴れた日で、座つてるだけなのに汗をびっしょり搔いてた。で、そのうち待つのにも飽きてきて、水遊びを始めたんだ。そしたら苔で滑つてズボンだよ。一瞬なにが起きたのかわからなかつた。青空がパツと姿をあらわして、次の瞬間には水の中で足搔いてた。対岸にいた釣り人が気づくまでけつこうかかったと思う。その人はおじいさんだつたから、すぐ近所の人たちを呼んで来てくれて、おれは大人たちに引き上げられたんだけど、そのとき履いてたズボンは親父のだつたからブカブカで」

「……まさか、脱げちゃつたの？」

「そう。しかもパンツまでいつしょに。大人たちに混ざって同じ学校の女子なんかもいて、あのときはもう学校に行けないって思った。まさしく人生最悪の日だったね」

ヒナは笑いをこらえているみたいだった。肩を震わせて顔を僕から背ける。

「けつこう面白い話でしょ？」

「……気の毒すぎて笑えない」

「でも笑ってるじゃん」

僕らは顔を向き合わせ、ひとたび目を合わせるとさりとて大笑いした。よくわからないけれど、僕と彼女のあいだにあつた壁みたいなものはこのとき初めて崩壊したんじゃないかと思う。これまでにヒナのそんな表情を見たことはなかつたから。

玄関の前で唾をぐくりと飲み込む。後ろを振り向いてヒナの表情を確認してみるが、それほど緊張した様子はない。というか緊張しているのは僕だけなのかもしれない。おそらくそうだ。なら僕もただすき焼きを楽しめばいいじゃないか。それをどうしてこんなに深呼吸ばかりしなければならないのか。

「……どうしたの？」

ヒナの不思議そうな顔に、僕は精一杯の笑顔を浮かべる。

「いや、なんでもない。まあ上がって」

ただいまーと一聲、おかえりーと返す声。居間から母と姉が騒がしく玄関まで出迎え、ヒナを歓迎する。朝子が言つてはいたとおり、人前の彼女は礼儀正しかつた。はじめまして、と僕の母に向かい丁重に頭を下げ、どうぞと言われるまで靴を脱げともしない。あたふたしたのはむしろ母と姉の方だろう。それよりも朝子は母親にヒナのことをどう説明したんだろう?

そう思い、朝子の服をつまんでじつぞり尋ねてみた。

「ねえ、お母さんにはこの前のこと言つてないよね?」

「言つわけないでしょ。離子ちゃんは一応あなたの彼女つてことにしておいたから」

僕の彼女……いやいやそれも十分に困るんですけど

いらんことを聞いてしまつたおかげで、一同が座についたときは心臓が破裂しそうになつていて。うちの母親ならなにを訊いてきたつておかしくない。もしも二人の進展について訊かれたりなんかしたら、僕はなんと答えればいいのだろう。さすがにこんなところでビンタを食らうわけはないにしても、ヒナに対して罰が悪いではないか。

「とこりでちやんとお肉は買つてきたんでしょうね」

朝子の声でハツと我に返り、僕は通学用バッグの中からすき焼き用の特上肉を取り出した。

「ほら、これでいいんでしょ」

「ずいぶん高いお肉買つてきたのね」

とは母の声。なぜか朝子は笑っている。

「いただきます」

「おまんこを舐べるって、あなた?」

「なんちよ二、たし」

「オッケー」と声を躍らせ、朝子は炊飯ジャーから茶碗に米をよそ。母親は毎度のじにしても、朝子が馬鹿に明るいのはどうしてだろう? ときどき僕とヒナを代わる代わる見ては、ひとりじそこそと笑っている。冴えない弟が女の子を連れてきたといつのがそんなに楽しいのだろうか……なんという嫌味な性分だろう。

「どうでお肉のお金まだ貰つてないんだけど」

僕がそう切り出すと、余裕の笑みを浮かべて朝子がこちらを見る。

「あら、アリスはあたしもロボのソフト買つてもらってなかつた
氣がするナビ」

「それとこれとは話が別じゃ……」

「今日はお肉はさしづめ担保ってどこね。どちらそうまあ」

そんなの詐欺だ。と思ったが、ヒナがいる手前、反論する」ともできない。おそらく朝子はそこまで計算に入れているのだろう。なんという極悪な姉か。

「いただきまーす」

と短い合唱のあと、哀れな父を抜きにした晩餐が始まりを告げた。ヒナはやはり多少気を使っているのか、あまり箸をすすめようとし

ない。朝子が気を配つてヒナの分もよそつてやり、それから初めて手をつける。

「離子ちゃんは好き嫌いなの？」

と二コ一コしながら母が尋ねる。

「特にありません」

「じゃあこの子とは大違ひね。まつたくスグルは小さこころから好き嫌いばかりするんだから」

おほほほほ、と上機嫌に笑いながら、母の目線はヒナばかりに注がれている。単純な母のことだから、彼女を将来の娘とでも見て取つてているのだろう。

なんとか話を別のルートにずらそうと、僕は話題を練つた。

「白石さんは乗馬部に入つてるんだつて。そうだよね？」

「……部じゃなくて愛好会」

「え、ああそうだつたつけ？ うん、とにかくそういうの」

僕のテンパリ気味な紹介を聞いて、母と姉は「へえ」と声をもらす。朝子は箸の先を噛みながら興味深げに尋ねる。

「じゃあ学校に馬がいるんだ」

「そうです。一頭だけですけど

「へー。かわいいでしょ？」

「大人しい馬なんです。もう歳だから病氣にもかかりやすくて……」

「じゃあ乗ることはできないの？」

…

と僕は訊いてみた。

「できるだけ、体が心配だから
乗らないの？」

ヒナは聞く。

「……だから乗馬とは言えないからもしれないんですけど
「でも立派じゃないの。普通食べないでしょ、馬なんて」

ともかくも母はヒナを馬に入つたよつだ。一度こいつになると、相手
がどんなことを言おうとプラスに考えてしまつからおそれしこ。

「スグルも部活に入つたらいいじゃない。お母さん応援するから」「嫌だよ。めんどくわこ」

「せりまた。最近の子はすぐメンズクサウトで言つんだから」

自分の息子まで、最近の子く呼ばわりするのはいくらなんでもよ
そよそしこ。それに最近の子はMP3プレイヤーのひとつやふたつ
は持つてこねばずだが。

「それより新しいケータイ買つてよ。これもつねにさ」

「だめよ、まだ使えるんだから。欲しつて言えばなんでも手に入
ると思われたら困るもの」

そのとおりとばかり、朝子が母の隣でつそつと聞く。この姉に
だけは同意する権利もないと思つたが。

「離子ちやんだつてやつじゅつ。ねつめじいなの？」

「実家は群馬にあります」

「じゃあひとり暮らしなの、その歳で？」

田を丸くして、朝子が話に割り 들어る。

「兄と住んでいます」

「へー」

と似たような声を揃える母子。こんなとき、ふと僕は一十年後の朝子を想像してしまった。いくらか時代に感化された節はあるものの、きっと母とそれほど変わりない風体になつていることだらけ。

「偉いわねえ。ほんと誰かとは大違い」

「誰かにも見習つて欲しいよねえ、お母さん」

「そうね、ほんとに」

そろそろじいじを見るのは止めてほしい。それを見て雛子までがくすくすと笑う。

「でも私は南くんがひいちゃんまじこです。なんだか毎日楽しつつで」
楽しいのは一人だけだろ？。玩具がわざとされるのも毎日ではさすがに疲れるではないか。

「すぐ飽きちゃうけどね。スグルはボキャブラリー少ないから」

「つねに」

「こんなので良かつたらいつでもこりつしゃこね、雛子ちゃん」

「いいんですか？」

「もちろん。なんならお父さんの分あげちゃうから。お母さん

おはははは、あはははは……やれやれ、頑張りつけ親父。この家
で男が生きるには辛いものがあるけれど。

ともかくそのように晚餐も終わり、母が総じてなにも訊き出せなかつたのはありがたかつた。そのあとでヒナは僕の部屋にやつてきた。母が父を駅まで向かえに行くとき、家のそばまで送つてもらつそうである。

僕はいつものようにコーヒーを入れた。あの晩のようない杯分。

カウチに並んで座り、そこで図つたように沈黙が訪れた。あまりにも不自然な空白。なにも話題が思いつかない。お互いのこれまでとは違つた部分を見せたことで、どちらも少し恥ずかしくなつてしまつたんだと思つ。部屋は花火が終わつたあとのように閑散として見えた。

彼女はおもむろに、僕の肩に自分の頭を載せた。「えつ」という小さな声がでる。でもヒナは動こつとはしない。その温かな重みを説明することはできそつにない。僕の心臓は破裂しそうになつた。

「じめん……おれの部屋、なんにもすることなくて

それだけの言葉をなんとか搾り出した。

「いいよ。じうじうるだけで

ヒナはかすれるほどの小さな声でそつ言つた。どついうわけか、カップを持つ自分の手が震えだす。コーヒーの味もわからない。実はアキタカと朝子がクローゼットの中に潜んでいて、僕の行動を見

ながら笑いをこらえているんじゃないかという妄想に囚われる。どんどんどんどん。生睡を飲み込む巨大な音が体中を反響する。

「……なんて呼ばばいい？」

なにも[彌]つていらない真つ黒なブラウン管を見つめながら、唐突にヒナがそう言った。

「え？」

「名前。いつも君としか呼んでなかつたから」

「なんでもいいよ、別に。白石さんの好きで」

「それ、やめて。ちゃんとからちゃんとつけられると、気持ち悪い」

そう言つたときのヒナの顔にほんのり赤みが差して見えた。彼女の髪の香りに、意識が遠のいていく。

「……じゃあ、ヒナって呼ぶよ」

僕の声は震えていたんじゃないだろうか。頭がぼんやりとして、恥ずかしさに顔を背けたくなる。たかだか名前を呼ぶだけでこんなにまでうろたえてしまうとは。まだまだ修行が足りない。

「ヒナはおれのことなんて呼ぶの？」

「……やつぱりまだ君にしどぐ」

「ずるい」

「ずるくない」

それから長い沈黙があった。心臓の激しい鼓動だけが部屋に響き渡る。緊張のおかげで、どのくらいの時間が経つたかわからない。ヒナは僕の言葉を待っていた。でもあと一歩の勇気が、どうしても

生まれてこない。

告白…… そんな大それたこと、僕にできるのか？

「……朝子がさ、うちのオカンにおれたむき合つて言つちやつたんだつて」「そうなんだ」

行け、行け、といづ心の声が僕を急き立てる。

「だからさ、その……なんて言つたらいいか……」「なに？」

息が乱れ、ヒナの唇はわずかばかり開かれていた。そんなものを見せられては、唇と唇が重ねあつところを想像しないわけにはいかない。ほとんど衝動的にキスがしたくなる。僕は少年漫画に登場する鈍感な主人公とは違う。彼女が僕に多少の想いを寄せていくくらることはわかる。

「だから……ヒナがよければだけど」「

それからあとは自分でもなにを言おつとしたのかわからない。完全なるブラックアウトだ。強烈な歯と歯のぶつかり合い、そのあとに続く柔らかい唇の感触、生温かい息、絡まりあう舌と舌、濁流のように押し寄せる欲情、僕は完全に我を忘れていた。どうしてこんな流れになってしまったのかもわからない。ただ熱に浮かされているとしか形容できない。

ヒナの両手が僕の背中に回る。僕はもっと近くに彼女を抱き寄せた。

「……痛い」

「「」めん」

ふたたび紡がれる繭と繭。今度は優しくめり合つて、よつ深くまで……。

アパートの階段に誰かの足音を聞きつけたとき、冷えた意識がずどんと部屋に落ちた。僕らは瞬時に目を見開く。あわてて立ち上がり、僕は玄関のドアを開けた。

「なに?」

見下ろすと、朝子が階段を上っている。外はもう真っ暗だ。

「離子ちり子んを呼びにきたの。あんたこそなに?」「じやあこま呼んで」

振り返ると、すでにヒナは玄関に座つて靴を履いていた。顔を背けたまま僕をすり抜け、朝子に向かって一礼する。

「下りておこで。車で送るから」

「あつがどつじれこます」

階段を下りる途中、ヒナはためらいがちに振り向いた。

「……また、連絡するから

僕は肯いた。

部屋に戻つてからも、しばらくは玄関に立ち尽くしていた。例え
よつのない喜び、浮ついた心。ほとんど放心状態と言つてもいい。
ときおりニヤリとひとりで笑つてみせる。高校一年生にて初めての
キス。いくぶん遅咲きではあるが、僕はひとつ目の境界を乗り越えた
わけだ。

次の日になつても、放心状態は続いた。はたから見れば相当気持
ちの悪いやつになつていただろう。少しでも気を緩めると笑みがこ
ぼれてしまう。そんな僕にアキタカが反応しないわけはなく、当然
のよつに疑いの目を向ける。

「おまえなんかいい」とあつたんだろ」

「まあ誰かさんよりはいい感じかな。酔つて下級生に手を出すよつ
な人よりは」

アキタカの顔に死相が出ている。少し前なら僕がどんなことを言
おうとそれ以上の皮肉を返してきた男であつただけに、この変貌は
少し気の毒だ。

「……いや、冗談だよ?」

「まあ、本当にそのとおりですか?……ハハ、自分どうせダメっす
から……」

「こつからそんなキャラになつたんだよ。親が泣くぞ」

「あのあとやつぱりしちゃつたらしいんだ」「しちゃつたつて……あれを？」

弱々しく肯くアキタカ。「なんときはなんと言えばいいんだらう？」

「まあ初めてじゃなかつただけ良かつたんじゃないか？ ぎりぎり
バスではないような気がしないでもないし」

「フォローになつてねえぞ、ド阿呆」

「あ、元気を取り戻した」

文字どおり、アキタカが明るい表情を見せる。というよりは開き直つたというか、悪だくみを模索しているときの表情と言つた方が正しいか。人が変わつたように今度はゆつたりと椅子に座り、葉巻を吹かす姿を真似る。

「いいんだ、もう別に。ひとつセフレが増えただつて思えば」

なんという奴だろう。しかしここまでプラス思考に人生を進められるというのは、ある意味才能のひとつなのかもしれない。

「……いつか女に刺されるぞ。極悪人め」

「棚橋じやねーんだから。ていつかおまえこそなにがあつたんだよ」

話すべきかどうか迷つた。誰にも言つなよ、と釘を刺しておいてから、じそつと例の事実を伝えることにした。

「実はファーストキスをね、ちょっと……」

言つてゐるうちに恥ずかしくなつてきた。アキタカが如才なく冷やかしを送る。

「ファーストキスう？　おまえいつたいいいくつだよ」

「今年で十七になりました……」

「今までキスもしたことなかったのか。かわいそうなやつだ」

頭の上を行くアキタカの笑い声で、胸がムカムカしてきた。普通の健全な十七歳はそんなもんじやないのだろうか。

「うるさいわ。ほいほい誰とでも枕をいつしょにするよつた男に言われたくはない」

「まあまあ。そんで誰としたの？」

「覚えてるかな。この前のカラオケにいた子だよ。ヒナつていつ」

「ふーん。あの子か」

見るからに覚えていない顔だ。覚えていたとしても、誰かと混同しているんじやなかろうか。

「……で、どうこう流れでそつなつたわけ？」

あまり細かいところまで話したくはなかったので、大ざつぱな筋だけを明かした。アキタカは途中途中に「ほほう」、「へえ」と驚くような冷やかすような相づちを交え、興味深げに僕の顔をのぞき込んだ。

「もつたいねえなあ。最後までしちゃ えばよかつたのに」

「……あのな、おれの部屋はとなりが姉貴なんだぞ？」

「関係ないつしょ。口をたえてればいいじゃん」

やれやれまったく。この界には常識というものが存在しないらしい。

「まあそういうことだから…… とりあえず報酬はましたわ。くれぐれ
も誰かに言つたりしないよつこー」

はーい、と返事はいいが、信用しきれない。ほんと、ここつだけ
は。

＆ヒート・恋しき物語（第十一話）

思い切ってタイトル変えました。
「True Love Story」あべて恋する少年少女

言ひ忘れたが、僕にもフナキタには友人がいる。それほど深い付き合ひはないが、何度かは友だちのつてで遊んだことがあるという、街でばったり出くわしてしまつたりすると多少話題に困る関係の男子だ。彼は 横田ジョースケは、たしかにフナキタに通いはしているものの、運動全般がからきし駄目で、百メートルは女子の平均にすら追いつかない。そんな彼がなぜフナキタに入学したのか知る由はないが、やはり女子が担当なのだつといふのがもっぱらの見解なわけで。

そんな男子を縋じて、女たちは「フナ虫」とか呼ぶそうだ。ひどいものである。

「おまえバイトしない？ 時給950円」

彼から突然そんな電話が掛かってきたのは梅雨入りする少し前のこと。

「はい？ 数年ぶりに電話を掛けてきたと思つたら、いきなりなんだよ」「いやー困つてんのよ

「なにが？」

「なにがつて人手が足らんの。つちのばあちゃんが煙をじつそり駐車場に変えちゃつたんだけど、管理する人がいなくて困つてるわけ

「ふーん。自分でやつたらいいじやんか

「おれは金あるから別にする意味ないもん」

一度でいいからそんな言葉を口してみたいものだ。今までとんと

興味がなかつたが、こいつの家はボンボンなのかもしれない。

「それは僕が金を持つてなさそつに見えるつてことか？」

「ちがうつて。ただ南なら暇かなーと思つてさ」

「あんまり変わらないと思つが」

「とにかくさーマジで困つてんの。もし暇なら来てよ。めちゃくち
や楽なバイトだし。座つてるだけ」

「時給いくらつて言つたつけ？」

「950円」

「……千円になんない？」

「無理無理。それでも高校生で950円つてかなり良い方だぜ？」

たしかにそのとおりだ。断る理由はひとつとしてない。

そんなわけで6月2週目の土曜日、朝10時に国道沿いの駐車場にてジョースケと待ち合わせた。彼と会うのは実に2年半ぶりだつたが、そのぼてつとした体型がそう変わるわけもない。背は僕よりも3センチほど高いらしいのだが、横幅のあるせいか小さく見える。口は両頬の肉に押されて、赤ん坊のようだ。カラッとした緑色のポロシャツを着て、これから本格的な梅雨に入るというのに、肌はむらなく日焼けしている。その体躯はとても高校生とは思えない。まるでプロゴルファーみたいだ。

「よつ、久しぶり」

とジョースケは手を挙げる。

「久しぶり。どこのジャンボ尾崎かと思つたよ」

「誰がジャンボだよ 先週グアムに行つてきたんだ」

「へえ……つて学校は？」

「休んだ」

ジョースケはそう言つてから僕をまじまじと見る。

「南は変わんねえなあ。少しさ肉つけろよ」

「君こそ肉をそぎなさいな」

「おれはいいの。別に気にしてないし」

と言って手をひらひらと振る。どうやら体型について本人はまったくコンプレックスがないらしい。案内するから、と言つて両腕を横に振りながら歩き、僕はそのあとについていった。

駐車場はひたすらにだだつ広い。思わず「うおっ」と声が漏れる。停まっている車の台数こそまばらだが、ゆうに三百台は入りそうだ。

ジョースケは手でひさしを作り、方々を見渡した。指までフランクフルトみたいに脂肪をまとっている。彼は国道の方を指差した。

「そこにバスター・ミナルが出来るから、今後大もうけできるんだってさ。おれも詳しいことはよく知らないんだけど」

「本当に楽なんだろうね？」

「それは保証する。なんたって、車が来なけりやすることないからな」

ラッシュは朝と夕方で、いちばん暇なのは昼だそうだ。土日は家族連れが多いが、平日ほど忙しくはないそう。當時2人の人間が窓口にいなくてはいけないらしい。

「あとで紹介するけど、あそこにいるのがバイトの一人だから

言われた方に田を向けると、そこには初老の男性と若い男がひとりいる。どちらもなんだか疲れた顔で、あまり生氣というものが感じられない。話では若者がジョースケのいとこで、もうひとりは定年退職して年金をもらつまで働きたいといつおじさんだそうだ。

「うーーっす

オーナーみたいな顔でジョースケが事務所に入ると、二人は思わず立ち上がった。僕と同い年の人間が社会的権力を持つているのを見ると、なんだかうまく飲み込めない気持ちになる。学校ではそんなに目立つ存在でもなかつたのに。

「新しく入る人。南くん」

ジョースケが僕の背を叩き、僕はちょっとあわてて頭を下げた。はじめまして、よろしく、といつ声が頭の上を通り過ぎる。

「ジョースケの知り合い？」

そう尋ねたのはいとこの方だ。

「うん、そうそう。南、この人がヨシくんで、あっちが石田さんだから

と簡単に紹介を終えてしまつと、じゃあ頼んだよ、とジョースケはいざこやうに消えてしまつた。前にいるヨシくんとやらは、僕を値踏みするような目でちらちら見ている。石田さんといつおじさんは、僕に対して特に興味がないのか、事務的に仕事の手順を説明した。ひとつひとつの言葉を区切り、ゆっくりと話す。

「まず出勤してから、ここにあるタイムカードを押して、制服に着替えて、窓口の椅子に座る。お客様が入ってきたら、駐車券を発券して、手渡す。以上。わかった?」

「はい」

と僕は答えた。それ以外になにか答えがあるだろ? うか?

ともかくジョースケの言つとおり、駐車場の仕事というのは退屈以外のなものでもない。朝のラッシュはもう過ぎ去ってしまったようで、あとは家族連ればかり。土曜ということもあり、大概の人間に慌てた様子は見られない。小さな音で流れのラジオが眠気を誘うし、他の二人は必要以上の言葉をほとんど交わさない。

時計を見るたびにぐつたりした。そろそろ一時間が経過したかなと思つと、実際は15分しか時計の針は進んでいない。壊れているんじゃないかと思うほどだ。ジョースケのいとこは僕にわりと歳も近いはずなのだが、一向に話しかけてくる様子もない。なんだか暗そうな人に見える。ひげはボーボーだし、髪は長い。とてもサービス業に関わる人間の風体ではない。

それでも僕は思い切つて声をかけてみることにした。とにかく耐え難いまでの退屈なのだ。

「……あの、いつもこんな感じなんですか?」

「え?」

とドロンとした目でこちらに顔を向ける。歳はたぶんハタチかそこらだらう。

「なんていふか、すぐ暇だなあとか思つちやいまして」「うん」

沈黙。

「名前、なんだっけ?」「あ、南です」「下の名前は?」「スグル」「なんて呼ばれてんの、普段は」「そうですね……まあ大体が南とかスグルとか……」「まんまか」「はい」「はい」

多少は興味を抱いてもらえたことにほっとしながら、それほど気張る必要もないんじやないかと思えてきた。おそらくはみんな暇つぶし半分で金を稼ぎに来ているのだろう。客が来ないあいだ、石田さんは新聞を読み続いているし、ヨシくんは漫画を読み続けている。この僕も次回は小説でも持つてくることにしよう。

タイトルをカタカナにしてみました。
もつ變えません……多分。

バイトが終わつたあと、僕はヒナに電話を掛けた。「ひひひひ、なんとか小さくとも話題があれば電話を掛けようとしている。彼女の方でも用がなくとも電話が掛かってくる。でもこれがへ付き合つてるくとこになるかと問われると、僕にもよくわからない。思い切つて切り出してみようかとこつも想つただが、違うと言われるのが怖くて言つ出せずにこなうなわけで。

「実はバイトを始めるんだ。ってか、もう始まつてる
「なんのバイト?」
「駐車場の……なんていうんだろう、見張り?」
「……見張りは違つんじやない?」
「うん。ともかく楽なバイト。今日もするこになくなづけとつて
た
「お金を貯めて、なにかしたいの?」
「いや、特にそういうわけでもないんだけどさ。ほり、朝子とかに
も金返さなくちゃいけないし
「君は将来、なにがしたいの?」

こきなり話が変わつてしまつた。『存知のとおり、ヒナこなういつ質問を遠慮なくぶつけてくるところがある。でも彼女自身には悪気があるわけではなく、ただ純粋に疑問を感じるだけなのだろう。

「将来ね。どうしたらいいんだろ?」
「夢はなーの?」

なんだかぎくつとさせられる。僕はなんとか話の筋を別へ向ける
よう努力した。

「ヒナはなになりたいの？」

「私は獣医になりたい」

「初めて聞いた。そんなんだ」

「うん」

数秒のあいだ、僕らは沈黙する。最近では、会話がなくなることにもそれほど気まずさを感じなくなっていた。彼女は普通の人間とはどこか少しだけ違うのだと僕は思い始めていた。無理して自分を取り繕つたり、他人のペースに合わせたりするような器用な人間ではないのだ。少なくとも。

僕はヒナに会いたくてたまらなくなつてきていた。彼女の声の一音一音を耳に入れるたび、心臓と運動しているみたいにドクドクと高鳴つた。僕はこらえきれずに彼女を誘つた。

「……今から会えるかな？」

「どこで？」

「この前の神社は？」

「いいよ」

僕は腕時計を確認した。これからだと、それほど長く会つている時間はなさそうだ。

「六時までに行くよ。でもお兄さんは怒らない？ 大丈夫？」

「お兄ちゃんは……あれからずっと帰つて来てないから」

僕は言葉を失つた。ほとぼりが冷めるといつことが、あの兄にはないのだろうか。

「……わかった。それについてはまた後でちよつと話す。とにかく待ってるよ」

風が出ていた。湿気を孕んだ、どことなく不吉な風だ。予報では曇りとなっていたが、雨の降りそうな気配。人気のない社では木々がざわめき、頭上では黒い雲がさかんに流れている。階段を上りきると、賽銭箱の前にヒナがぽつんと座っている。まだ制服を着たまま。それまでうなだれるように両腕に顔をうずめていたのだが、まだ。僕の足音を聞きつけて顔を上げた。

僕は隣に腰を下ろし、先ほどのことを尋ねてみた。

「お兄さんは、あれからなんの連絡もなし?」

彼女はうなずいた。そのままだことなくうつり見える。

「一度決めたら、それを簡単に崩したりはしない人だから」「そうだろうね」

僕はなにかいい方法がないものかと頭をひねらせた。でもどんな考えも浮かばなかつた。正直なところ、今すぐ彼女をこの腕に抱きたいと、そればかりが頭の中を満たしていたからだ。

つらそうな顔をして、ヒナはなにかの言葉を口にしけけた。でもそれは言葉にはならず、ためらいの息として吐き出された。やがて彼女はなにも言わず、僕の胸に顔をおしつけた。僕もなにも言わず、彼女の背中に腕を回した。

「お兄さんはきっと、ヒナのことを誰よりも愛してるんだろうね」

「どうしてそう想つの？」

「だって、じゃなければそんなに怒つたりしないもの」

ヒナの柔らかい肌の感触で頭の中がいっぱいになり、しばらく彼女が泣いていたことに気がつかなかつた。僕ははつとしたけれど、気づいたところでどう言葉を掛けていいものかわからなかつた。兄が出ていったことで、きっと彼女もつらい思いを抱え込んでいたのだろう。誰よりも僕自身がそれをこちばんに察してあげなければならなかつたのに。

「泣いていいよ、こへりでも」

僕がそう言つて、彼女は初めて笑つた。泣き顔を見せたくないのか、顔を上げなかつたけれど、笑つた振動が僕のお腹に伝わる。温かい吐息が僕の胸に広がる。

「……言つて恥ずかしくならない？」

そう言われて、初めて恥ずかしきところのものが込み上げる。どうやら抱擁力ところのは身に着けよつとして備わるものでもないらしい。

「恥ずかしいけど、好きだから」

「もう少し恥ずかしがつたら？」

言葉自体は皮肉っぽいけれど、その声に責めるような調子は見られない。その証拠に、ヒナの腕が僕の背中にまわり、強く締めつけた。僕らは長いあいだ、本当に長いあいだ抱き合つていた。他のことはなにも考えられなかつた。

しばらくして雨が降り出さなければ、僕らは永遠に抱き合っていたかもしれない。というか、それが可能であるならば、本当にそうしたはずだ。

「濡れちゃう

と僕はつぶやいた。けれどヒナは僕から離れようとしなかった。

「本堂に入つて、少し雨宿りしよう」

「怒られない?」

「平氣だよ。誰も来ない」

掛け金を外し、僕はいちおう中をのぞいた。人の気配はないが、なんだか薄気味悪い。床に敷いてある畳だけが新しく、他に調度品と呼べそうなものはなにもない。ただのがらんどうだ。それでも濡れてしまつたりはましからと、僕は彼女の手を引いて中に入った。

「なんだか悪いことしてる気分」

僕もそんな気持ちだった。でもそれ以上に、恋する相手と二人きりというシチュエーションが、僕の胸を高鳴らさせていた。部屋のすみっこに並んで座り、僕は唇が届きそうなくらいまで彼女をぐっと抱き寄せた。

ヒナは一度顔をそむけ、それからゆつくりとこちらを向いた。柔らかな唇の感触に、僕の息は乱れた。

「好きなんだ」

「……私も」

消え入るような声で彼女は言つた。僕は心臓が破裂しそうになつていた。

「私も、なに？」
「……好き」

もうこちぢり唇を重ね合わせ、舌と舌を絡み合わせた。遠い雷が、くぐもつた雨音の上を走つた。夕立独特的、包み込まれるような雰囲気がそこにはある。むつとする空氣の中、右も左もわからぬ無明の闇の中、僕らはただひたすらに相手を求めた。

彼女の胸に手を伸ばしたいという欲望が、すでに抑制の効かないものになつてゐる。ブラウスのリボンが僕の首筋をくすぐり、それを払いのけるふりをして、紐をほどいた。彼女は一瞬だけ抵抗のようなものを見せた。でも僕の手がブラウスの襟をくぐると、ヒナは体の力を抜いた。

「いいの？」

そのまま手を伸ばしてしまつることもできただけれど、僕は結局そう訊いた。彼女を傷つてしまつことがなにより怖かったからだ。

ヒナはまっすぐに僕を見据えた。それは不実な恋人を責めるようでもあつたし、どうしようか真剣に迷つてゐるみたいでもあつた。そのままとても長い時間がすぎた気がする。ただ雨の音だけが、沈黙を埋めるように本堂を包んだ。

やがて彼女は、「くんどだけ肯いた。

ふたたび唇が紡がれたとき、僕は彼女の胸元に手を伸ばした。その柔らかな感触に頭がくらつく。僕の指先が乳首に触れるとき、ヒナはびくんと体を震わせた。僕は彼女の体をゆっくりと床に寝かせ、ブラウスを完全に取つ払つてしまつ。薄闇の中に、彼女のほつそりとした鎖骨と白い胸が浮かび上がる。僕はゆっくりと首筋を舐め、円を描いて乳房を愛撫し、桜色の乳首を舌先でなぞる。まるで他人の体に乗り移つてしまつたようだ。現実味がない。

僕は彼女のスカートの中に手を入れた。するとヒナはあわてて僕の手をつかみ、訴えるように言った。

「待つて。お願ひ」

僕は肯いた。そしてヒナの体を起こし、壁に背をあずけて見るともなく反対の壁を見つめた。手が震えている。自分の体に乗り移つたなにかの感触が、まだ体にリアルに残つている。本当に僕の手がヒナの胸に触れたのか？ 本当に僕の舌が 信じられない。

僕は本当に困惑していたんだと思う。ほんの数秒のことだけれど、僕の脳みそは信じがたい被害妄想を容認した。この部屋にいるのは本当は自分ひとりで、今までのなにもかもはすべて妄想だったのだ、と。

落とし穴にも似たそんな白昼夢のせいで、部屋が沈黙に包まれていることに気づくのにえらく時間がかかった。僕らは長いあいだ言葉を交わさなかつた。まるで二人のあいだにあつた大切なにかが失われてしまつたとでも言つよう。

静寂を埋めるように、雨音が一段と強さを増していく。まさにそのとき雷が鳴り、ヒナの青ざめた顔が絵の具をさつと引いたように

暗闇の中に浮かび上がった。その瞳は涙を浮かべていた。

「……どうして？」

それはおそらく僕の声だった。彼女はなにも答えなかつたし、まだ僕をまっすぐに見据えていた。どういうわけか胸がえぐられる思いだつた。

僕はヒナの涙を指先でぬぐい、彼女の体を抱き寄せた。しかしそこからはやはりなにかが失われていた。親密味といった言葉では括れない、大切なにかが。そしてその特殊な喪失感は決して僕にだけ芽生えていたわけではない。それは僕にもわかつているし、ヒナにもわかつている。

僕らはなにかに穢されていた。幼く清い心についた初めての穢れだ。

なにか言いたかつた。なにか言わなくてはならなかつた。慰めになる一言、ごまかす一言、励ます一言を。ただ実際には僕も穢れを感じていたし、それも彼女はわかつていた。だからどちらとも口を開かなかつたのだ。互いを思うあまり、その痛みがわかるあまりに。口から出た言葉は、思いとは裏腹のものだつた。

「そろそろ……帰らうか

氣づくと雨は止んでいた。軒先からぽたぽたと垂れる雨粒が羊歯を打ち、林の中で鳥が甲高い声を上げた。きっと雨が上がつたこと

を喜んでいるのだろう。彼女はひとりで歩き出し、僕はそのあとを追つた。階段で別れるとき、口の中でさよならを言った。その声が彼女に伝わっていないことは明白だった。なにしろヒナは、はるか先の通りを曲がるまで一度もこちらに振り向かなかつたのだから。

七月第一週、梅雨にもかかわらずお天気マークが一週間ずらりと並ぶ。そして初めての給料日だ。しかるべき準備 つまりは気分を高揚させる音楽、ルトヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの「交響曲第九番第二楽章」を聴きながら、僕はゆっくりと給料袋を開いた。それは僕が生まれて初めて手に入れた、本当の意味でのお金だ。

とまあ大げさなことを言ってしまうとそうなるのだが、ともかく十一日間の勤務で六万円弱のお金を手にすることができた。楽して稼ぐのが利口だとは思わない。けれど小説を読んでいるだけでお金が入るのであれば、まあ今のうちはそれに越したこともないだろうと思つわけで。

あの日から、僕とヒナは連絡を取り合つていなかつた。多分、それは間違つたことなんだろう。僕はあのあとすぐにでも、彼女に電話するなりメールを送るなりしなければならなかつたのだ。一日経てば、また明日でにもと思つ。三日経てば、来週にでもと思つ。そうして人は徐々に離れて行く……そうわかつていながら、どうして電話しないんだろう? おそらく僕は自分が傷つくことを恐れているんだと思う。

そんな僕を朝子が怪しまないわけはない。そう思つて食事の時間をさりげなくずらしていたのだが、とつとう土曜の朝にかち合つてしまつた。なんとも察しの良い姉である。僕が自分を避けていることをとうに知つていたらしく、出かけたと母に偽らせておいて、僕が食卓につくなり、猫のように俊敏に母屋に入ってきた。

「お母さん、おはよう。……あら、あんたもいたのね

「こちや悪いかよ

と僕が返す。朝子は気持ちの悪いくらに愛想の良い顔をして、僕の真向かいに座つた。

「ちーて、じゃあどうして最近あたしを避けるのか、その理由を教えてもらおうかしら?」

「別に避けてねーし」

「嘘つき。なにかあたしに後ろめたいことがあるんでしょう? 雛子ちゃんのこととか」

「ここまで来ると、もう超能力が備わっているとしか思えない。その能力をもつと世の中のことに使えるいいの?」

僕はため息をひとつつき、後ろにいた母をちょっと見やつた。ここで本当のことを話すには、いたさか抵抗がある。僕は朝子に向かってかがみこみ、ちややき声で言つた。

「……あとで部屋に行つて話すよ。こじやちよつとなんだから」「なによ。そんなに深刻なの?」

「まーね

「あんたバカじゃないの?」

ビンタが飛んで来なかつただけマシと言うべきかどうか、僕が事の次第を話しきるなり、すつと息を吸い込み、朝子は物凄い剣幕でそう怒鳴つた。

「じゃあ自分が代わってみるよ」

「本当に代わりたい。そうできるならね」

なにか反論したかったが、ひとつもそれらしい言葉は見つからなかつた。じゃあ僕はどうすればよかつたんだ?

「要するにあなたは自分が惨めな気分になるのが嫌だつただけ。自分がかわいくて、自分が傷つくのが怖くてそつしたの。離子ちゃんのことなんかこれっぽっちも考えずにね」

「考へてるよ。毎日考へてる」

「だーかーらー、あなたが考へてるのはどうやつて自分が傷つかずには彼女と仲直りできるかどうかってことなの。それくらい自分でわからんないの?」

「仲直りつていうか、別にケンカしたわけじゃないんだけど……」

「ケンカの方がまだマシね。あなたもしここでなにもしなかつたら、もう一度と離子ちゃんに会えないかもよ」

僕は言葉を失つた。脅しを真に受けたとかそういうことではなく、朝子の言葉には少なからず真実味が備わっていたからだ。時間が解決してくれる そんな仄めかしや氣休めを頼りにしていた僕にとっては強烈な一言だつた。

「それもあんたはね、自分が離子ちゃんを傷つけたことにはこれっぽつとも罪悪感を感じてない。向こうはあんたを傷つけたと思い込んで泣いてんのよ。 その涙のわけがどうして理解できないの、このグズ」

「ひどい言われようだ」

「あつたりまえでしょ。弟じゃなかつたら病院送りにじてるわ」

カウチソファから前のめりになつて僕を見据えていた朝子は、そ

う言に切ると鼻を鳴らして顔を背けた。それからすかくと立ち上がり、実に姿勢よく玄関の方へと歩いていった。

「……そんでおれはビリしたらいいの?」

「好きにすれば。あたしが姉として言つべきことはすべて言つたんだし、あとは自分で考えなさい。……それから貸してくる分は給料袋から引かせてもらいましたから」

「ええ? あれ?」

朝子がくるりと振り返る。その顔にはもはやお決まりの小悪魔的な笑みが浮かんでいる。

「あたしがなにも知らないと思つたら大間違い。アキタカ君からの電話もないのにあんたが毎度々々週末に出かけるわけないじゃない。あんたもあたしになにか隠し事をするなら、もう少しやり方つてものを覚えるべきね。おあこにゃあ」

玄関口にひらひらと振つた手をのぞかせて、ドアがバタンと閉じた。あわてて給料袋の中をのぞいて見ると、労働力にして約17時間ほどのお金が抜き取られている。思わず壁に向かって「鬼ババ」と叫びそうになつたが、[冗談にしても今は相手の気が立つて]いるのでやめておいた。

「どうか僕自身、朝子にはつきり言わることを望んでいたのかかもしれない。もしかしたら僕はいちばんしてはいけないことをしてるんじゃないだろうか、とそんな不安があつたからだ。でもなんて言えばいいんだろう? 謝ればいいってものじゃない。だからと言つて、慰めるものでも、笑い飛ばせるようなことでもない。」

一晩経つても考えはまとまらなかつた。何度もヒナに電話をかけようとして、寸前で思いとどまつた。朝子の言つとおりだ、僕は傷つくるを恐れている。彼女に止めならを言われるのが怖くてしうがない。しかもその半分だって、自分の中の自尊心みたいなものが失われるのを恐れてこるのでだ。僕はどうしようもないやつだ。

「また暗い顔して。顔に苔ができるるや」

苔ができるのではなく、瘦けるのだ。そんなひつゝにみすら面倒になる今日この頃。ひとつだけ言えるのは、この声の主にはとても青少年の悩みは理解できないし、誰がなんと言つたって理解してみようとも思わないだろうこと」と。

「……まあ、梅雨だからな」
「そうだよ。苔なんか生やしてないで、もっと周りを見ろ。そしたらじゅう濡れてて」
「それ以上は言わせん」
「じゃあツヤツヤしてて」
「ああもつ。今日はおまえにかまつてる気分じゃないんだよ。誰か他の人んとこ行つてくれんこ？」
「勘違いすんな。かまつてやつてるのはおれの方だ。それに前の席なんだからしようがねえだらうが」

地獄より深いため息が出る。確かにアキタ力の存在は精神的に気休めにはなる。けれどそのせいでも結論を延ばそうとしてしまつ僕がいるわけで。

「保健室でも行こうかな……胃が痛くなりそうだから」

「いいのかな？ 次は恵子先生とのラブ・ラブ・ブレクチャーだといつのに」

「だからなに？」

僕の開き直りに、アキタカは驚愕を超えて怒りすら覚えたような顔をする。

「ハア？ おまえこそなに？ この退屈なカリキュラムの中で、あの恵子先生とお喋りできるせっかくの貴重な時間を逃してもいいってのかよ」

「あんなあ、忘れたのか？ あの人には」

そこまで言いかけてハツとした。恵子先生に彼氏がいることを知っているのは全校でおそらく僕だけなのだ。しかもその彼氏が、たった今黒板の前で小さく何事かをつぶやき続けている東野教諭だとは、アキタカはもちろんのこと全男子生徒は夢にも思つまい。朝子だったら僕の不自然に中途半端なセリフで、事の次第のほとんどを感じてしまつていただろう。相手がアキタカなら大丈夫だと思うのだが……。

「忘れるもんかい。あの人には胸がある。ちなみにおれのスカウターレベルEを表示している」

「バカでよかつた。本当によかつた。

「……つておまえとふざけてる暇はないんだよ。こいつちは考え」とがあるんだから」

「じゃあ言つてみろよ。キスの次はなんだ？ 今度は妊娠させたか？」

「身もふたもない言い方はよしやがれ。それにちょっと声が大きい？」

「別にいいじゃん。もうみんな知ってるんだし」

「は？ なにがだよ」

「おれがおまえに代わって皿盛しここでやったから、キスのこと。

ありがたく思えよ」

オレガオマエニカワツテジマンシタヤツタカラ、キスノコト。

バカはよくない。本当によくない。

「おまえ……嘘だろ？」「

「いやいや、ほんと。ちゃんとチーンメールも作つとこでやつたから」

その瞬間、教室の天井が崩れ落ち、僕は瓦礫の下で咆哮をあげた。

「……おまえチーンソーで上半身と下半身をバギーにされたいのか？ それとも気円斬で体を真つ一つにされたいのか？」

「それどっちも同じだろ？が」

「ボケで言つてるんじゃない。マジで言つてるんだ。おまえはなぜそういうことをする？ あれほど人には言つなときつて言つておいたのに」

「え、だつてあれフリーでしょ？」

なぜ普通高校に通う普通の男子高校生がリアルで泣きこながらのバラエティに生きなければならんのだ。たぶんそのことを一から十まで説明したところで、この男には嘔吐と放送禁止用語がNGということ以外はなにひとつして理解できないのだろう。

「おれに言えることはひとつ。たつた今お前はひとりの友を失った

「待て、待つてくれケンシロウ」

「おまえはもう死んでいる」

あ、あべし！ と言つたかどつかは知らないが、僕はアキタ力には一瞥もくれずに手を挙げ、良心の塊である東野教諭に体調不良を訴え、わざわざ保健室へと向かつた。

ちなみに我が校の保健室の先生は、よくドラマやアニメに登場するような見目麗しい色気ある女医などでは全然なく、「おばあちゃんのぼたぼた焼き」のパッケージから抜け出してきたかのような中年女性である。本来、保健室の先生ほど生徒の体調について疑り深い目を向ける者はいはずなのだが、彼女はこちらがまだ言いわけがましいことを口にする前からすでに診断書に適当な文を記し始めているからありがたいことこの上ない。だがその優しさからか、保健室登校を助長しているとの意見も多い。

「暖かいからっておなか出して寝ちゃダメよ

」 そう言つて僕に布団をかけてくれる。先生、あなたの優しさがなにより温かいです。

どんな悩みにも、いざれ眠りはやつてくる。しかし目をつぶつても苦悩から目をそらすことはできないのか、ゆりかごのように半覚醒とレム睡眠が繰り返される。意識が混濁し、時間の経過が不明瞭になる。

……鐘が鳴り、廊下が騒がしくなる……誰かが保健室に勢いよく飛び込んできて、意味のないことを大声でまくし立てる……鐘が鳴り、廊下が静まり返る……誰かが静かに入ってきて、聞き取れない

声で先生と会話する……僕の隣のベッドに寝かせられ、聞こえた咳で女子だとわかる……先生が保健室を留守にしてしまう……僕と彼女だけが残される……長い沈黙に、一人の息づかいだけが聞こえる……僕の心臓は意味もなく高鳴る……いや、意味があつて高鳴っている……一人のあいだにあるものは、薄い白のカーテンだけ……。

「……南先輩、ですよね？」

淡い夢が消え去り、黒ひげ危機一髪のような驚きの現実が突如として姿を現した。おかげで僕は口の中に溜まっていたよだれを喉につまらせ、密かにあえいだ。まさかこんなところで、しかもこんなシチュエーションで夕美と鉢合わせてしまつなんて。

「勝手に診断書を見ちゃいました。すみません

「いや、いいけど……風邪？」

「生理痛です。さつき突然始まっちゃって」

そういうことはもう少し恥じらつて言つべきだと思うが。しかしまあ男の僕からそんなことを忠告するべきではないのだろう。

「そつか。じゃあゆつくり休んだ方がいいね」

「……お話できませんか。少しだけ」

「ど、どんなことだらう？」

「南先輩、ヒナと付き合つてるんですね。キスしたって、そう聞きました」

アキタカへの比類なき怒りがふたたび湧き起つてきた。奴は人を修羅場にする呪いの力もあるんじゃないだろうか。それにしてもカーテン一枚をへだてるだけで、これほど彼女の言葉に重みが増すとは。

「……うん、したよ」

僕が口^ひもりながらうつ答えると、夕美は楽しげに笑つた。もちろん表面上は、といつことだが。

「私、自分がフラれたってことはよくわかつてゐるんです。そりや泣きましたし、ちょつぴり自信も失いました。私つてダメですね、ほんと。佐野先輩だつて加奈子に取られちゃうし、南先輩もヒナのものになっちゃうし……あーあ、もつとかわいく生まれてくれればなあ」

彼女が涙し始めたことはよくわかつた。そしてそれを必死に隠そうとする姿は、あまりにも痛々しく健気に見えた。僕は自分がなにをしようとしているかもよくわかつてない。なにをしてやりたいかといつことむ。

「あ、そつだ。南先輩さつそく私と浮氣しちゃいます？ ほら、やつぱり恋愛つてそういうのも楽しいじゃないですか。あ、でも私みたいなブスじや嫌ですよね。ていうか引いちゃいました？ 引いちやいましたよね？ それじゃ、そろそろ教室戻つてきます。これ以上南先輩に嫌われ」

僕はカーテンを引き、彼女の体を抱き寄せた。夕美は小さな悲鳴と共に不恰好にベツドビベツドのあいだにくず折れ、僕はそれでも強引に彼女の体を抱き寄せた。

「痛い……」

「ごめん。本当にごめん。でもひとつだけ言いたいんだけど、君は十分かわいいし、僕を好きになるなんてもつたないって思う。言

いわけや仄めかじじやなくて、本当にそつ細つてる。だから……」

彼女の小さな手が僕の口をふさいだ。夕美はあらためて僕のベッドに腰を下ろす。目と目が合い、彼女の両手が僕の腰に回る。その温かい吐息が、僕の耳を撫でる。

「もう大丈夫です。でもひとつだけお願ひしていいですか？」

僕はうなずいた。

「……私とキス、してください。」

アート・プロジェクトが完成！

今さらで大変申し訳ないのだが、僕のファースト・キスの相手は白石離子ではない。あまりにも遠い記憶のことなのですっかりと失念していたが、初めてキスを体験したのは小学校に上がる少し前のことだ。大人びているといえば大人びているのかもしない。それは十年経つて今なお特別なキスだ。

彼女の名前は渡辺サヤ。僕の家のはす向かいに住み、母子家庭だった。しかし不思議なことに彼女の母親には会った記憶がないし、話した覚えもない。いつたいどうやって彼女と知り合ったのかも今になるとよくわからない。あれだけ近くに住んでいながら、学校だってどういうわけか別々だったのだ。おそらくは近所の公園かどこかで意気投合し、そのまま親しくなつていったのだろうと思つ。

サヤちゃんは明るく、背が高く、それでいて天使のようにかわいらしい子だった。古い記憶だから、多少あいまいに色づけされているかもしれないが、その出会いは僕にとって衝撃だった。なにしろ異性とともに言葉を交わすことすら初めてだったのに、その相手がとても見田麗しいときているのだから。

サヤちゃんはフォレ스트・ガンプにとつてのジョニー・カラーンであり、幼き僕にとって女性の理想となりつつあった。正確には、大人になっていく過程で幾度となく彼女を思い浮かべ、彼女を無意識のうちにひとつずつ座標としたのだ。だから恋心を知らぬ当時の僕にとって、サヤちゃんの存在は手の届かない場所に置かれた近未来の

玩具のよくなきものでしかなかつた。そんなものを自分が手にすることができるとは微塵も考えなかつた。

よつて彼女から発せられる自然な好意にも到底気がつけなかつたわけで。そんなある日、僕の部屋のベッドで（彼女の部屋には普段決して上がることができなかつた）トランポリンごっこをしていて、僕はサヤちゃんを怪我させてしまつた。冗談で押したつもりが、彼女は片足をベッドから踏み外してしまつたのである。

サヤちゃんは必死で涙をこらえていたけれど、僕は自分が取り返しのつかないことをしてしまつたとわかつた。でも「めん」という言葉がうまくでなかつたと記憶している。それまでの楽しかつた親密な空氣は消えうせ、世界中がしんとしてしまつたよつだつた。僕はベッドの上で呆然と立ちぬくし、彼女は涙をすするよつな音を出した。

「……ううん、平氣平氣」

首を振りながら、彼女はそう言つた。でも全然平氣じやない。誰あらう僕自身が傷ついてしまつっていたのだから。

僕は怪我した彼女を家まで送つた。まだ昼を少し過ぎたくらいの時間だつたけれど、とてもこれからまた同じように遊ぶことはできないと知つていた。サヤちゃんは僕に気をつかつて懸命にとりとめのないことを話し続けていたけれど、僕の方はほんやりと相づちを打つくらいのことしかできなかつた。

彼女を家の玄関まで送り、ひとりぼっちになつてしまつと、寂しさよりも惨めな気分になつた。胸をぎゅっと絞られるような、立つてこるものつらい心境だ。帰り道に僕はすり泣いた。鼻水をだら

だらと垂らしながら、それでも嗚咽を懸命に抑えて。

それから僕たちが遊ぶことはなくなった。どちらも田の家のチャイムを鳴らそうとはせず、それぞれの同姓の友だちと、また元のよつこ遊ぶよつになつた。でも近くに住んでいるのだし、一生顔を合わせなこというわけにはもちろんいかないから、ある田に僕らは公園で再会してしまつた。

サヤちゃんの姿を田にすると、僕の心臓は高鳴つた。向こうがこちらに気づき、田と田が命と、より鼓動が強くなつた。サヤちゃんは一步か二歩、じりじりと後ずさりすると、両手で顔をおおい、わっと泣き出した。彼女を取り囲んだ女の子たちはわけがわからないといつ風に、「サヤちゃんどうしたの?」を繰り返した。

でも彼女はなにも説明しなかつた。その姿を見て、僕の胸はこれ以上ないほどじごめんと押された。

その日の夜のことだ。僕はわけを説明して母と連れ立ち、サヤちゃんの家のチャイムを鳴らした。母はサヤちゃんのおばさん（やはり顔は覚えていない）となにかを話し、僕は背中を押されるような感じで、一階にあるサヤちゃんの部屋へ通された。そのとき僕が考えていたのは、彼女に向かつてどういつ風に謝らうかということだつた。緊張がピークに達し、後ろから聞こえてくる母やおばさんの声が現実味を欠いて頭にわんわんと響いた。ドアをノックする。サヤちゃんの小さな返答が聞こえ、僕は部屋の中に足を踏み入れた。

サヤちゃんはどんな部屋に住んでいるんだろう? そんな風にとあざき考えることのあつた僕は、その夢のよつな部屋に息を呑んだ。茶畠を思わせるグリーンの絨毯、ふわつとしたクリーニング屋の前でかぐ香り。室内のあちこちにクマやキツネのぬいぐるみが飾られ、

たくさんフリルのついたドレスや、子供らしからぬシックな洋服がクローゼットに収まっている。小さなふかふかのベッドにはピンク・レースの天蓋がついており、枕のすぐ上に、写真が山ほど飾られていた。

サヤちゃんはベッドに腰掛け、僕に背中を向けていた。足をぶらぶらさせているのが体を少し揺らし、なにかに向かって屈んでいる。僕はなにかの言葉 おそらくは謝罪の言葉を口にしながら、彼女の方へ歩み寄った。そのうちに、小さな音色が聞こえてきた。オルゴールだ。近づいてみると、彼女がオルゴールに耳をつけていることがわかった。

僕が呆然と彼女の後ろに立ち尽くしていると、サヤちゃんは顔を上げて僕を見た。哀しそうな、それでいてむずがついているような顔だ。それから自分の座っている隣をちょっと見て、「座つていいよ」と言った。僕は言われたとおり彼女の隣に腰を下ろした。オルゴールが奏でていたのは、「エリーゼのために」だった。

長い沈黙。そのうちにオルゴールはゆっくりと力尽き、深い静寂が訪れた。彼女はまた涙をすすつた。でも今度は泣いているわけではなかつた。僕の方に思い切つて顔を向け、その表情をうががつた。そのとき僕は決心して、サヤちゃんにごめんと言つた。

他にもなにか言つたかもしれないが、今はよく覚えてない。とにかく彼女は、それで天使の笑顔を取り戻した。恥ずかしそうに微笑みながら、僕の手を握り、そして口にキスをした。その後、僕が何度その感触を思い出そうと心がけたことだろう。でもあまりに一瞬のことだつたし、そういう思い出に限つて人はよく思い出せなかつたりするものなんじやないだろうか。

とにかくそういう風にして、また僕らのあいだに友情が戻つた。

でもそれからしばらくして、サヤちゃんは遠くに引っ越してしまい、僕もやがては家族と一緒にそこを離れた。数度の手紙のやりとりはあつたが、それも長くは続かなかつた。送られてくる手紙には必ず何枚かの写真と、手書きの絵が添えられていて、そのうちのいくつかは今でも僕の学習机に大事にしまつておいてある。

誰にでもやはり、忘れられない土地というものがある。中学校の夏にひとりでその地を訪れ、高層マンションが立つてているのを見て驚かされた。公園は遊具こそ新しく造りかえられたが、敷地は今までそのまま残されている。僕はマンションの金網を乗り越え、そこで半時間ほど内省にふけつた。それが僕とサヤちゃんの最後の思い出だ。

というわけでいさか説明が長くなつてしまつたが、ヒナとのキスが僕の初めてというわけではない。浮かれた心が落ち着きを見せたとき、ふとサヤちゃんのことが頭に思い浮かんだのだ。誰かとしめたキスのことをいちいち勘定しているなんて、アキタカが知つたら一笑にふされることだろう。僕だって十年後にはそんなものを勘定していないかもしない。けれど少年期を語る上では決して外せないポイントもある。改めて訂正させてもらえるなら、初めてがサヤちゃん、二度目がヒナ、そして三人目の相手が相田夕美ということになる。

第三章をキリのみへ終わらせておいたので、少し短くなってしまった。
すみません。

どんな言いわけを並べてみても他人には理解してもらえないといふことが、人生には往々にして存在する。そういう場合、常識のあら人間であれば、初めから言いわけをせずに、黙つて相手の非難に耐えるだろう。ずるがしこい人間はうまくごまかすとか、誰か他人のせいにしてしまうかもしれない。でも自分をごまかせるかというと、案外そううまくもいかない。というかそんなことをまかり通してしまふ人間はどう考えたってまともな神経の持ち主ではない。ドストエフスキイ風に言うなら、根っからの卑劣漢というところだろう。

さて、そんなわけで、僕は罪の意識よりもそんな自問自答を繰り返している。なにが正しくてなにが間違つているかなんて、所詮明確な線引きはない。できることならそんなものは考えずにいたい。けれどこんな風に変わらない駐車場の景色を何時間と見せられていると、嫌でも頭に思い浮かぶ。一度思い浮かんてしまえば、本を読むことにも集中できなくなる。誰か話し相手が必要だ。誰か、以外のまともな話し相手が。

「……それでおれに話した、とそういうことか……」

ヨシくんは顔に戸惑いを浮かべてはいたものの、ちょっとびりと頬を赤く染めた。普段他人に相談事を持ちかけられることが少ないからだろう。もしかすると嬉しかったのかもしれない。

「でも誰にも言わないで下さいね、ほんと」

「うん、大丈夫。口は堅い」

「自分でも結論といふが、どうしたらいいかってことはわかってる

んです。……でも身動きとれなくて

「うーん、なるほど……なるほどなるほど……」

「背中を押して欲しいとか、間を取り持つて欲しいっていうわけじゃないんです。ただこの気持ちを誰かにわかつてほしかったっていうか」

たぶん、あくまで推論ではあるが、ヨシくんも頭の中では朝子と同じようなことを思ったのだろう。「それは逃げだ」とか「男らしくない」とか、そういうことを。しかしバイトで退屈な勤務時間を共有するにあたって気がついたのだが、彼は見た目とは裏腹に心優しい人物である。とてもそういうことを他人に向かって正直に口には出せないのだろう。

そんな葛藤が彼の心のうちであつたのかなかったのか、諦めに近いため息を吐いて、彼は一言こう言い放つた。

「……青春だな

「ええ、青春ですね

僕もこう言った。それから束の間の沈黙を挟んで、僕らはぱつと吹き出した。

「うちの妹も、まあこいつがおれに似ても似つかないくらい美人なんだけど、そのせいか年中オトコをとつかえひつかえ。たぶん南の言つよつな悩みもないんだろうな。たまにここにも来るんだけど

わ……」

「妹さんいたんですね

「ていうかうち四人兄弟

「へえ

「しかもおれ長男

「おわっ、マジっすか？」

「マジマジ。まあその妹だけは腹違いなんだだけね

「……まあ人には色々あるんだよね。おれにも南にも、誰にでもさう言つてヨシくんは煙草に火を点け、哀愁深げに煙を吐いた。

「……まあ人には色々あるんだよね。おれにも南にも、誰にでもさう言つてヨシくんは煙草に火を点け、哀愁深げに煙を吐いた。

僕はその夜、勇気を振り絞つてヒナに電話をかけた。ほとんどやけっぱちで発信ボタンを押すと、途端にそれまで考えていた言いわけは混乱の渦に飲み込まれてしまった。でもそんな言いわけを考える必要など始めからなかったのだ。彼女の携帯電話はすでに解約されていたのだから。

オカケニナツタバンゴウハ、ゲンザイツカワレテオリマセン。

ベッドに潜り込んでからずっと後悔し続けていた。ようやく後悔し始めたと、そう言つてもいいかもしない。でもそれを過ぎると、今度は悔しさが込み上ってきた。こんなに彼女のことについて悩んでいたのに、当の本人は僕のことなどあつさりと忘れてしまったようと思えたからだ。実際はそうじゃないかもしない。でもそのとき僕は、この苦しみから早く解放されたかった。そのためにいちばん楽で手つ取り早い方法は、彼女を浅はかで子供じみた女と軽蔑するにあった。

お待たせしました……すみません。○○

一学期のうち、いちばん長く苛立たしいのが七月だと僕は思う。察しのいい方ならわかると思うが、さて七月の終わりからなにが始まるだろか そう、トーゼン夏休みだ。毎年毎年似たような自堕落な長期休暇を過ごし、あとと気がついたころには九月がもうそこまで迫ってきている。水着やバカンス、浴衣に夏祭り、そんな幻想もいつの間にやら僕へ消え去り、後に残るは宿題の山。……ああ、無情。

だがしかし今年こそはと意気込むことに意味がある。そこに夏休みのすべてが詰まっていると言つても過言ではない。ひとつ確かなことは、ちゃんと事前に色々と計画しておこうことだ。

「……とこうわけで今から色々と決めておきたいわけなんだが」

めずらしく熱弁をふるう僕を見て、アキタカはいつも以上になんだか気のない顔をしている。こいつは温度差って、どちらにとつても迷惑極まりない。

「いーじやん別に。夏休み入つてからで。……ていうかなぜ童貞のおまえなんかと夏休みをいつしょに過ごすなくちゃならねーんだ」

ちよつと待て。童貞は余計だ。

「じゃあ君は誰とどうして過ごすんだね？ まさかあの下級生

「あーあー聞こえない聞こえないー」

自分の醜態をさらすのには多少の抵抗があるらしい。人の秘密は

あれほど嬉々として周囲にバラまくへせに。

「じゃあ上級生か？ あの、なんだっけ、名前は忘れちやつたけども。毎週土曜に遊びに行つてゐていつ」

「あーあれならもう別れた」

「ええ、なんで？」

「会いたい会いたいってしつこにからフツツてやつた。めんじくせーんだよ、あの女」

開いた口がふさがらないとはこのことだ。あれほど足しげく通つていたというのに、気に入らなくなると簡単にポイするとは。

「……おまえ将来ろくな大人にならんぞ」

「ろくな大人にならないよ、今のうちにろくでもないことをし尽くしこんだよ」

説得力があるのだかないのだが。同姓に対してもいい加減なところもあるにせよ、常識ある付き合いでできるくせに、なぜ異性にはこれほどサバサバと冷徹になれるのだろう。

僕がそんなことに頭を悩ませているのもおかまいなしに、アキタ力は物憂げなため息をついて窓の方に振り返つた。やつがこういう顔をするときに口にする言葉は大体見当がつく。

「……恵子先生は夏休みをどうして過ごすんだらうなあ。やつぱひと夏の情事とかあるのかなあ？ 大人だもんなあ」

「誰に向かつて話しかけてるんだ、おまえは」

「おれもけつこう大人になつたと思つんだけど……ハア。やつぱり

恵子先生を抱くにはもう少し男を磨かねばならんだろうか」

昼休みの生暖かい風がふわりとアキタ力の前髪を撫でる。校庭からは心の琴線に触れる女子たちのにぎわい。あ、とアキタ力の短い一声のあと、僕の目にも日下部京子が映つた。目に新しいボーグイッシュなショートの髪が、それはそれで胸にどきりとくる。

「へえ。日下部先輩、髪切ったんだ」

「……チャンス」

「は？ なにがやねん」

「女が髪を切る、それすなわち男にフラれた証」

「一昔前のマンガじゃねえんだから。堀北真希とかいるし、そういうの影響だろ、つておい」

いつかどこかで見た光景。僕が話し終える前にアキタ力は教室を飛び出した。どこに向かったのかはもはや言うまでもない。三十秒と経たないうちに窓の下に見たことのある頭かたちが登場する。

しかし日下部京子が属する、あの見目麗しい女子グループにひとりで突っ込んでいく気だろ？ いくら馬鹿でも羞恥心くらいは持ち合わせていて欲しいと真剣にそう願う。そういうのはバラエティ番組でちょっと見るからおもしろいのだ。現実世界で始終そんなことをしていれば、本人は元より周りの人間の神経が持たない。

しかしそこはさすがのアキタ力である。上級生にあれほど尻尾を振つていただけあって、交友があるらしいグループのひとりがやつに声をかけた。その上級生の存在は僕でも知っている。いかにも気が強そうなギャルで、その超級ミニスカートは我が高のパンチラ製造機の名を欲しいままにしている。

「お、アツキーじゃん。ひとりでなにやつてんの？」

「いや、ちょっと、あの……」

思わぬ下級生女の登場で、女子たちはかすかにざわめいた。女のひそひそ声というのは、時としてわざと周囲に聞こえるように発しているとしか思えないことがある。アキタカがじきまきながらグループの輪に加わると、「誰?」とか「私知ってる」とかいう声が漏れた。認めたくはないが、そこに「かわいい」という声も含まれていたことをここに書き記さねばならないだろつ。

「あ、つーかアンタ、優子の電話シカトしてるらしいじゃん。なにやつてんの?」

試合開始早々からの強烈なボディブロー。アキタカの顔が青ざめたのがここから見えていてもよくわかる。これだから女の情報網を甘くみてはいけないのだ。女というのは、ひとりが秘密を知っていたら十人が知っているものと思わなくてはいけない。十人に憎まれたら、女すべてが敵だと思わなくてはならない。

「いやーそのーそれは……なんていうか、意見の相違があつて。ハハ

「ハハハじゃねーだろ。ま、別にいいけどちゃんと連絡しなよ。ていうか、そんでなにしにきたの?」

「あ、日下部先輩が髪切ったんだなあと思つて。なんか理由があるのかなあ、なんて思つて」「え?」

突然話を振られ、透きとおるような声で困惑の声をもじす日下部京子。

「別に理由なんかないよ。ただのイメチェン」「……あ、そうっすか

おいおい、そんなに落胆しなくても。

「優子の次は京ちゃん狙つてんのかよ、コイツは」「いやーもしかしたら彼氏と別れたのかなーとか思つて。だつてそしたらチャンスじやないっすか」「ていうか、あたしカレシいないし」

日下部先輩の一言に、つんうんとこつ感じでうなずく取り巻き。アキタカはあるみるみるうちに明るい表情を取り戻し、女子たちに向かってひとつ歩み寄つた。

「ま、マジっすか？　じゃあ番号教えてもらひつても……」「ただし、アンタには興味ないつて。残念」

そんな一刺しのあと、校庭中に響く笑い声。日下部京子本人でさえ笑つてゐる。終わつたな、アキタカ。さあ、せつせつと一歩ちへ戻つてきなさい。お兄さんが心ゆくまで慰めてやるから。

その日の夜に起つた出来事はあまりにも唐突であり、あまりにも脈絡を欠いているもののように思えた。きっと誰だつてそう思つはずだ。

僕は携帯電話を手にし、部屋の安物カウチに半ば寝転がるように座りながら、夕美とのメールを続けていた。僕が事実上ヒナと別れてしまつたことを、彼女はまだ知らないはずだ。ヒナは自分からそんなことを夕美に話したりはしないだろうし、夕美だつて僕のことを尋ねたりしたくはないだろう。……いや、あえて尋ねるかもしれない。もしかしたら夕美もすべてを知つていて、こうして僕に毎日何通ものメールを送つてくるのかもしれない。

どちらもありえる。というか、別にどちらでもかまわない。

僕の中のヒナは、その顔を思い浮かべてみても、今ではなんだかうまくいかない。古い写真のように、ところどころが曖昧にぼやけ、いつしょにわからちあつた胸の高鳴りもそれと共に薄れている。もつとショックを受けるものだと思つていたけど、現実はそうでもない。

僕は夕美に惹かれ始めていた。彼女は快活で育ちもよく、なにより一途だ。それゆえに傷つきやすく、また可憐でもある。僕みたいな冴えない男子が彼女の守り人になれるのであれば、それは光栄の至りというところだらう。

「来週遊びに行つてもいいですか？ もう変なことお願いしたりしないんで」

たぶん、彼女が眞実を知らないとしてもだが、夕美は僕とヒナのあいだになにかがあつたことを悟っているのだろう。でなければ友達の彼氏の家に遊びに行きたいなんて軽々しく口にする娘じゃない。

「いいよ。……って言つても、ついついすることほとんどないけどね」

そんなメールを返信したまさにそのときのことだ。玄関のチャイムが鳴り、そのあとに静かなノックが数回続いた。だつたらチャイムを鳴らす意味あるのか？ と脳内突つ込みを入れながら、僕はそれに応答する声を上げた。時計を見ると9時を回つている。こんな時間にやつてくる人間は朝子以外にない。

……ハズなのだが、そこに立つっていたのはまさに壁だ。Tシャツとジーンズを着た壁。袖から突き出た一本の腕からは蛇のよくな血管が浮き出ている。その顔を見上げると、前回の恐怖がまざまざと蘇つた。

だがその表情は前回のような怒りに染まつてはいない。彼は僕に対して顔をそむけたまま、その場に仁王立ちしている。

「……こ、こんばんは」

僕のそんな声が聞こえたのか聞こえなかつたのか、ヒナの兄は部屋の奥をちらりとのぞいた。

「雛子……いるか？」

「え、いないでですよ」

「そうか」

沈黙。僕らが静止しているのをいいことに、一匹の蚊が部屋の中

に侵入するのが視界の端をかすめた。

「連絡……してるんだろうな？」

僕はなにも答えられなかつた。今にでも襟首をつかまれると思つた。でもヒナの兄が口にした言葉は、全然予想と違つものだつた。

「……この前、悪かつたな

「え？」

彼を見ると、その浅黒い顔に少しだけ赤みが差してゐる。

「まさかそのために来たんですか？ その、この前のことを謝るためになに？」

彼はなにも答えなかつた。といつより適当な言葉が出なかつたのか、口を半ば開きかけたものの、声はなかつた。

「別に気にしてないですよ。というか、お兄さんが勘違いするのも無理はないですしその、離子さんから僕も色々聞きまして……親代わりのお兄さんが妹を心配するのは当たり前かなって」

「悪かつた。謝る。ごめん

「いやいや、ほんとにいいんです。ほんとに」

僕と同様に、彼もいくらかほつとしたようだつた。お互に相手を感心するような空気が生まれ始めていた。でもそのすぐあとに、彼の表情はふたたび落ち着きを失つた。

「……それで、今日はお姉さんは？」

「ああ、朝子なら隣にいると思いますよ。呼んできます？」

「いやいや、呼ばなくていい。ただおれが悪かつたと言つたと云えてくれれば……」

またにそのときだ。折悪しく隣の部屋のドアが開き、だらしのない格好の朝子が歯ブラシをくわえたまま登場した。風呂上りなのか、タオルを頭に巻き、顔は真っ赤に火照っている。

「ほへ？ あんらのおろもうひ？」

たぶん、「あんたのお友だち？」と訊こうとしたのだろう。眼鏡をかけていないせいで、ヒナの兄と氣づかないらしい。

「いや、お友達っていうか……」

そこで僕の言葉を遮り、ヒナの兄は唐突に謝罪の念を述べた。なにを思ったのか知らないが、とてつもない大声を上げて。

「先日はすみませんでした！ 弟さんに手を挙げたばかりでなく、お姉さんにも乱暴な口を聞いてしまい、大変に申し訳なく思っています！」

もしも漫畫なら、ここで朝子の髪は一本残らず逆立つていたことだろう。彼が叫び終えると、きょとんとした顔で朝子は僕と彼のあいだを見つめた。くわえていた歯ブラシが口からぽろりと落ちると同時に、朝子は自我を取り戻した。

「……あ、誰かと思ったらこの前の」

「はい、先日は失礼をいたしました！」

まるで軍隊だ。こんな大男が僕の姉に誠心誠意誤っている姿とい

うのは、なんだか妙な光景である。さすがの朝子も動搖を隠せない。

「わ、わかったわかった。悪いと思つてゐるのほわかるけど、もひつりと静かにしてくれる? ここは住宅街だし」

「……あ、すみません」

仕切りなおしとばかり、そこで朝子がひとつ咳払いを交える。

「で、あのことならあたしもスグルも事情はわかつてゐし、そんなに根に持つてないから安心しなよ」

彼は大きくため息をついた。よっぽど愚かつめにいたらしい。

「ていうかどうやって来たの? 車かなんか?」

「いや、自分は走つてきました」

僕と朝子は吹き出した。僕はちよつと遠慮したけど。

「あんた普通に話すとなかなかおもしろいね。……で、気が済んだらもう帰りなよ。送つてあげられないのは悪いけど」

「あ、はい」

でも彼はその場を立ち去るとはしなかった。歯で下唇をかみ締め、それまで背けていた顔を朝子に向けた。

「……今日はもうひとつ、もうひとつ言わなくちゃいけない」とがあるんです

「なに? 言つてみなよ」

「実はその……ええと、なんていうか……クソ……」

彼は息を乱しながら、顔を紅潮させ始めた。拳を固く握り、手の甲にたくましい血管が浮かぶ。なんだか穩便でない空氣に、僕と朝子はひるみながら目を合わせた。

「……クソ……言つて決めたのに……」

「な、なんだつたらもういつかいちに帰つて考えてくれば？ なんだか知らないけど……ねえ、スグル？」

こんなときだけ人に助けを求めるのはやめてくれ。悪いが力にはなれん。

「おれは……おれは前回の一件で、あなたのことが好きになつてしまいました……言いたいことは、それだけです……」

「ええ？」

僕は思わず声をあげた。そのとき朝子はといつと、そういうとき女がするよつた、声にならない驚きの表情を浮かべていた。

連載からもう一年が経とうとしています。
まだまだ先を書かなければならぬのに、時の流れはまつたく早い
ものです。

世の中には目にしてはならない一幕というものが存在する。時として探究心、知識欲求とは、投げやりにこちらの気分を高鳴らせておいて、ござという間際にさつどこかへ消えてしまう。

かわいいところで言えば、サンタを父親だと見破ってしまうこと。えげつのない点で言えば、僕らがどうやって生まれてきたかということ。人は往々に知りたくないものほど知りたがる傾向がある。そんな馬鹿な、と否定する声もあるだろうが、知識欲を充たしたあとには、往々にしてこの声が上がるものだ。

「……見なきやよかつた」
「あーあ、知らなきやよかつた」

最近の出来事で言えば、恵子先生の交際相手がそれだ。相手が自身の人間であり、まつとうな大人であれば、一人はそれ相応の行為をすでに済ましている。まつともって信じがたい／信じたくない事実ではあるけれども、一人はセックスをしているのだ。

そして僕はまたしても見たくなかった一幕を目にしてしまうことになる。そしてそういうことが起きるときには、必ずなにがしかの予感が存在することを進んで認めなくてはならない。例えばいつもは通らない道を通り、遅くまで学校に残りすぎていたりすると、危険に遭遇する確率は格段にアップする。いくらため息をつこうと、目にしてしまった光景を忘れることはできない。

そんなわけで、今さらなにを言つても後の祭りなのだが、僕はその日、桃太郎電鉄の最新版を手にし、その上ミスターードーナツの土産まで持つて、アキタカの家に向かい歩いていた。やれやれまつたく、どうしてそんな気を起こしたものか、自分自身でもよくわからぬ。いくら僕とアキタカの家がそれほど離れていないとはい、田舎の小学生じやないんだから、普通は事前に連絡くらい入れるものだろう。

チャイムを押してから答えがあるまで、二三分はかかったろうと思う。家の中に誰かがいることは話し声や物音でわかつていたから、僕は玄関の前に立ち尽くしていた。

「はーい」

その声がアキタカのものであることに間違はない。でもそこには、いつもの奴からはあまり聞かれない警戒心のこもった響きがあった。

「オーッス。南だけど」

「だ、誰？」

「だから南だつて。スグルだよ」

それから意味のない沈黙が五秒ばかり続いた。

「おーい。遊びに来たんだけど。アキタカ？」
「ちょっと、いま無理。ちょっと待つて」

無理なのか、それともちょっと待てばいいものなのか。そんな疑問を口にする間もなく、アキタカが階段を大慌てで上る音が聞こえ

てきた。なにやら立て込んでいるらしい。仕方なく僕は玄関から二三歩あとずさりし、壁のバスケット・ゴールに向かってエア・フリースローを決めた。

まさにそのときのことだつた。宙に放つた透明なボールの先、二階の窓にちらりと女の後姿が見えた。しかも裸の女の後姿が。彼女はカーテンが少し開いていることに気づいていなか、そのまま誰か、おそらくはアキタ力と話している。そしてその女がさつとこちらに振り向いたとき、見たくもない乳房と共に見たくもない池西加奈子の顔が見えた。目と目が合い、互いにはつという一瞬があり、カーテンがぴしゃりと閉じられる。僕はスローを放つた状態のまま、ぽかんと口を開けていた。意外ときれいなおっぱいだったのは、誰にも言わず墓まで持つていいこうと思う。

僕がそのまま茫然自失で立ち尽くしていること一分。やがて二人の激しい口論が家の外まで漏れ出し、池西加奈子が玄関から飛び出してきた。僕とはいっさい目を合わさず、逃げるようになりを曲がつて消えてしまつ。目には涙を浮かべているようだつた。

アキタ力はそのあとで玄関からひょっこり顔を出すと、辺りをきよろきよろ見回したあとで、僕に向かつてなんともばつの悪い苦笑いを浮かべた。僕の方でも薄気味悪い笑みを浮かべていたんじゃないかと思う。こういうときは一体なんと言つたらいいものなのか。

「……わりいな。待たせて」

「いや、いいけど。大丈夫なの？」

「ああ、うん。大丈夫、大丈夫」

全然大丈夫でないことはよく承知していたけれど、僕は黙つて家の中に上がり、加奈子についての話題はその日一言も持ち出さなか

つた。まあおかげで半時間くらいは気まずい思いをすることにもなつてしまつたのだが、僕もアキタカもばつが悪かつたし、結局は時間と共に暗黙の了解としてその問題は片づけられることになつた。

おそらくアキタカは本当に池西加奈子をセックストフレンドに仕立て上げてしまつたのだろう。事実を冗談にするのは面白いが、冗談が事実になるのは意外と笑えない。もし人格というものが多種多様な着ぐるみであるとするのなら、決して人前でそれを脱いではいけないのだ。仮にうつかりとそのことを忘れたら、知らぬうちにどうでもない大恥を搔くんじゃないかと、僕は常々不安に思つてしまつた。

夏休みの始まる二日前、僕はバイトのシフト表とにらめっこをしながら、夏休みの（あくまで架空の）予定を練っていた。始めの二日間は夕美が僕の部屋に遊びに来ることになつていて、一日間というのがまさに重要だ。それは半口ずつの一日間なのか、それとも丸々48時間なのか、それを知るのは彼女自身でしかない。……とまあそんな妄想もあり、さつきからペンをぐるぐると回すばかりで一向に予定表に筆が加わらない。

「毎年毎年ホント懲りないねえ。予定なんか立てたって実行できないんだからやめときなつて」

「うつせこ」

とは反論しつつも、予定表を投げ出し、口うりして朝子の部屋でコーヒーを飲んでしまつているわけで。

「それ飲んだら帰つてよ。あたしもう寝るんだから」

我が家は化粧台の前で髪をとかし終えると眼鏡をかけ、ベッドに腰掛けた。知らぬ間に髪にパークをかけたらしく、以前のアラレちゃんスタイルから一転、なんだか大人びて見える。それどころか顔にデスマーティナーパックまでしている。

「なんだよ。冷てえな。そんなデビルマンみたいな顔して」「古いね、あんた。せめてピッコロでしょ」

ボケ倒しですか、キリないんですけど。

「姉貴じゃ、夏だからって浮ついてるじゃん
「誰が？ あたしが？」

心外とばかり、朝子が身を乗り出して血らを指差す。

「そりだよ。もつ付き合つてるんでしょ、あの人と？」

「バカ、なに言つてんの。まだ保留中」

なんということか。朝子も偉くなつたものである。将来有望、ドーラフト候補に上がることはまず間違いなしといつ離子の兄を相手に、生まれてこの方大した羨望を浴びたこともない我が姉が手綱を握っているとば。

「ま、嫌いじゃない」とは確かだけどね。ただ若いし、ちょっと熱くなりやすいっていうか、まともに付き合つたら疲れちゃいそうなのよ。独占欲も強そうだし。だからアノ手の子はほんちが主導権を握つてやらなきゃダメなわけ」

髪の先を指でぐるぐるとねじりながら朝子は言つ。まるであらゆる恋愛を経験してきたかのような口ぶりだ。どうせアラフォー系雑誌かなにかの受け売りだろうけど。

「ふーん。そんなもんかなあ」

と僕は頭の後ろで手を組み、天井を見上げる。

「とこりあんたはビうなの？」

「え、なにが？」

「なにがって、離子ちゃん」

眼鏡の奥の朝子の目がきらりと冷たく光る。僕が返答にもたついていると、朝子がふと笑いをもらす。

「こがあたしが気づかないとでも思つて？ あんたが別れたことなんてとつぶに知つて。だつてあんた、ぴたりと離子ちゃんのこと話さなくなるんだもん」

「バレてるだろうとは思つてたけど、やつぱりバレてたわけか

「ちよつとがつかりしたけどね。でもあたしはなんにも言わない。これ以上首つっこむとあたしも責任を感じざるおえなくなつちやうから。要するにさ、あんたと離子ちゃんは自分たちの距離をうまく見つけ出せなかつたんだよね」

僕はコーヒーを一口すすり、その神妙な言葉づかいに朝子の顔をマグカップのふちからちよつとのぞき見た。

「なんだよ、距離つて」

「恋愛つていののはね、距離がいちばん大事なの。相手に近寄りすぎてもダメだし、遠くてもダメ。お互いがいちばんリラックスできて、ちよつぴり刺激のある距離を探すのが理想だけど、その距離はいつも一定つてわけじゃないから、いいときもあるし、悪いときもある。ただ離れすぎちゃつたり、逆に近寄りすぎちゃつたりすると、もう修復がきかなくなつたりする。十代のうちは近寄りすぎちゃうことが多いのかな、歳を取ると今度は反対に離れすぎる。恋愛のプロはその距離のブレを楽しむつていうけど、あたしにもまだわからぬ。これは別に恋愛に限つたことじやなくて、家族でも友だちでも同じことなんだけどさ」

それは真実だった。恋が愛に基づいているかどうかは別としても。

「……説得力がありすぎてわかに姉貴の言葉とは信じがたいんだ

けれども

「そりゃ全部が全部あたしの考えつてわけじゃないもん」

「つーか恋愛のプロってなんだよ。山本モナ？」

「あんなのただの蟻地獄でしょうが。これでもあたしはけつぜんの手の相談される方なんだから。恋愛のテクニックは案外相談されて身につくってこともあんのよ。色々な恋のあり方を客観視できるわけだしね」

「おみそれしました」

「満足したならもう寝てよ。夜更かしはお肌に悪いんだから。出るとき電気消して出でつてよね」

へいへい。

友だちってなんだろう？ 時々そう考える。

いつも一緒にいるから友だちなのか、友だちだからいつも一緒にいるのか。分かり合えているから友だちなのか、分かり合いたいと望むから友だちなのか。うるさいことを言われずに済むから友だちなのか、時には真剣に意見をぶつけ合えるから友だちなのか。

まあそれタイプはあるだろう。けれど、たぶん僕は事なき主義の方だ。もめごとに発展するくらいならいくらでも口をつぐんでいるし、面倒なことにはできるだけ関わり合いたくない。例えヒナの兄貴のときのように半ば否応なく関わりあつてしまつたとしても、なるべくその先は考えないように努めている。およそ十代というものは自ら進んでトラブルに足を踏み入れる輩も多いが、僕にそれはまるでない。なさず歩むと言つていいほどだ。

だから僕はアキタカといいるのだらう。奴には自分しか見えてない。他人を干渉しない主義というわけではなく、ただ単純に興味がないのだ。そしてそういう人間のそばにいるときが、僕はいちばんほっとできる。

第三者であることに、僕は安心をおぼえていた。

アキタカを通じて自分の好奇心を満たそうとしていた。けれどそんなまやかしがいつまでも続くはずはない。なぜなら僕はアキタカと同じ十六歳の少年なわけだし、実際のところ第三者でもなんでもない。だから恋をしたいなんて言い出したのだ。遠くから見ているだけでは我慢できず、それを手に取つて味わつてみたいと思つたのだ。

僕は弱い人間だと思う。僕はヒナを利用したのだ。自分の好奇心を満たすためだけに彼女を利用し、面倒になりそうな気配を感じてすぐに逃げ去つた卑怯な男。でもどうしたらいい？ 自分の弱さに立ち向かうなんて、今の僕にはできそつなものない。

「アキツヒセ、つらいとか思つたりしないの？」

学校に通う道すがら、僕はアキタカの横顔を見ながらそつ尋ねた。

「つらいってなにが？」

「だつてさ、色んな女子に声かけてるだろ？ そしたら当然悪い噂とかも立つしさ、それがつらく感じたりはしないのかなって」

「気にしないね、全然」

「あ、さいですか」

愚問とばかり、アキタカはフンと鼻を鳴らす。

「おまえはまだおれつて男をわかつてないな」「わかつていのいというか、わかりたくないだけなんだが」「まあ聞け。なぜ女がおれの悪口を言つと思つ？ それはな、相手にされなくて悔しかつたり、寂しかつたりするからなんだよ。そしてそういうた女たちの歯ぎしりが、おれをさらに高みへと運んでくれる」

「待て。つっこみどころが多すぎて少々時間がかかりそうだ」「ほんとはみんなおれのことが好きなんだな。だからかまつて欲しくてわざと悪口なんか言つたりすんだよ。その証拠に優子なんてさんざんおれの悪口言つぶらしておきながら電話でやりなおしたいとか言つんだぜ？」

「ふーん。して答えは？」

「だが断る。この佐野明隆の最も好きなことのひとつは、自分で魅力的だと思っている女にのと断つてやることだ」「……それが言いたいだけだ」

「まあつまり女なんてのは浅はかなプライド持つてる奴ばっかりだから、人前では強がっちゃうんだな。だからんなもん気にする必要ないわけ」

「うーむ。納得しかけている自分が怖い」

「ま、君も童貞を卒業したらわかるさ。まつはつは」

「うう高笑いを響かせてアキタカは僕の肩をポンポンと叩く。しかし言つていることに多少の理はありますだ。

「……で、夏休みの予定はやつぱりその手のことで埋まつてゐわけ？」

「まあボチボチとね。スグルは夏休みに一億回オナニーするんだつけ？」

「できねーよ！ 無理だろ！」

「といったところで笑点おひらき。また来週」「流れねーぞ！ おなじみのテーマ曲なんて流れねーからな！」

友だちってなんだる？いや、ホント。

夏休み前日の学校と、この二つのどちらもなおずか旅行支度のよつなものである。「であるからして」を口癖とする我が校長のありがたき訓示を耳にしても、生徒たちは心ここにあらずといった感じ。教室に戻る道すがらも、がやがやといつも以上に騒がしい。浮かれの気分はこの僕をもつてしても例外ではない。気にしないよう努めても、ついつい夕美のいる一年生の階に目がいつてしまつ。

「なーんか悪だくみしてない?」

突然、両肩にそつと柔らかい手が置かれ、僕は思わず立ち止まつた。振り向くと、そこには天女のような恵子先生の笑みがあつた。今日はいつもの白衣ではなく、ストライプのスーツを華麗にまとつている。

「え?」

「さつきからひとりでにやにやして。彼女でもできた?」

なんと鋭い。あつとこう間に顔が熱くなつた。

「そ、そんなに僕にやにやしてました?」

「しーーーーた。遠くから見てもわかつたもの。あんまり浮かれちゃダメよ、夏だからって」

恵子先生はそういうとおしるしのように笑みを向け、僕の腕にそつと触れてから他の生徒に寄つて行つた。そのあまりに素敵なしぐさに、僕はぼうつとなつてしまつた。してはいけない妄想を繰り広げる頭に杭を打ち、いかんいかんと首を振る。恵子先生は恵子先生、

夕美は夕美。一人を天秤にかけるような真似をしてはいけないし、する権利もない。断じてない。

「えーとこうわけで、校長先生からもお話がありましたように、みなさん各自ルールを守つて夏休みを楽しんでください。それではさよなら」

東野担任の実にさりげないとしたホームルームが終わり、生徒たちは一斉に夏休みといつも樂園へと解き放たれた。この日ばかりはぐずぐずと学校に残つてゐる生徒はいない。僕は思つてこりあつて、アキタカにひとつ断りを告げる。

「今日は一緒に帰れないと思つ。悪いけど」

「え、なんで？」

「ちよつと用あるんだよ。一年の教室に」

嘘はついてない、嘘はついていないはずだ。そう直じに想い込ませながらも、動搖を隠そうとする自分が情けない。

「なんで一年？」

「……だから、ちよつとね」

「ほほう。女か」

「ま、まーな」

僕がそう答えると、冷やかすよつた田線のあと、アキタカはにやりと笑つた。それから僕の肩をぽんぽんと叩き、耳元でそつと囁く。

「あとで報告よみしへ」

やめてくれないか……」ちこちやうじい雰囲気をかもし出すのは。

夕美は中央廊下で僕を待っていた。一年の教室のすぐそばだ。僕が歩み寄ると、彼女は顔を心持ち赤くし、そつと笑みを浮かべた。

「先輩を待つてました」

「見れば分かるよ」

僕らは笑った。

「一緒に帰ろうか」

「はい」

女の子と肩を並べて歩くというのは、何度体験しても新鮮な気持ちになれる。僕と夕美は人目を忍ぶために、裏門からそろって学校を出たのだが、周りを見渡してみるとカッフルしかいない。やはりみんな考へることと同じらしい。

「へー。あの一人付き合つてたんだ。先輩知つてました?」

「いや全然」

「へーへー。明日から毎日裏門で帰ろうかなあ」

「……明日は夏休みなんだけど」

「あ、そうでしたね。私つてバカなのかも」

「ていうか夕美ちゃん裏門から駅までの行き方わかる?」

「え、てつきり先輩が知ってるものかと……」

「いや、まったくもつて知らないんだけど」

「前の人たちについていけば着けそうじゃないですか?」

「うん……だといいんだけど」

しかし道を進むにつれ、一団だつたはずのカップルが一組一組と道を外れて行く。気づけばいつの間にやら見たことのない景色に四方八方を囲まれているし、太陽は容赦なく降り注いで体の水分を奪う。そしてとうとう頼りにしていた一組のカップルがどちらかの家らしいマンションのエントランスに入ってしまうと、僕らは近くの公園でベンチに腰を下ろした。

「…………」

汗を欠いたペットボトルを手に、僕はぼつりとつぶやいた。

「たぶん市内だとは思うんですけど」

「ごめん。おれがしつかりしてないからだね…………」

「私がいけないんです。前の人たちについていこうなんて言つから

深い沈黙とため息が重なる。しかし夕美はなにかを思いついたようにはっと顔を上げ、僕に微笑んだ。どこか照れるようだ。

「あの、先輩」

「え、なになに？」

「この前のキスのこと、覚えてますよね？」

「これまた唐突に来た。この娘は本当に油断ならない。

「うん。覚えてるけど」

「あれってやっぱり……義理ですか？」

「義理……ではない」

「じゃあなんですか？」

「油断ならない。本当に油断ならない。一秒でいい。答えを考えさ

せてくれ。ああ、こんなときにあのスタンドがいれば。

「正直な気持ちでいいんです。私のことは気にせず」

「わかった。正直に言つ。それは夕美ちゃんと、キスが、したかつたからだ」

瞬間湯沸かし器よろしく、僕の顔が真っ赤になると同時に、夕美は驚きの表情を浮かべた。

「え、嬉しい。本当ですか？」

僕はこくりと肯いた。それから気を落ち着けようと思を深く吐き、肩の力を抜いた。それが功を奏したのか、ぱっと頭の中が冴え渡つてきた。どうせいつか打ち明けるならと、僕は即座に覚悟を決めた。

「おれ、夕美ちゃんのこと好きだよ。少なくとも、好きになりかけてる」

そう言いながら、僕は夕美の方へ顔を向けた。まったく、このときばかりはどうしてこんな台詞が真顔で言えたものなのか、我ながらさっぱりとわからない。彼女のまっすぐな気持ちに、いくらか開き直つていたのかもしれない。

夕美の美しく澄んだ瞳に、かすかな動搖が見えた。焦点がブレ、僕の言葉を理解するのに少しのあいだ時間がかかる。

「最初はかわいい後輩っていう目でしか見てなかつたけど、どんどん心が惹かれるのが自分でもわかる。夕美ちゃんの明るさにぐいぐい引っ張られてる感じがする……ねえ、なにか言って欲しいんだけど。恥ずかしいから」

「嬉しい、です」

「もう敬語なんか使わなくていいよ」

「嬉しい」

僕は彼女の肩を抱いた。そつと、しかし力強く。やがて夕美が顔を押しつけた僕の胸に、じつとりと温かみが広がる。それにしても、どうして女の子はこんなに小さくて柔らかいのだろう。

「泣いてるの？」

「……だつて、嬉しいで」

泣き顔が見たかったというのもある。彼女の顎にそつと手をあて、僕はキスをした。当然ながらショッパン味がする。

「先輩、愛してる」
「それは言いすぎだよ」
「ううん。そんなことない」
「明日うちに来るの？」
「……今日はダメ？」
「いいけど、門限があるでしょ」

まだ目に涙を溜めたまま、夕美がくすくすと笑う。

「え、どうしたの？」

「あのね、加奈子に協力してもらつて、うちの親には今日からテニス部の合宿つてことにしてあるの。本当は部活入っていないんだけど」「……な、なるほど。君もなかなかやるね」
「あ、でも先輩の邪魔にならないようにするから安心して。ソファで寝るから」
「いやいや、おれがソファで寝るよ」

「大丈夫。夕美ちっちゃいから」

そう言つてにんまり笑う彼女を僕はもういちど抱きしめる。たぶ

ん僕は、いま宇宙で最も幸せなくそ野郎なのだろう。

更新が遅れてばかりで申し訳ありません。
そしてまた性描[2]を書いてしまいました……が、まだまだ書くつもりです。

反省はしているが後悔はしていない。
と、止まらねーんだ……この右腕が〇'Z

それからうちに着くまでのことを、僕はなんだかうまく思い出すことができない。道中も、頭の中にもやがかかっているような状態で、時おり夕美と話しながら彼女の顔をじっと見つめたり、突然激しい愛しさに襲われ、彼女の小さな体を抱きしめたくなったり……。たぶん幸せすぎて、そのことが自分で信じられないのだろう。こんなに可愛い子が自分の彼女になるなんて、という驚きが、何度も雷のように僕の体を打つた。

僕らはデービーズで早めの夕食をとり、見知った道に出てからも、時間をかけて帰路についた。気づくと時刻は夜七時を過ぎ、僕は夕美を外で待たせ、一声母屋に声を掛けてから、自分の部屋に向かった。どういうわけだろう、家の中に入るときも、まるで誰か知らない人の部屋に上がるみたいな心境だった。

「怪しまれなかつた？ 大丈夫？」

「全然。どうぞ」

僕は照れ笑いしながら、彼女を部屋に招き入れた。夕美は辺りをきょりきょりと見回してから、得意気に笑つた。

「先輩の部屋つて感じ」

「そう？」

「うん。夕美そう思つた」

「どうやらくんが？」

「……んと、小さつぱりしてるつていうか、綺麗に整頓されてるイメージ」

夕美をカウチソファに座らせ、僕は台所に立つた。

「制服脱いだら? なにか貸すよ」

「ううん。バッグの中に着替え持つてきたから平氣」

「「一ヒーは飲める?」

「ミルクとお砂糖たっぷり入れてくれれば」

僕が湯を沸かし、準備を整えているあいだ、夕美はソファに後ろ向きに座り、両腕に頸をのせて、その様子を眺めていた。気がついて振り返ると、愛嬌のある笑顔を見せ、僕もついついそれにつられて笑つてしまつ。

「もうすぐできるよ」

「うん。……ねえ、先輩のことなんて呼んだらいいかな?」

その問いかけは、僕に苦いものを思い起させた。そういうえばひとつだけ、はつきりさせておくべき問題がある。

「先輩は夕美になんて呼ばれたい?」

「なんでもいいよ」

「夕美は夕美のまんまがいいな。先輩にそう呼ばれるの、好きだか

「ううん?」

僕は「一ヒー」を一つテーブルに置き、彼女の隣に座つた。それからなるべく雰囲気を壊さないよつ心がけて、次の質問をぶつけた。

「その前にいひし、いいかな?」

「うん?」

「あのね……おれと離子ちゃんのこと、なんだけど……」

それを聞くとさすがに、夕美の顔も強張った。あくまで笑顔を崩さずにはいるが、その奥に緊張が見て取れる。

「……うん、聞いてるよ」

「そうなんだ。そつか。ならいいんだけど」

「夕美もいつこ、訊いていいかな？」

悩むように間を置いて、彼女はそう言った。その言葉を発するには、かなり勇気がいったみたいだった。といつのも夕美の目に明らかな怯えが映っていたからだ。目線を合わせようともせず、どこか後ろめたさを感じているみたいだった。

「いいよ」

僕はわけもなくはらはらし始めていた。新しい恋人の前で、かつての交際相手との関係を尋ねられる気分というのが、初めてわかつたような気がする。

「……夕美はね、先輩がどうして離子をフッきちやつたんだりうと思つて」

「いや、それは間違つてるよ。フラれたのはおれの方だから

氣を使ってそんな言い方をしてくれたんだろうと思つた。

「え？ でもじやあどうして……」

「たしかに、悪いのはおれの方だつたよ。完全に

「違うの。やうじやなくて」

夕美はそれから後の言葉をためらつた。ハッとして表情をがらりと変え、大きな瞳に哀しみが浮かび上がつた。彼女は怯えるように

僕のふとこりに身を寄せ、顔をうつむけた。

「……ヒナ、泣いてたから」

「え？」

「学校にも行つてないつて聞いて、電話も繋がらなかつたから、会いに行つたの。そしたらね、先輩のことまだ好きなんだけど、どうしていいかわからないつて……」

夕美はそこまで話して、唐突に声を詰まらせ、泣き始めた。放つたらかしの「コーヒー」が、カップからゅうゅうと湯気を上げ続ける。

「どうして夕美が泣くんだよ」

「私ね、言えなかつたの！ それ言つたら、もしそれを言つたら、先輩がまたヒナのものになつちゃうと思つて…」

夕美は全身を震わせて、そう泣きじやくつた。僕はその姿に圧倒され、困惑し、物も言えなかつた。体の奥底から、そそりの這い上がるような悪寒が上つてきた。心臓の音がなによりも激しく、連続して胸を打つた。

「するいことしたの、先輩のこと好きだから……誰にもとられたくないからたから……」

時間が必要だつた。物事を落ち着けてくれる、ひとときの静寂が。僕はなんとか自制心を取り戻し、夕美の背中に両手を回した。でもその体は、半時間前とは打つて変わり、よそよそしく強張つていたしかしわかっている。距離を感じるのは夕美ではなく、この僕自身なのだ。

「そんなの気にすることないよ」

声を裏返すことなく言こ切るには、かなりの集中力を要した。体の震えが、なによりの動搖を指し示している。

「……嫌いにならないで。先輩に嫌われたら、夕美もつ生きていけない」

「嫌いになんかならないよ」

「キスして」

僕らは口づけを交わした。熱を持つてうねる夕美の舌に對して、僕の下は無機的に動いた。自分が冷静であればあるほど、夕美の切々たる求めが、より哀しく胸に響いた。

「触つて。夕美の体、もつと」

彼女はそう言つて僕の手を取り、ためらいなく自分の胸に押し当てた。身から熱い求めが遠く離れていくのを感じながら、それでも僕は彼女のブラウスを脱がし、首筋に舌を這わせた。熱い吐息が夕美の唇から漏れ、僕はソファの上で彼女に覆いかぶさるように小ぶりな乳房を愛撫した。夕美は痕が残るくらい僕の背中にしがみつき、足をからませた。

「先輩も脱いで……」

皮膚と皮膚が合わさると、彼女の体がどれほど熱いかがわかる。僕らは舌をからませあつたまま、互いの下着を取つ払つた。夕美のアンダー・ヘアが僕のおなかに触れるのを感じた。

「ベッドに行こう」

そう言つてから、自分の声がおぞろしく冷たいことに気がついた。それと共に、激しい罪悪感が身を襲つた。でも今さらどうしようか言つんだ？ 僕らはベッドで続きを始めた。けれど僕のペースはずっと柔らかいままだつた。

こんなことが実際に起つたなんて、信じられなかつた。つむじまがりを相手にしてくるようなどうにもならない恨めしさが、ひしひしと胸に上つた。

「……」「めん。今日はだめだ」

「夕美はいいよ。先輩とこうしていられれば」

夕美は僕の体にぴつたりと身を寄せ、何度も何度もキスを求めた。なにか会話するよりは、僕もそつちの方がずっと楽だつた。いまにか話題を振られても、まともな答えを返すことはできなかつただろうと思うからだ。

「シャワー浴びてきなよ」

「うん」

「早く寝て明日はどこかに出かけよう」

「うん」

夕美が僕の動搖に傷ついていないという確証はない。彼女はもちらんどこかで気がついている。だから僕は風呂場のドアをノックし、「一緒に入つてもいい？」と訊いた。彼女は「いいよ」と言つ。嫌われたくないのは僕の方かもしれない。自分でも時おりわからなくなる。僕は一体なに遠慮し、なにを恐れているんだろう、と。

元々このシーンが描きたくて始めたような物語だったのですが、当初の構想からはずいぶんかけ離れたものになってしましました。
……プロット通りに書き進めるって難しいです、ほんと。

長いあいだ、疲れなかつた。なにも考えられなかつた。

時は長針と短針を失い、僕は永遠にも思える寂寥の中にいた。これほどの幸せに浸りながら、虚しさを感じていた。それは完全に失敗と終わつたヒナとの恋であり、それをほとんど全て相手のせいにしてしまかした自分への不甲斐なさから来るものだつた。

深夜、僕は静かにベッドを抜け出し、部屋を出た。夏の夜風がさつと頬を撫で、ざわつという不安気な音を遠くで鳴らせた。僕は格子に寄りかかり、無人のアパート共用部と眼下に広がる空き地を眺めた。つらいというわけじゃない。ビカラかと言えば、無気力に近い放心状態が身を包んでいた。

僕は結局、家族に頼つた。姉の部屋を静かにノックし、戸が開くのを待つた。でもまさにそのとき、ポケットの中の携帯電話が激しい振動を訴えた。

「もしもし?」

僕は動転していたのだろう、相手の名前も見ずにそのまま答えた。反射的にドアの前を離れ、アパートの階段を下りた。

「もしもし?」

答えはなかつた。画面を確認すると、公衆電話から掛けられたものだつた。

「…………ヒナ?」

自分でそう口にしながら、胸が動悸を訴えた。

「……君だろ? ねえ、ヒナなんだろ?」

深い沈黙の中に、かすかな息づかいが聞こえた。耳を澄ますと、それがやがて小さな嗚咽に変わっていくのがわかつた。

「わかつてると、どうして電話してきたのか……加奈子ちゃんから聞いたんだろ?」

それから長い沈黙があつた。

「…………」

そして突然、これまでに溜め込んできたものが、悔しさとなつて僕の目に溢れた。Tシャツで涙を拭い、僕は言葉をつづつた。

「どうして、どうして正直な気持ちを言つてくれなかつたんだよ!… どうしてそんなに不器用なんだよ! 馬鹿!」

そんなことを言いたいはずじゃなかつたのに、どうしても抑えられなかつた。謝るべきは自分だとわりながら、駄々っ子のようだ僕は語氣を強めた。

「好きだつたんだよ! むけやくつけ好きだつたんだよ! だからどうしていいかわからなかつたんだ!」

そこまで言い切ると、穴にストンと落ちたよつと、頭の中が空っぽになつた。後に横たわっていたのは、深い静寂だった。僕は荒ぶつた息を落ち着け、深呼吸した。

「……『めざ。怒鳴つたりして。もう切るよ。でも電話を切る前に、なにか言つべきことがあるはずだ』

「…… わよなひ」

その声を聞いて、僕の心はかつてないほどに痛んだ。再びあふれ出す涙をこらえ、僕は言った。

「わよなひ、ヒナ、…… わよなひ」

電話を切り、僕はアパートの壁を背にしてずるずると地面に座り込んだ。涙が止めどなく溢れ、壮絶な哀しみが身を覆つた。目に見えぬ大雨に打たれ、僕は赤子のように泣きじやくつた。あまりに自分が哀れだつた。だから外の大声に気づいて朝子が下りてきたときも、僕は井戸の底にいて、姉の声は遙か遠くからしか届かなかつた。

.....

氣づくと僕は朝子の部屋のベッドに座らされ、温かいマットスープの入ったマグカップを手にしていた。テーブルの上の手鏡に顔が映ると、その目は腫れ上がり、鼻の下が赤く染まつっていた。

「どう? 少しは落ち着いた?」

僕は涙をすすりながら肯いた。

「まったく……あんた抱えて部屋まで上るの大変だつたんだから」

「……わるい」

「わりにじや済ませさせ。一体なにがあつたのよ。話したくなきやそれでもいいけど」

「……今度話すよ」

朝子は腕組みしてため息をつき、僕の髪を意味もなくしゃくしやにした。

「ほら、落ち着いたんなら部屋戻んなさこよ。女の子がいるんでしょ」

「……その前に煙草一本くれよ」

「はあ？」

「隠し持つてんの知つてんだから」

朝子にはめずらしくへんとした顔を見せ、しぶしぶと化粧箱の中からセーラム・ライトを取り出し、僕に向かって一本投げた。

「ベランダで吸つてよ。匂い残るとお母さんバレるから」

僕はよろけながらベランダに出て、煙草に火を点けた。一口吸うと喉に苦味が広がり、めまいがした。隣の僕の部屋に電気は点いていない。あの騒ぎが夕美に気づかれなかつたことは、僕をほつとさせた。

明かりのこぼれるベランダの戸口に立ち、朝子は僕を見据えた。姉は隣に寝ているのが夕美だということは知らない。

「……あんた、ちょっと抱え込みすぎじゃないの？」

「なにが」

「二ングンカンケイ」

「別に」

「ませたことするから。がきんちよのくせして」

僕は答えなかつた。煙を深く吸い、夜空に向かつて吐き出した。

「ほーら、また迷つてる」

「なにがだよ。何も言つてないだろ」

「そのくらいなーんにも聞かなくたつてあたしにはわかんの。言つとくけど、迷つたまんまじやどつちも取り逃がすよ？」

「迷つてねーよ。心は決まつてる」

「あつそ。ならいいけど」

そう言つと手をはらはら振り、朝子は部屋の中に戻つた。僕はフイルターのぎりぎりまで煙草を吸い、ぐずぐずとベランダに残つて、とりとめのない考えを夜空に描いていた。部屋に戻つたときには、時計は一時半を回つていた。

一日目、眠い目をこすりながら支度を整え、僕らは都心まで電車を乗り継いだ。夏休みというだけあって、街は歳若い人間で溢れかえつている。僕と夕美ではやはり釣り合わないのでというネガティブな自意識からか、時々振り返る通行人の目が、なんだか痛々しく思えてならない。

街と同様に、水族館も混み合つていた。夕美はマンボウの泳ぐ水槽に顔を近づけ、感嘆の息を漏らした。僕はクラゲだ。互いにゆつたりとした動きの生き物に心惹かれるらしいことがわかり、なんかそのことが笑えて仕方がなかつた。僕らは始めから終わりまで手をつなぎ、水族館を出たあとはモス・バーガーで昼食をとつた。午後すぎにはカラオケ・ボックスに入った。それは必然的に前回の件

に触れてしまうことになつたけれど、僕らは自分たちでも不思議なくらい、そのことについて、きこちなくなつたりはしなかつた。

帰りがけに、人目から離れる隙をうかがつてはキスをした。昨晩失われた僕の心は、再び熱く鼓動を打ち始めていた。夕美に対する恋慕の情が、入れ物からこぼれ落ちそつたほどに湧き出している。

「好き」

そう言つたあと、彼女の照れ笑いが、僕の胸にぐつとなにか愛しいものを惹き付けた。とてもシンプルに、僕は夕美に恋していた。

夕方、僕らは近所のスーパーで食材を買い求め、せせこましい台所に肩を並べて料理を作つた。まるで同棲を始めたみたいな気分だつた。彼女もそう思つていたと思う。ニンジンの皮を剥きながら、僕らは様々な話をした。家族のように異性と接するなんてことは、朝子以外に体験したことのない出来事だつた。

「じゃあもし生まれ変わつたら、先輩はなになるの？」
「もし選べるとしたら？」
「うん」
「ええつと……うーん……」
「はい、時間切れ。次は夕美の聞いてくれる？」
「なに？」
「先輩の奥さん。子供は一人で、男の子と女の子がいいな」
「……なんかずるくない？」
「ええ、どうして？」
「まあいいけど。子供の名前はなんてつけるの？」
「それはまだ考え中。でも一人の名前から一文字ずつとりたいなつて」

料理を始めてから一時間半ほども経つと、カレーの香ばしい匂いが部屋を漂つた。いつぞやのお詫びにと、夕美は朝子にカレーのおそらく分けを提案したが、姉は不在だった。奴のことだから、最近始めたとかいう出会い系サイトのサクラのバイトにでもいそしんでいるのだろう。諦めて部屋に戻り、僕らは山盛りに持ったカレーライスを頬張つた。

「おいしい」

「うん。間違いなくうまい」

「あ、マヨネーズある?」

「あるけど……まさかカレーにかけるの?」

「ダメ?」

潤んだ瞳でそんな風に訊かれて、ダメと言える人間はまずいない。

「いいけど、ガチでうまいの?」

「うん。夕美んちではそれが普通。先輩もかける?」

やめといた。せっかくの努力が水の泡になつては大変である。

夕食を終えてからは、帰りがけに借りたDVDを見て過ごした。しかし疲れてしまつたのか、夕美は映画の途中からうつうつとし始めた。

「もう寝る?」

「……ううん。お風呂入らなきゃ」

「明日の朝入りなよ」

「うん。じゃあそろそろ」

僕は彼女をベッドに寝かせ、部屋の電気を消してひとりで映画の続きを見た。でもどういうわけだろ、内容はとても面白いはずなのに、隣にタ美がいないというだけで、そわそわと落ち着かない気持ちになり、僕は結局テレビを消してしまった。それからシャワーを浴び、僕も彼女の隣で横になった。体はしっかりと疲れていたのだろう、僕もすぐに眠ってしまった。

……夜道を歩いていた。自分がどこに向かっているのか思い出せずにいた。しかしそれでも足は動いている。僕の知っている、そして知らないどこかへ向かつてたしかに歩いている。どこへ？森のひんやりとした空気が、裾をくぐつて足元を撫でつける。

踏みごたえのない柔らかい土の上で、僕は懸命に坂を登っている。谷崎潤一郎の小説にこんな話があったな、と僕は思う。そしてゆつくりと、まるで現像される写真の中には人の顔の印象が少しづつ浮かび上がつてくるみたいに、僕は僕を待っている人間が誰であるかを悟つた。

ヒナ！

僕は肝をつぶして叫んだ。でも実際にはほんの小さな声でしかない。なにから追われるよう、僕は山を登つた。ひどくひどく疲れている。でも草木のあいだに神社が見えると、とたんに体の中が活氣付いた。

あと少しだ！ もう少し！

鬼気迫る笑みを浮かべながら、僕は斜面を這い上がるように社のそばに飛び出した。まさかないんじや……そんな不安に怯えながら社の正面に向かつて走り、胸が割れそうなほど恐怖に息が乱れた。

いた！

ヒナは賽銭箱の前に、いつものようにうずくまっていた。僕は安堵し、駆け寄つて彼女の体を抱きしめた。疑い深い僕は、それでも別人なんじゃ……という気になつたが、彼女が顔を上げて本人だとわかると、思わずうれし涙がこぼれた。

「ああ、よかつた……よかつた。ごめんね、ひとりぼっちにさせてよく見ると、彼女は一糸纏わぬ姿だつた。

「中に入ろつ。それじゃ寒いよ

そのときハツとして僕は周囲を見渡した。誰かが見ているような気がしたからだ。そして振り返ると、ヒナの姿はそこから消えていた。僕は絶望した。

ああ、そんなまさか！ そんな！ 嘘だ！

…………目を開けたときも、その絶望はまだ心に残つていた。朝の光がまぶしく、僕はまぶたを手で覆つた。気持ちのいいシャワーの音が聞こえる。隣にはしわの残つたベッドシーツと、へこんだ枕がわりのクッション。僕はゆっくりとベッドを抜け出てシャワールームの方に歩み寄つた。

「おはよっ」

蛇口を閉めるキュッという音がして扉が少しだけ開き、そこから濡れた髪の夕美が首を出した。すりガラスに映る肌色を見ないよう僕は努めた。

「おはよ。まだ寝ててよかつたの？」

「「ゴーヒー入れるよ」

「すぐ出るからちゅうと待つでね」

夢の意味なんて、考え始めたらキリがない。僕は湯を沸かし、力ップを一杯並べて一方に半分ミルクを注いだ。そこまでの準備を整えると歯を磨き、沸騰する直前で火を止めた。それとほとんど時を同じくして夕美が風呂から上がり、体と髪にタオルを巻いてソファに腰を下ろした。

「一人してけつひとつ寝ちゃったね。今日はどうする？」

「どうしようか

僕はそう言いながら、彼女の濡れた体を後ろから覆い、石鹼の優しい匂いをかいだ。夕美はくすくす笑いながら、僕の手に手を重ねた。

「夕美の裸、見たいな」

「いいよ」

僕の希望に夕美はあっさりそう答え、するするとバスタオルを脱いで立ち上がった。彼女の体は小さかったけれど、決して均整が取れていないわけではない。小さな顎に合わせて小さな口が出来上がり、小さな両肩に合わせて小さな乳房が出来上がっている。じつと見られていることにさすがに恥ずかしさを感じたのか、夕美は僕の体に文字どおり抱きついた。

「恥ずかしくなつてきちゃつた」

僕は彼女の背中と小さなお尻に手をやり、そのままベッドに運ん

だ。部屋の中はさんさんと明るい。唇を重ね合わせ、乳首に触れ、大ももの奥に手を伸ばした。もはや体のどこに触れても、彼女は小さく喘いだ。

「……ねえ、『コーヒーは？』

「後にしよう」

でも初めてのセックスは簡単なものじゃなかつた。その手のことには激しいものだつた。夕美は歯を食いしばり、片方の目からは涙がこぼれた。僕は興奮していたのか、自分を見失いかけ、途中からなにをしているのか自分でもよくわからなくなつていた。だから初めてのセックスは、正直なところなんだかよくわからないうちに終わつてしまつたといつ印象が強い。

シーツには血が染みていた。僕らは行為が終わると体を重ね合わせたまま、言葉も交わさずにじつと互いの体を抱いていた。

「……嬉しい」

「え？」

「先輩の初めて、夕美が奪つちやつた」

「逆だよ、普通」

僕らは笑つた。それからペニスを抜き、ティッシュで拭き取つた。

「『めん。中に出しちゃつて。次はちゃんと『ママしよう』

「ううん。先輩の赤ちゃんなら出来てもいい」

「ひら」

「冗談。シーツ汚れちゃつたね」

「いいよ。新しいのあるから」

下着を履いてベッドから下り、僕はもういちど湯を沸かした。それから熱いコーヒーを入れ、二人でカウチに並んでそれを飲んだ。クーラーのスイッチを入れ、火照った体を冷やす。夕美は僕のぶかぶかのTシャツを着て、下はショーツ一枚という格好。

「帰りたくないなあ。もつとずっと一緒にいたいのに」

「30日ならバイトは休みだよ」

「じゃあまたママに嘘つかなくちゃ」

僕らはそろって笑い、そのあとでなにかのしるしのようごキスをする。まだそのときは知らないが、僕らはその夏、計23回セックスをすることになる。

「言つとくけど、ハンパじゃねえから

といつジヨースケの忠告どおり、夏休みの駐車場は大忙しだった。車は朝の六時からひつきりなしにやって来て、ようやくひと段落ついたと思うと、今度は帰りの人で大賑わい。もはや駐車場そのものがテーマパークといった体だ。このかきいれどきに駐車場は常時二人を配備し、ヨシくんも石田さんもフル回転である。

「参つちやうなあ。メシ食つ暇もないんじゃ

窓口に並ぶ客を前に、石田さんはぼそつとそんなことを漏らす。その点、ヨシくんは意外にもこの行列を淡々とこなす。疲れた、とも、だるい、とも言わない。ひたすら駐車券を発行し、発行し、発行する。時間ができると煙草に火を点け、客が来るとまた駐車券を

発行する。

「あー疲れた」

とさすがの僕もそんなぼやきを漏らすのだが、ヨシくんはなんとも答えない。表情という表情もない。強いて言えば、いや強いて言つて、いつもどおりなのである。

「そういえば昨日さ、妹が来たよ」

「あ、見たかつたつす」

「うん。それで南の友だちも來たよ」

「え、誰だろ?」

「佐野とか佐川とか言つたかな。うちの妹と出かけていったみたい」

アキタ力だ。間違いない。

「ちょっと待つた。えつと……大分混乱してるんですけど、ヨシくんの妹さんてどこの学校に通つてます?」

「カワ高だよ」

「それ、おれの通つてる高校なんすけど」

「え、マジ?」

「リアルにマジです。でもヨシくんの名前は海岸だし、そんな上級生いたかな……」

「うちの妹は名字ちがうよ。母方の姓を名乗つてるから」

「それでなんていう名字なんすか?」

「クサカベ。日下部京子」

……あいつ、とうとうやけりやがつた。

バイトが終わるなり、すぐさまアキタ力に電話を掛けた。夏休み

が始まつても一向に連絡がないのでおかしいとは思つていたが、おそらく奴は着々と田下部京子攻略の準備を進めていたに違いない。

電話が繋がると、まず周囲の雑音が耳についた。辺りが賑わつているのが田にしないでもよくわかる。

「おここらボケカス」
「いきなりなんだよ。チンカス」
「聞いたぞ。おまえが昨日誰といたのか」
「はて。なんのことやら」
「うそふくなれ。田下部先輩と出かけてつたらしごじやんか」
「つーか今も一緒にいるけどね」

思わず言葉を失つた。一泊旅行？

「……で、どこにこんの？」
「ネズミがいる夢の国」
「亀山ダム？」
「阿呆。TD-じや」
「えーと、トワイライト……『エンジヤラス……』」
「無理すんな。ともかくおれは夏休みをエンジョイしてゐるから、く
れぐれも邪魔せんでくれ」

その背後から「誰なの？」といつ田下部先輩の声が聞こえ、アキタカは「童貞ボーイ」という説明を付与した。だがそれはもはや間違つてゐる。といつて説明する気もないが。

「ま、頑張つて一億回田指せよ。そんじやな」

としまこにはおやなりな文句で電話が切れてしまつ。なんだかう、

いの説明しがたい悔しきのみなものだ。

第四章もこれで終わりです。

なんだか思ったより長くなつてしましました……。
それでも少しずつ完結に近づいている気がします。

つてそんなの当たり前か（汗）

夏の風物詩の中に必ず上がるものと言えば そう、花火だ。もちろん中には人ごみが嫌だとか、ろくに見物もできないしという声もあるだろう。しかし恋愛ゲームもとい三次元でも、隣に彼女がいれば話は別である。

……はずなのだが、どういうわけか、僕はアキタカと肩を並べて昨晩の雨に濡れた路面を、花火会場に向かい歩いていた。道を進むにしたがつて浴衣やじんべいを着た人たちがそこかしこに姿を見せる。そして駅前に出た途端、それまで抑えつけられていた人声、笛や太鼓の音が、巨大なひとまとまりの旋律となつて、わっと広がった。

「すげええ」

そう感嘆の声をもらしながら、アキタカは首を伸ばして辺りを見回す。視線は胸にさらしを巻いた女の子たちの前でぴたりと止まり、その目はひとりひとりをじっくりと見分した。

「真ん中の子がいちばんかわいいな。化粧けがなくていい
「指差すなつて。恥ずかしいから」

まさにそのとき、視線に気づいたひとりの女の子がこちらを向いてそっと微笑んだ。アキタカは小さく手を挙げてそれに答えた。

「知ってる子なの？」

「いや、知らないよ。だから要するにおれがもてるといつことだ
「自意識過剰なことこの上ないな。相変わらず」

「負け惜しみはやめたまえ」

アキタカはそう言つてわざわざこちらを向き、両眉を得意気に上げる。それにしてもなんと腹の立つ顔だろうか。

そもそもなぜこんな奴と花火大会に行くことになつてしまつたのか　その理由を説明するためには、一週間ほど過去に遡らなければならぬ。

元々、僕と夕美は花火大会に行くつもりはなかつた。というのも、夕美は近ごろの外泊つづきで母親から疑惑の目を向けられていたし、花火大会には大勢の人が来るわけだから、もし二人の姿を親類に見られてしまうと、ややこしいことにもなりかねない。そんなわけで、当分のあいだは僕の部屋か、あまり人目につかないところで逢おうということになつていた。でも要するに逢うのが夜でなければかまわなかつたのだから、花火大会に行けないことくらいは瑣末な問題でしかなかつた。

そこにアキタカからの、この真意のわからない誘いがあつたわけだ。僕が電話を取るなり、奴は開口一番こう言つた。

「おい、花火大会行こつぜ」
「は？」

僕は思わずそう言つた。もしこのとき以上に「は？」という言葉の適当な使い道があるのなら、ぜひ教えていただきたい。

「だから花火大会に行こつぜって」
「誰ど？　おまえど？」

僕は一度びっくりしてそう訊いた。

「そうだよ。なんか文句あるか？」

「ありすぎて一口には言えん。ていうかなんでおれなんだよ。自分なんか、よっぽど誘う相手いるじゃんか」

「まあまあいいじゃないの。たまには水入らずで

「気持ち悪いな……どうした？」

「とりあえず行くのかよ。行かないのかよ」

「いや、別に行つてもいいけどさ……」

「じゃあ決まりね。当日電話するわ」

「あ、ちょつ

そしてまた唐突に電話を切る。これがその理由なのだが、考えてみると理由でもなんでもない。まあいいかと納得してしまった僕も僕なのだが、とにかく勝手な奴である。

男一人で花火見物なんていかにも気が滅入りそうなものだが、アキタ力は奇妙なほど上機嫌だつた。なにか興味をそそられるものを見つけては、隣から肘で小突いて「あれ、ちょっと見に行こうぜ」なんて言つてくる。人の気分などおかまいなしというところだ。

駅から花火会場までの広い一本道には、ずらりと夜店が並んでいる。綿あめ、水風船、金魚すくいはもちろんのこと、クジ引き、射的、型抜き、たこ焼き……数え上げたらキリがないが、どれも法外な値段である。しかしあ人の心理とは不思議なもので、祭りとなると財布の紐も緩みがちである。かくいう僕も頭の横にカーネル・サンダースのお面を付け、左手にたこ焼きを持つてゐるわけで。

最初の花火が上がるのは七時ちょうどだ。花火の上がる地点から最短距離となる対岸の岸辺では、熾烈な場所取り合戦が繰り広げら

れる。ある者は前夜からシートを広げ、今日を通して一晩飲み続けることになる。もちろんそんな絶好の場所を僕らが取れるはずもない。よつて狙いは必然的にもうひとつのスポットに当たられる。

「ちらはテトラポットに囲まれた湾沿いで、半月に一度くらいコンテナ船が寄港する外は閑散としている。花火の打ち上げられる地点からはいたさか距離があるが、視界を遮るものがなにもないので、辺りが静かなので、カップルにも人気を博している。花火通の味わいとでも言つべきものがそこにはあるのだろう。

僕らは焼きそばやかき氷を買い込み、一路その地点へと足を向けた。でもまだ僕としてはなんとなくしつくりこない。というのはアキタカが花火に対してそれほど思い入れがあるとはどうしても思えなかつたからだ。

「あのまあ、ひとつ訊いていい？」

辺りからじょじょにひとけがなくなり、静かになつたところで僕はそう切り出した。

「なに？」

「花火がよく見えるのはいいんだけど、ビーチでそんなにこだわるわけ？ そんなに花火好きだつたつけ」

「いや、別に好きじゃないよ。嫌いでもないけど」

「じゃあなんで？」

そこでアキタカは、にわかには信じられない言葉を発した。

「そりゃおまえ、恵子先生が来るからだよ」

「……は？」

「言つてなかつたつけ。今日恵子先生が来るんだよ」

しれつとした顔で、アキタカはそう言つた。僕は思わず足を止めた。容器から氷菓子の一角が零れ落ちた。

「え、マジ?」

「マジだよ」

「嘘」

「嘘じやねーつて」

「マジ? 本当? どうやつて誘つたの?」

僕が思わず興奮して続けざまにそう尋ねると、アキタカはいつも
の憎らしい笑みを浮かべた。

「それを訊くか? なら答えてやる。先生は彼氏と別れたんだよ」

僕は言葉を失つた。

ユニークアクセス10000突破！

PVアクセス40000突破！

本当に本当に本当にありがとうございます！

「……ま、おれは彼氏がいることも知らなかつたわけだが。ともかく別れたんだつたら問題はない」

頭の中を整理するのにえらい時間がかかつた。なんでなんで、どうしてだ? これ以上ないほどに幸せなカッブルだと思つてたのに。恵子先生は誰か別の人を好きになつてしまつたのだろうか。それとも東野先生の浮氣? あんな素敵なお人さんがいるのに、そんなまさか。妄想がひとりでにふくらみ、もはや収集のつかなくなるといふで、僕は現実に立ち返つた。ちょうど風船を空に放すみたいに。

「いやいや問題はあるだろ。教師と生徒なんだし」「それは学校での話。今はプライベート。おまえ恵子先生が歳いくつか知つてんのか? まだ24だぜ? 女の華ざかりよ。ひと夏の情事くらゐ欲しいもんだろ」

毎度のことながら理解しがたい思考回路をためらいもなく発揮するアキタカではあるが、僕の凡庸な脳みそはそこに待つたをかけるべく、あわてて動き出した。

「ちょっと待つた。おまえ田下部先輩はいいのかよ?」「ああ、京子はまた別の話だな。あつちはあつち、いっちはいっち

僕は唖然としながら、急いで頭の中を整理し、言葉を組み立てた。「ひとつ言わせてくれ。おれは今誰よりおまえが恐ろしい ついで、恵子先生は他の女みたいにほいほいついては来ないと思つぞ

アキタカは不敵な笑みを浮かべ、人差し指を振る。

「ちつちつ……甘いねえ。だつたら彼氏と別れたことをわざわざおれに報告する必要はない」

僕の想像はアキタカが誘導する地点に向かおうとしていた。それをなんとしても食い止めるべく、僕は踏みとどまりた。

「じゃあなにか？ 恵子先生はおまえが来るのを今待ってるのか？」
「そのとおり」
「誘つたのか？ 誘われたのか？」
「無論誘われたわけだが」
「ちょっと待て。じゃあなぜおれがいる？」

そこで初めて考えるような間が置かれる。アキタカはこやりと片方の口を上げた。

「やはりそこにたどり着いたか。工藤新一くん
「バー口一。……つてふざけてる場合じゃなくて、なぜおれを誘つた？」

アキタカは僕の背に手を回し、肩を叩いた。僕らはふたたび歩き始めた。狡猾な笑みが奴の口元に浮かぶ。ひそひそとした話し声で奴は続けた。

「そこで、おまえに協力を求めたいというわけだ……恵子先生はなぜか南を高く買つてゐるからな」
「つまり引き立て役になれつてことかよ」
「いや、そういうわけじゃないな。なんつーか、おれの疑惑を払拭

してほしい

「だつて……その疑惑つてほぼ事実じゃん」

「うつせ。ともかくおれのイメージアップをおまえに頼みたいのだ」

「……嫌だと言つたら?」

アキタカはそこで僕の体からすっと手を離した。

「別に嫌ならいいさ。強要はしない」

これはなにかあると見た僕は、さらに突っ込んだ質問をした。

「それはつまり、協力すれば見返りがあるってことなのか?」

「フフフ、とアキタカはまるでべたな悪役を思わせる笑い声を上げる。

「少しば知恵をつけたようだな、少年よ。つまりはもしかすると、君も童貞を捨てられるかもしかんのだよ」

僕は言葉に詰まつた。が、あまり喋らないでいると勘づかれかねないので、急いで言葉を探した。

「じゃあ恵子先生は今ひとりじゃないってことか。そういうことだろ?」「う?」「ご明察。他に女子生徒が一人いるはずだ」

「向こうは三人?」「たぶんね」

頭の隅でなにかが引っかかつた。でもそれが意味する本当のところまで、僕はそのときたどり着くことができなかつた。

「……ふーん。まあ別に協力してやらなーいこともないけど、なんかおかしくない?」

「なにが」

「いや、恵子先生がおまえを誘つとはやつぱりひつても思えなくて」「

アキタカはそれまでの笑いを引つ込んで、今度は無表情で歩き続けた。なにか頭の中で考へている風もある。それから諦めたようにフウツとため息をついて、口を開いた。

「今日はめずらしく冴えてるな。それだけは認めてやる。花火に誘われたことは誘われたが、誘つたのは恵子先生じゃない」「ほひ、やつぱり」

「……が、恵子先生もおれが来る」とは知つていて。ま、同じことだな

「え、同じじやないでしょ。それじゃあ辻褄合わないじゃん」

僕は回転し始めた頭を使って鋭く突つ込みを入れた。

「おまえは恵子先生が彼氏と別れたことをわざわざ自分に報告したって言つてたんだぜ。要するにその事実だつて、その誘われた女子生徒から聞いたんだる」

「うう……まあ、そうなるな。しかしチャンスに変わりはない。おまえは金田一かよ」

それを聞いて、僕はようやくほほつとすることことができた。協力するという条件はいちおう飲んだことにしてもおこり。けれど奴がまた品のない行動に出ようとしたときは全力を持って止めようと思つ。じつちゃんの名にかけて。

幅のある一本道が、入り江に向かつて長く延びていた。照明がひとつもないせいで、道は死に絶えたように暗かつたが、目をこらすと闇の中にいくつかの車両と動く人影が見えた。風に乗つて聞こえてくる声は闇をくぐり抜け、耳元で蠱惑的に響いた。先ほど歩き過ぎた賑わう通りの明かりが、あたかも静止した巨大客船のように、海上にぽつかりと浮かび上がっている。

「どこで待ちあせてるの？」

そう尋ねると、アキタカは腕を伸ばして道の先を指差した。桟橋に灯る白い明かりのそばで、長い髪が揺れるのがさつと見えた。さらによく五メートルばかり歩いたところで、誰かが立ち上がって手を振つていることに気づいた。

「あれって……池西加奈子？」

僕はぎょっとしながら、続いてアキタカの顔を見た。

「仕方ねーだろ」「……別にまだなにも言つてないぞ」「恵子先生とお近づきになれるんだ。多少の犠牲は止むをえん」「もうひとりは誰？」
「さあな。加奈子の友だちとかじやないか？」

会場のアナウンスが風に乗つて届き、途切れ途切れに耳をかすめていった。そろそろ時間だ。池西加奈子はこちらに走り寄ると、真っ先にアキタカの腕を取つた。が、あっさりと払いのけられる。

「やめろ」

なんとまあ底冷えした声だろ？

「どうしてえ？ いいじゃん」

「明日してやる。だから今日はやめろ」

加奈子はむずがるような顔をして、それから隣に立つ僕の存在に気づいた。

「あれ、どなた様？」

「おまえ知らなかつたつけ。南だよ。友だち」

「えつ、南先輩つて……」

声を失つたように、加奈子はそのあとの言葉をつぐんだ。体がぴくっと震え、眉間に困惑するようなしわが浮かんだ。

「なんか問題あんのかよ」

「別にないけど……ただ……」

「ないなら行こうぜ」

アキタカはいつもの強引さで、ひとりスマスマと歩いて行く。取り残された僕があわてて歩き出すと、意味ありげに加奈子が僕を呼び止めた。

「……あの、ちょっと」

池西加奈子と直接言葉を交わすのは、それが初めてだったと思つ。何度かアキタカに接する態度を見ている分、そのしおりしさは意外だった。

「え、なに？」

「なんていうか、すみません」

「え……な、なにが？」

加奈子は迷うように沈黙を置いた。それからぼそっとした声でつぶやいた。

「きつとすぐ、わかりますよ」

それだけ言い残すと、加奈子はアキタカの元へと走つていった。

坂になつた芝生の暗がりに、恵子先生はすらりとした脚を伸ばして寝転んでいた。もうひとりは三角座りをしながら、上空を見上げているようだ。アキタカがすべりこむように恵子先生の隣に座ると、加奈子がさらにその隣に腰を下ろす。僕は四人の背後に立つて、いつたいどこに座つたらいいものかと腕組みした。

そのとき、恵子先生がぱつとこちらを向いて、にっこり笑みを浮かべた。大人っぽい紺の浴衣に身を包んだ先生の姿は、いつもより素朴な美しさをかもし出している。うちわを持った手が、小さくゆつくり上下している。

「あら、じんばんは。やつぱりあなたが来たのね」

「じんばんは、先生」

「なーに？ もしかして氣使つてゐるの？ ビーでもこいから座つたら。いまちょうど花火が始まるとこりだから」

加奈子は振り返つてじつと僕の目を見据えると、人差し指を横にまつすぐ向けた。少し離れた芝生の上に、もうひとりの女の子の姿

が見える。

「先輩、あっち空いてます」

「いや、知ってるけど……」

眼力といつもは本当にあるらしい。といつも僕の足は勝手にそっちの方に歩き出したからだ。

柔らかな芝生の上を歩くとき、夏草の青くさい匂いが胸をなつかしくさせた。僕は意味ありげにならないよう、隣の女の子と少しだけ距離を取つてそこに座つた。近寄つて見ると女の子が髪を茶色く染めていて、花柄模様の黄色い浴衣を着ていることがわかる。浴衣の上からでも、体の線の細さがわかつた。

彼女は、これから打ち上げられる花火に全集中をかたむけているのか、隣に座つた僕のことなど一切気にかけていないらしい。しかしあとで驚かれて変質者あつかいされても困るから、僕は思い切つて自分から声をかけた。

「こんばんは。南といいます」

それから数秒の沈黙が訪れた。彼女はもぎ離すように海上から視線を落とすと、僕とまっすぐ見つめ合つた。薄闇の中で、まるでパズルをはじめこんでいくように相手の輪郭が浮かび上がつてくる。僕は頭で理解するよりも先に、なにかを口にしかけていた。

そう、なにかをだ。言葉の意味を理解したのは、ずいぶんあとどのよつな気がする。

「ヒナ?」

でもそれは声にはならず、衝動的な反応として、またためらいの息として外に吐き出された。無意識のあと、ふわっとした感触が胸元を通りすぎた。鼻先をシャンプーの香りがかすめ、柔らかな人のぬくもりが身に覆いかぶさつた。

「……ずっと、逢いたかった」

ヒナは僕に向かって両手を伸ばし、しがみつくように胸の中におさまった。まさにそのとき、一発目の花火が打ちあがつた。

< ; 夏の夜のあやまち > ; 第一十九話 (前書き)

更新に一月がかつてしましました。待っていた方、本当にすみません。

ん。

腹に響くドン、という音のあと、鬨のような歓声が上がった。間髪入れずに、次から次へと花火が上がり、僕らは光の中に投げ出された。

……ドン、パラパラパラパラ……ドン、ドン、パラパラ……ドン、ドン、パラパラパラ……

恵子先生は少女のように嬉々とした笑みを浮かべ、隣の一人に向かい海上を指差してなにかを叫んでいた。加奈子はアキタカの腰に腕を回し、そのアキタカはと言えば、恵子先生にぐっと身を寄せている。僕らだけが夏の宵から取り残され、かたい沈黙の中にいた。顔半分に影を負ったヒナの表情は、哀しみともあきらめともとれる、無機的な表情に見えた。

こんなとき、なにを言えばいい？ 心臓は激しく鼓動し、胃にキリでえぐられるような痛みを感じた。

「……どうよ。重いから

結局僕の口から出たのは、心ないその一声だった。僕はヒナの両肩をつかんで自分の体から引き離し、ため息をついた。正面から見つめ合いつと、彼女らしからぬ弱さみたいなものが、目に浮かんでいた。

「久しぶり。……でも、もうそういう関係じゃないから
「……ごめん」

今にも消え入りそうな、震える声でヒナは言つた。

「おれが来る」と、知つてたの？」

彼女は迷うように視線を逸らした。花火が打ちあがるたび、そのクールに整つた顔が、光の加減で彫刻のように闇に浮き上がる。その芸術的な一瞬のいくつかは、ハツと息を呑むほどに白く美しかつた。少しだけ、さらに僕は責めるように問いただした。

「ねえ、答えてよ。どっちなの？」

「……君が来るかもしないって、いうのは聞いた……でも、本当に来ると思つてなかつたから……」

「ええ、なに？」

耳が遠くなつたふりをしながら、僕はそう怒鳴つた。自分でも、どうしてヒナにこれほどつらくなつたのかよくわからなかつた。心臓の音が、うるさいくらい耳に響いた。

「……少しでも話したくて……謝りたかつたから……」

「花火の音で聞こえないよ、全然」

僕はただ、ヒナを困らせたかつただけなのかもしない。仕返しみたいな氣でいたのかもしない。相手のこれまでの気持ちを、考えようともせずに。

ヒナの頬を涙が筋となつて流れ、彼女はそれを隠すよつともつと顔を逸らした。

「「」」うち見ろよ」

なにかに急き立てられるよつて、僕は強い口調で続けた。

「謝りたいんだろ？ ちゃんといつち見て謝れよ」

「……『めんなさい』」

「だからいつち見ろつて！」

僕はヒナの腕をつかみ、ひねり上げるよつて力ずくで引き寄せた。彼女は小さな悲鳴を上げたが、抵抗はしなかった。僕はさらに、彼女の顎を手でつかみ、無理やり正面を向かせた。

「『めん、なさい』……」

数秒間、目と目を合わせ、それからパツッと手を離した。ヒナは力尽きるよつて、その場にうなだれた。

「『めんなさい』……『めんなさい』……」

そのとき初めて、心臓を打ち抜かれるような罪悪感が胸につのつた。次に自分へのはつきりとした軽蔑を覚えた。こんな絶対にしちゃいけないということを、たつた今僕はしたのだ。

「『めん……』

僕のその声は届かなかつたと思う。もうそんな小さな声を耳に入れるには、ヒナはあまりにも涙を流すことにすべてを捧げていたからだ。僕はあわてて彼女を助け起こした。でもどうやっても彼女は首を振るだけだった。

僕はそつと辺りを見回してみた。三人はまだ花火に見とれていって、こちらに気づく様子もない。そのうち徐々に、この場を立ち去りた

いという思いが強くなってきた。いつたい僕はなにをやっているんだ？ そつ考えたとき、思わず気味の悪い笑みが口元に浮かんだ。それは図らざるもの、ほんの少しだけ気を樂にさせてくれた。

「夏休みだから、髪染めたんだね」

僕の言葉にヒナはかすかにうなずいた。少しずつではあるが、自制心を取り戻しつつあるみたいだつた。

「……」「めんなさい」

「もういいよ。おれの方こそ……ほら、ちやんと座つて」

ヒナの腕を今度は優しくつかみ、助け起こした。

「大丈夫？」
「……少し、散歩してくる」
「おれも行くよ」

てつきり断られると思ったけど、ヒナがなにも言わずに立ち上がって歩き出したので、僕もそのあとをついていった。後ろを振り向いたそのとき、加奈子がじつとこちらに視線を注いでいるのが見えた。

それからはずいぶん歩いたような気がする。

沿岸には松の木がどこまでも並び、僕らは同じような風景の中を無言のままひたすらに歩んでいった。その異様な雰囲気を見取ったのか、木陰に腰掛けたカップルは僕らの姿を不思議そうに目で追つた。なにか話しかけなくちゃ、とそう思いながら、ずんずん

と進んでいくヒナの後姿が僕を突き放すようで、どうにも声が掛けられなかつた。十五分ばかり歩いたところで、もう一方の桟橋がすぐ鼻の先まで近づいてきた。

「あそこで休もうよ

僕がそう言つと、ヒナは少しだけ歩みを遅らせて、一ぐりと頷いた。

桟橋には小屋があり、屋根は古ぼけた緑色の灯火に照らされていた。そばに一隻のボートがつないであり、小屋はあたかも水面に浮かんでいるかのように見える。花火の明かりもここでは弱まり、かすかに桟橋を白く照らすことでの、その存在をかろうじて保つている。

桟橋を渡る一三歩手前で、ヒナは唐突に立ち止まつた。それから僕の顔を振り返り、言葉を紡ごうと努力した。でもなにを言いたいのか、まだうまく考えがまとまつていないうでもあつた。

「どうしたの？」

「……なんでもない

彼女は首を振り、ふたたび歩き出したが、まだどこかしら迷いがあるようにも見えた。それは必然的に、僕に彼女の心境をあれこれと想像させる一因にもなつたわけだが、夕美の顔をふと思いつ出すことで、それらの雑念はあっさりと消し飛んでしまつた。

そう、なんといっても僕には夕美がいるのだ。今そばにいる少女はかつて恋した相手であり、過去でしかない そう考へることで、気持ちは楽になつた。

「あの先っぽに座りつよ。おれも少し話したいしや」

僕はそう言つて桟橋の先端部分に腰掛けた。ボートの揺れるゆらやぶぢやぶといつ音が耳をくすぐるようにな絶え間なく鳴つている。それから夕美がおずおずと僕の隣に腰掛けた。足をぶらぶらせると、つま先が水面を小さく切り裂いた。

しんとした空気が辺りを覆つていた。まるで闇全体が僕らの言葉を待つてゐるみたいに。

「あの電話……覚えてる?」

夕美は少しだけ僕の方に顔を向けた。

「……電話?
あの日の夜に掛けてきた電話」

その言葉で思い当たつたようだ。ヒナは静かにうつむいた。

「「めんなさこ」

「俺の方こそさつこと言つて「めん。それとさつとも……」「めん。あんなこと言つつもり、本当はなかつたんだけど……」

「……いい。悪いのは私だから」

しばらくのあいだ沈黙が下りた。僕は両手を後ろにつき、時おり閃光の走る夜空を仰ぎ見た。

「「ど」「ど」間違つちゃつたんだりつね……たぶんおれがいけないんだつてのはわかつてたよ。なのに心の中でヒナのせいにばかりしてた。そういう自分が嫌だつて思いながら、そう思いながらも、逃

「……好きだったから、悔しかったから……」

話しながら、胸が高鳴り始めた。それがどういう類の高鳴りなのか察したのは、もう少しあとになつてからだった。

わざかな沈黙を置いて、ヒナも語り始めた。慎重にひとつひとつの言葉をまとめながら、彼女らしい静かな聲音で。

「私も君のことが好きだったから。嫌われたくなかったから。君の求めることが、全部してあげたいと思った。お兄ちゃんが反対しても関係ない。私は私だから。君のこと好きだから」

わけもなく息が上がり始めていた。求めを欲するように、僕の唇は震えた。どうしてだろう、僕の彼女は夕美なのに。

「ずっと、君と話したかった。毎晩毎晩、君のことをずっと考えた。こんなに苦しい気持ちになるの、初めてだったから。大切にしたいと思つたから」

ぼろぼろと言葉は崩れていき、彼女の顔も涙によつて切なげに歪んでいた。その姿は、僕の心の奥深いところで眠つていたなにかを呼び起こした。震える手で彼女の体に腕を回し、そつと、しかし力強く抱きしめた。シャンプーのふわっとした香りがふたたび鼻先をかすめていった。

「ダメだよ……君の彼女は夕美なんだから……君の好きな人、夕美なんだから……」

「いいんだ。おれが好きなのは……」

「……好きなのは、誰?」

パツと顔を離し、目を見開きながらヒナは僕を見た。そのとき、僕にはもうヒナしか見えなかつた。どうして今まで気づかなかつたんだろうと、そう思った。僕が本当に好きだったのは白石雛子なんだ、と。

「……おれは君のことが、ヒナが好きなんだ」

その次の瞬間、柔らかいものが僕の唇に触れた。そしてそろそろと、まるで様子をつかがうみたいに、ヒナの舌が口の中に入り込んできた。僕は彼女の体から少しだけ離れてうつむいた。

「ダメだ……おれ、どうしようもない奴だ……」

「どうして？」

「言えなかつた。言いたくなかった。でもこれだけは言わなきゃいけない。

「おれ、夕美とセックスしたんだよ」

僕の瞳は怯えていたと思う。あるいは悲しんでいたかもしれない。それでも僕は顔を上げて、ヒナの目を見つめた。

「だからもう、こいつことしちゃいけない。もうヒナが想つてゐよつな人間じゃないから」

その言葉にヒナはうつむき、瞳からは光が失われた。でも僕の予想とはまるで違つことを、彼女は口にした。

「……私は、それでもいい」

「えつ？」

「君の初めての相手が夕美でもかまわない。そんなこと、どうだつていい。南くんが私のことを好きだつて言つてくれるなら、それだけいい……もう迷わないって、そう決めたから」

その一瞬、気づくと僕らは静寂の中に取り残されていた。そこでは花火の音も、沿岸の騒ぎ声も、すべてがどこかへと遠のいていく。相手の顔が、死者のように現実味なく闇の中に浮かび上がる。運命といつ一言では足りないなにかが、そこにはたしかにあった。

「……初めて呼んでくれたね、名前」

ヒナは立ち上がり、僕の手を取った。

「来て」

「……ビル？」

ヒナは後ろを少しだけ振り返った。それから小屋のドアに向かって手を伸ばした。

「鍵、開いてるみたいだから」

「いや、でも」

彼女は僕の胸にそっと顔をうずめた。小さな手の感触を背中に感じた。

「もう少ししだけ一緒にいて。今日だけでいいから」

僕は頷き、小屋の中に入つて鍵を閉めた。小屋には束ねられた網が置かれ、無造作に道具の並んだ棚の下に古びた長椅子が置かれていた。僕らはそこに腰掛け、ただじっと互いの体を抱き合つていた。携帯電話の電源を切り、やがて僕らは服を脱いだ。

事を終えたとき、僕はもう、なにもわからなくなつていた。好きとか嫌いとかつて、本当のところはいったいなんなんだろ？ 恋

してるとか、愛してるとか、よくわからない。そんなのはただの言葉なんじゃないかという気もする。実際にこうして、二人の相手に好きだと言つたり、セックスしたりしている。こうなつては、もうアキタ力を責めることもできない。

僕が考えていた本物の恋とはなにかが違う。どちらかが違うのだ。あるいは。

「あら、あなただけ？」

元いた場所に戻ると、そこには恵子先生の姿しかなかつた。芝生に伸びた一本のすらりとした脚は、僕がやつてくると、持ち主によつて三角にたたまれた。とても上品に、可憐に。

「もうひとりの子、気分が悪いらしいんで帰らせました。あの二人は？」

「ああ、どうしちゃったのかしらね、ほんと」

恵子先生は困つたような顔をして、自分の隣をぽんぽんと手で叩いた。僕はそこに腰を下ろした。

「突然ケンカ始めちゃつたのよ、あの子たち。いまだぶん、なにか深刻な話をしてるんじゃないのかな。……私は来るべきじゃなかつたみたいね。加奈子ちゃんを傷つけてしまつたから」

「先生も知つてたんですか」

「察しあついてたの。だつて加奈子ちゃん、佐野くんの話ばかりするから」

「もしかしたら先生をライバルだと思つてるのかも」

それを聞くと、先生の表情はかすかに歪んだ。自分が軽率な発言

をしてしまったことに、僕はそこで気がついた。

「……それは少しショックかな。そんなことで嫌われちゃったら袁しいから」

「いや、『冗談ですよ』

僕があわててそうとつなすと、先生はよつやく淡い笑みを浮かべた。

「ところであなたはどうなの？ なんだかよからぬ噂が流れてるみたいだけど」

「やっぱり……先生の耳にも入つてましたか」

「多少はね。あんまり女の子を泣かしちゃダメだぞ、南くん」

そこで僕は例のことについて思い出した。

「その、なんていうか……先生はケンカしたりしないんですか？ その、あの人とは」

恵子先生はぱっと上空を見上げ、それから目をきょろきょろと動かした。まるで星の数を勘定するみたいに。でもそれはいわばフェイクで、彼女の唇は言葉を探すようにかすかに震えていた。長い睫毛が大きくしばたいだ。

「そうね、ケンカは一度だけ……うん、あつた」

「その原因は？」

そこで先生は距離を置くように僕に向かって微笑んだ。

「なかなか勇気のある質問ね。授業でもそれくらい質問してくれる

といいんだけどな。どうしてそんなに知りたいの？」

「実は、その……アキタカから聞いたんです。恵子先生は彼氏とつまくいってないって」

僕らは静かな海を前に、じっと押し黙つた。沈黙は一秒一秒、胸にのしかかるようだつた。

「東野先生は今年いつぱいで転勤するの。栃木の学校に」

恵子先生はあっせりとした声でそう言った。でも無理に明るく振る舞つていてることは明白だつた。

「一時期は結婚も考えてたけど、もういいかなつて。たぶん、離れになつちやつたら、向こうの心も動いちゃうと思うんだ。私の心も動いちゃうだろうし。だつたらここできれいに別れておいた方がいいんじやないかなつて、そういうお話をしたの。でも結局、ケンカになつちやつた」

言い終えると、先生は僕に向かつてわざとこり微笑んだ。それを見ると、僕の胸は痛んだ。これまで恵子先生になにか悩み事があるなんて、考えもしなかつた。そんな話をされて、いつたい僕になんて言える？

でも彼女がひとつだけ嘘をついたことを、僕は見逃さなかつた。先生は『私の心も動いちゃうだろうし』と言つたとき、舌がもつれ、あるいは言葉を飲み込みそうにさえなつたのだ。

「残念です、なんか」

「あら、どうしてあなたが残念がるの？」

先生は声を上げて笑つたけど、僕の方はうまく笑えなかつた。

「正直言つて、始めはなんかちょっとやきもち焼いてたんです。本人を前にしてこんなこと言つうのも変ですけど。先生は僕らの憧れだし、それをうちの担任にあつさり取られちやつなんて、悔しいなつて。でも、なんていうか、そのうち東野先生も良い人なんだから、これが恵子先生のいちばんの幸せなんだらうなつて、そんな風に思えるようになつてたんですよ」

「ありがとう」

「だからこんなことになつちやつて……なんていうか、残念です」

「先生もなんていうか残念です」

「うなだれる僕を真似るよつよ、先生もおどけてうなだれた。それからゆつくりと親密な表情が浮かび上がる。いつもの恵子先生の顔だ。

「先生も南くんのこと、好きだよ」

「あ、え、本当ですか？」

「もちろん生徒として」

「やつぱつ

「……だけじ、それはさつままで」

先生はやつぱつと、少し屈みこんで僕の唇にキスした。一瞬の出来事だ。

「これはちやんと秘密を守つていってくれたお返し」

僕は呆然としながら、じつと恵子先生を見つめていた。

「……これは夢だ。間違いない」

「 そうよ。だから誰にも話しあわせだめだからね。夢の内容なんて、みんな信じないから 」

雨が降り続いていた。ざあっとうとう雨音の中で、軒下に垂れる水滴だけがぽたぽたと耳にひつつく。携帯電話は、昨晩から何度も同じメロディーを奏でている。そして必ず、いつも同じ箇所でふつと途切れる。すぐに電話を掛けなおすか、メールを送り返すべきなんだと思います。でも僕にはそれができない。ただ時間が経てば経つほど、胸が重く苦しくなつてくる。

僕は朝子の部屋をノックした。

「いないの？」

僕がそつ尋ねると、くぐもつたうまく聞き取れない声が返ってきた。

「ねえ、朝子」
「……ちょっと待つて」

トタトタと廊下を歩く音が聞こえて、ドアが少しだけ開いた。朝子はいつも赤いフレームのメガネをかけて、レンズ越しに眠そうな目をのぞかせた。髪は寝癖でボサボサだ。

「なに？」
「入れてよ」

朝子はなにも言わずにドアを押されて部屋に戻った。僕も部屋に入る。

「今何時よ?」

「10時半」

朝子はハアッとため息をつき、ベッドに倒れかかった。もぞもぞと体を動かし、大儀そつに首を僕の方に回した。

「昨日ね、夜中の2時までバイト残業だったの。祭りのせいで忙しかった」

「またバイト変えたのかよ。コーヒー飲んでもいい?」

好きにして、といつよつに朝子は力なく手をひらひらさせた。僕はヤカンに水を入れて火をかけ、カップを用意した。

「どうしてそんなに金が要るんだよ」

「年頃の女の子は色々とお金がかかるの」

「ふーん。で、まだあの人とは付き合ってないの?」

「『』の前また改めて告白された。でも今は付き合えないって説明したんだけど……」

朝子はそこまで話して、押し黙つた。

「……したんだけど、なに?」

「結局押し切られちゃった。若さつて怖いね」

「え、じゃあもう付き合つてるの?」

「そうこうつ」と

僕は思わず口にやや笑つた。自分の姉に彼氏ができるといつのは妙な気分で、嬉しさと恥ずかしさのよつなものが同時に胸に込み上げる。しかも姉がこの姉であるだけに、なおさらである。

「なにひとりで笑つてんのよ。気持ち悪い」「だつてなんかおもしろいから」

朝子はため息をついた、ベッドの上で寝返りをついた。

「あたしにもコーヒー入れてくれる?」「いいよ」

ちようど湯が沸いたので僕は一杯分のコーヒーを入れた。朝子は匂いをかいだから、ゆっくつと口をつけた。

「ありがと……でもね、あの子やつぱりもつと強引かも」「どうして?」

「あたしがオーケーした日にね、キスしたいって言われたの」「うん。それで?」

「笑つてしまかした。でも何度もお願ひするから、また今度つて言ったんだけど……無理やり肩をこうガシって掴まれて……」「見事に唇を奪われてしまつたと」

朝子はそこで二度ため息をついた。

「ほんと疲れちやう。なんていつか、あたしそうこいつの慣れてないのよ」

「別にいいじゃん。キスくらー」「よくない」

「気持ちわかるよ、おれだつて」

「あたしだつてわかる。少しほね」

そこで僕らは、お互がまるで別々の話をしていたような錯覚に陥つた。朝子は煙草に火を点けると、改めて言葉をついた。

「あたしのことを好きっていつ『気持ちはず』へ向かってくるわけ。でもその表現方法がちょっと子供すぎるの。ストレートすぎるっていうか、一方通行っていうか……そういうのって、女の子としてはなんかがつかりしちゃうのよ」

「さいですか」

「ま、あんたに話してもわかりっこないか」

「わかるよ。つまりどっちも大人じゃないってことだな」

「は？ それどういう意味？」

機嫌を損ねるよつに、朝子は僕に向かって目を細める。

「だつてそういうだろ。どっちかが相手を許してやらなきゃ、進歩しないじゃん」

「これでもね、一生懸命押しとどめてんの。これ以上一步でも引いたら、もうむちゅくちゅになっちゃうんだから」

「じゃあ好きは好きなんだ。朝子も」

不意をつかれたように朝子はちょっと顔を赤らめる。

「そりゃ好きだよ。どっちかって言えばね」

「意外とはつきりしないんだな。人にはその辺つっこむくせに」

「うるさいな。しようがないでしょ、あたしだって人間なんだから」

僕は立ち上がり、コーヒーを飲み干して台所に持つていった。

「そろそろ戻るわ。多少気も晴れたし」

「で、あんたはどんな感じなの？」

「今はこんがらがつてて。だからもう少ししたら話すよ」

僕は朝子に向かつて手の平を向ける。朝子もそれと察して、煙草を一本放り投げた。

「ライターは自分で持つてる」「この悪ガキめ」

外に出ると雨音はいつそう激しさを増し、アパートの共用部から見える景色は、雨によつてくまなく灰色に染められていた。灰色の樹木、灰色の屋根、灰色の犬小屋の中でもぐくまる灰色の犬。煙草に火を点すと、煙は雨の中をのろしのようにゆらゆらと上がりつた。手すりに煙草の先端を押しつけ、部屋に戻ろうとしたとき、誰かが階段を上がつてくる音が聞こえた。

「あ、先輩」

夕美は縞柄の入つた傘を差し、髪をいつものように無数のピンで止めて、僕のアパートに姿を見せた。屋根のあるところまで来ると傘を閉じ、くるくる回して水滴を払つた。

「え、どうしたの？」

「電話したんだけど、出なかつたから……心配で来ちゃつた」

夕美は氣まずそうな笑みを浮かべながらそう言って、傘のホックを留めた。彼女はぴつたりしたTシャツにショートパンツという格好で、ヒールのついたサンダルは底の方が雨で黒ずんでいた。薄化粧をした顔は、雨が生み出す灰色の世界にあっても、いやそのような世界の中につつていて、いつも以上にまぶしく光り輝いていた。

「「めん……ずっと朝子の部屋にいたんだ」

「そりなんだ」

「とにかく入つてよ

僕は夕美をカウチに座らせ、なにか飲むかと訊いた。彼女はいらないと言つて、首を振つた。

「どうかしたの？」

僕がそう訊いても、夕美は首を振るだけだった。僕の心臓は不吉に胸を打ち始める。彼女の隣に腰を下ろし、僕は相手の言葉を待つた。

「……突然来ちゃつて、ごめん」

「いいよ。それは全然かまわない」

そして沈黙。こういった場面では、あらゆるをさいな仕草や呼吸ひとつでさえもが、当人たちにすら計り知れない深い意味合いを持つことになる。僕はふたたび、静かに息をしながら、相手の言葉を待つた。自分からなにか言葉を発したら、大事なものを失つてしまふ予感がしたのだ。

「メール、見てくれた？」

夕美の声は薄っぺらくて感情がうかがえなかつた。そう思つのは、それが多分作られた声であるせいだろう。

「いや、見てない」

「昨日はなにしてたの？」

「前に言つたとおり、アキタカと一緒に花火大会に行つてたよ」

「誰と？」

「いや、だからアキタカ……」

気づくと夕美はまっすぐに僕の目を見据えていた。透き通った円い一対の両眼は、責めるようでもあり怯えているようでもあった。僕が口をつぐんでいると、夕美はきつい声で、問い合わせるように繰り返した。

「昨日は、誰と、花火大会に行つたの？」

「ねえ、ちょっと待つて」

「嘘つかないで！ 加奈子から聞いたんだよ。先輩は雛子と一緒に

」

言い終える前に夕美は泣き始めた。カウチに座りながら、ぐずおれるように僕の胸に倒れこんだ。

「ねえ、こんなの嫌だよ！ 夕美の先輩を取られたくない！」

「違うよ、ねえ。落ち着いて」

「どうして電話に出てくれないの？ 夕美だけ見てよ。もう雛子と会つたりしないで！」

夕美はそこでぱつと顔を上げ、潤んだ瞳を僕に向けると、震える声で言つた。

「……ねえ、先輩の彼女は夕美でしょ？」

僕はなにも言えなかつた。

「ねえ、なにがあったのか教えて」

「なにもないよ……たまたま会つただけで……」

「そんなの絶対に嘘！」

「嘘じやない。それは本当だよ。元々アキタカと一人で花火大会に

行くはずだつたんだ。でも高校の先生がいて、加奈子ちゃんがいて

……そこにヒナがいた

「どうして……どうしてそこに雛子がいるの？」

「おれだつて知らなによ。恵子先生が来ることだつて、その少し前に聞いたんだから だから元々余つてつもりなんてなかつたんだよ

僕がそう説明すると、夕美はゆづくりと呼吸を整え、かすれた声で言つた。

「本当に？」
「うん」
「なにか……話したの？」
「いや、話してない」
「なにも？」

僕は頷いた。夕美はまっすぐな目でずっと僕を見つめていたが、安心するよつに肩の力を抜くと、僕の体に抱きついた。

「なにも心配ないよ。電話に出なかつたのもわざとじゃない」「ごめんね……おつきい声だして」「いいよ。しようがない」「……夕美のこと、嫌いになつた？」
「なるはずないよ」
「よかつた。先輩に嫌われたら、夕美もう生きていけない」

雨足は徐々に弱まりをみせていた。外に出たくてたまらない子供たちの甲高い声が、アパートを抜けて路地裏に消えていく。これほど恋人に思われていながら、僕の心はどうしても満たされなかつた。

「……ねえ、そつちはダメ。今日はあの日だから」

そしてそんな気持ちを埋めようと、僕は彼女の体を求めた。

「別にいいよ。生理だつて」

「よう、アキ」

「なんだよこんな時間に。どした?」

「いや、なんか突然おまえの声が聞きたくなつた」

「気持ち悪つ。なんだよ、マジで」

「ちよつと、おまえに告白しようと思つしれ」

「は? 告白?」

「おれや、実はもう彼女いるんだ」

「え、マジで?」

「うん、一年の子。あともう、おれ童貞じやねーんだ」

「……は、嘘つしょ?」

「いや、マジで。しかも一段かけてる」

「……そうか、とうとうきたか。だからあんまり妄想しそがむなつて言つたのに」

「なんつーか、女つてめんべくセーのな。おまえの言つたことが今さらになつてわかつた氣がするよ」

「いやいや、わかつてねーだる。悪いことは言わないうから目を覚まして現実の女を」

「誰かいい子いない? ひとりふたり紹介してよ。今のおれなら誰でもいける気がする」

「わかつたよ。いくらでも貸してやる。麻美ゆまでも美竹涼子でも好きなのを持つてけ。それともエロゲがいいか? そっち方面はあんまり持つてねーけど」

「……いや、やつぱりいいや。自分誰が相手でも同じだらうから」

恋とか愛とかってなんなんだろうな、ホント。なあ、アキタカ?」

「本当に気持ち悪いな、おまえ。いいからもう寝ろって」

「やっぱ大事なのは友達だよな。男と女なんていづれ別れるんだし」

「……おーい。もう寝るぞ、おれは」

「そういえばこの前も、恵子先生ともキスしたんだ。柔らかい唇だ

「たなあ」

「ダメだこいつ。もう寝てやがる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5560d/>

スペ恋スル少年少女

2010年10月14日00時31分発行